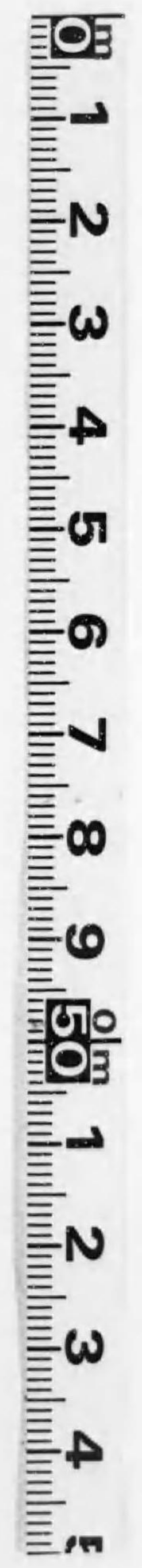


527

1913



始



32

193

識婦
叢人
書知

經濟
と
消費



法學士 稻葉文四郎著



127-1918

はしがき

はしがき

『経済』といふ言葉は、今日では凡ゆる家庭の臺所の隅々にまで響き渡つて居りますけれども、
 どうも其れが正しい響であるか否かは疑はれます。物を無駄にしないのも経済、廢物利用も経
 済、徳用なものも格安なものも経済、何でも彼でも経済々々で片がついてゆくのは誠にそれこ
 そ経済でございますけれども、今日は最早やその時代ではなからうではありますまいか。福澤
 諭吉氏は上野の戦争の砲聲を聞きながら門人に経済學の講義をしたと申します。それから考へ
 ますと、殊にさういふ壯烈な先覺を持つ経済學は、もう少し深く普及して居つてよい筈のやう
 に思はれます。

それには其れ相當の理由があるでせう。その理由の主なる一つとして、日本人は人前で以て
 金錢關係の話をするのを忌み、例ひ商人であつても金勘定をしないやうな商人になることを理
 想とするといふやうな、一種の習慣性を算へることが出来ると思ひます。然し、物も言ひやう
 考へやうです。卑しく考へれば白百合の花も卑しいでせうし、卑しくなく考へれば算盤も卑し

くはない筈であります。金銭そのものを卑しいものとして考へるのは何の根據もないこと、私達は少くとも今日の社會に生活して行く以上は厭でも金銭といふものと無關係で居れないならば、寧ろ消極的に回避するよりも積極的に進んで、それを卑しくなく考へるのが執るべき道ではないでせうか。そしてそれを卑しくなく取扱ふのが策の得たものではないでせうか。それには金銭といふものに捉へられて、從來の金銭の持つ觀念に拘泥しては駄目だと思ふのであります。何よりも先づ金銭を誤解してはなりません。凡て、或るものを正しく理解しなくては其のものを正しく取扱ふことが出来ないのです。金銭でもその通りでありまして、無視することも許されませんがその力を過信するのは一層つまらない。今日のやうに黄金萬能思想の彌漫してゐる時代には、私達の生活の平和を保護する上に於いても、金銭の凡ゆる附加的粉飾を取去つて、徒にこれが爲に煩はされることが一層肝要なこととさせていただきます。そしてこの企てに於ける最も根本的な最初の仕事は、實に經濟學の會得といふこととなければなりません。勿論、經濟學の大體の會得は、單にそれだけの意味で必要であるといふのではございません。何かしらす私達を壓迫して私達を不愉快にするものの正體が、經濟學を讀むことによつて計ら

ずも私達の眼前に曝露されることが恐らく少くはありますまい。そしてその正體を見届けることによつて、私達の從來の得體の知れなかつた不愉快が、一二ならず除かれるだらうといふことを私は信じます。もとより經濟學の理解によつて除かれ得ない不愉快も、それはあるでせう。然しそれは解決を他に求めるべきでありまして、經濟學は本質上人を救ふ爲のものではないのであります。とは言へ私達は、幸か不幸か今日の世に生れ合せたばかりに、經濟學によらなければどうしても的確に攔むことの出来ない憂愁の種子を、多分に持つて居ることを否む譯にはゆかないのでございます。

社會主義、それは恐らくさういふ憂愁の盤根を截除する意氣の誇りでありませう。従つて労働問題も階級争闘の問題も共產主義その他の問題も、悉くこれ經濟問題に外ならないのであります。さういふ問題に對して、公平な正しい態度を探りたいと思へば、矢張り經濟學に就く外はありません。その外に、産兒制限の問題にしる優生學の問題にしる、一としてこれに關係のないものはないのであります。

思ふに資本主義的經濟組織も組織としては老境に近くなりました。今後の經濟思想や經濟組

織は次第に動搖を激しくするに相違ありません。動搖勿論可です。唯だ吾々が是を是とし非を非とするだけの立脚地を持つて居れば、言葉を換へて申しますならば、私達が經濟思想の動搖につれて淺膚の説に訛かされ、徒に嘆き徒に憤り、徒に悲しみ徒に吾と吾が心を惱ましさへする必要がなかつたならば、動搖流轉もまた楽しい前進勇躍の姿として私達の目に映じて來るでありませう。

最後に、『經濟と消費』といふ言葉は正しい對立をなして居りません。消費も經濟行爲である限り經濟學の範圍を出でないことは申す迄ありません。ただ本書は、婦人知識叢書の一編であり、婦人は少くとも現在の日本に於いては生産者であるよりも消費者である故に、經濟學の中最も關係の深い項目であるといふ理由から、特に幾分詳述したといふ迄のもの、そしてそれ故に用語上の不當を無視して——殊に本書は何等の専門書でないから——敢て題名の如くしたといふに過ぎないのであります。誤解を避ける爲に一寸申し添へて置きます。

大正十三年七月十七日

著 者 織

經濟と消費 目次

1 次 目

第一章 經濟學の概念 一

一 欲望及び貨財 一

二 價 値 一五

三 經濟行爲及び經濟 三五

四 經濟學とその分科 四六

第二章 經濟學の歴史と學派 五八

一 正統學派(英國派) 五八

 A アダム・スミスの『富國論』 五八

 B マルサスの『人口論』 六六

 C リカードの『地代論』及び『勞動價值説』 七五

- 二 歴史學派(獨逸派)..... 八三
 - A 先驅者リスト..... 八三
 - B 建設者ロッシェル..... 八六
 - C 社會政策論者..... 八八
- 三 壙國學派..... 九三
- 四 佛國派と米國派..... 九四
- 五 社會主義經濟學..... 九七
 - A 社會主義經濟學の成立..... 九七
 - B 唯物史觀と階級争闘說..... 一〇八
 - C マルクス經濟學說..... 一二七

第三章 生産

- 一 生産の意義及び要素..... 一三六

- 二 自然..... 一四〇
 - A 自然概說..... 一四〇
 - B 土地..... 一四二
 - C 外國と自然物と自然力..... 一四四
- 三 勞力..... 一五三
 - A 勞力概說..... 一五三
 - B 勞力の數量..... 一五五
 - C 勞力の功程..... 一五六
 - D 勞力の組織..... 一六〇
- 四 資本..... 一七〇
 - A 資本概說..... 一七〇
 - B 資本の成立..... 一七五
 - C 資本的生産..... 一八〇

- ④ 價格の決定……………三三五
- 物價の高低……………三三九
- ③ 貨幣……………三四四
- A 貨幣概説……………三四四
- B 貨幣制度……………三四七
- C 紙幣……………三五三
- 四 信用……………三五八
- A 信用概説……………三五九
- B 銀行……………三六一
- C 銀行業務……………三六三
- 五 商業……………三七二
- A 商業概説……………三七三
- B 内國商業……………三七四

- D 産業組合……………一九一
- 五 企業……………一九七
- A 企業概説……………一九七
- B 會社企業……………二〇一
- C 企業結合……………二一一
- 六 私有財産制度……………二一〇
- A その意義及び基礎……………二一〇
- B その反對諸説……………二一四
- 第四章 交 換……………二二〇
- 一 意義、起原、及び種類……………二二一
- 二 價 格……………二二三
- A 需要と供給……………二二三

○ 外國貿易……………二七七

六 交通機關……………二七七

A 運輸機關……………二七七

B 通信機關……………二八一

第五章 分配……………二八三

一 分配と所得……………二八四

二 賃 銀……………二八八

A 賃銀概説……………二八八

B 賃銀の支拂……………二九〇

C 賃銀の高低……………二九四

D 労働問題……………二九八

三 地 代……………三〇一

A リカード説……………三〇一

B その反對説……………三〇二

○ 地代取得の反對説……………三〇五

四 利 子……………三〇九

A 利子概説……………三〇九

B 利子の歩合……………三一三

五 利 潤……………三一四

A 利潤の本質……………三一八

B 利潤の増減……………三一九

六 保 險……………三二二

第六章 消 費……………三二三

一 消費の意義……………三二三

目次畢

- (一) 消費の種類……………三三六
- (二) 消費と生産……………三三八
 - A 生産過少……………三三九
 - B 生産過剩……………三三一
 - C 恐慌……………三三三
- (三) 消費と所得……………三三五
- (四) 消費と人口……………三三八
- (五) マルサス説とその是非……………三三九
 - A 新マルサス主義の主張……………三四一
 - B 新マルサス主義の是非……………三四七
 - C 消費と婦人……………三五一

經濟と消費

法學士 稻葉文四郎著



第一章 經濟學の概念

欲望及び貨財

吾々人類が生活を營んでゆく上には、寒さ暑さを始めとして種々雑多の困難と戦つてゆかねばならない。この場合に、その困難を意識してそれに打勝つて行かうといふ希望、それを別に欲望と名けやう。だからして此の欲望は先づ第一に不快又は不安の状態にあることの意識が必要である。従つてさういふ意識のないところには欲望もまた有り得ないので、例へば石に欲望

があるといふことは古往今來未だ曾つて聞いた例がない。第二に、人が不快不安を意識すれば、本然の性によつてその状態より脱出しようといふ希望を抱かすには居られない。意識は勿論そのままで欲望ではないが、單なる希望もそのまま欲望であることは出来ぬ。早い話が現実に根ざした希望、實際的な希望、具體的な希望でなくてはならない。結局、ある状態を意識してその状態を免れんとする希望でなくては欲望にはならないのである。

けれども事はそれだけでは納まらない。例へば籠の中で生れて引續いて籠の中に飼はれてゐる小鳥について考へて見るに、世に籠の鳥といふ譬さへある程であるから鳥の身になると籠の中に飼はれることは嘸不自由であらう。不快であり苦痛であらう。けれども生れて以來外の世界を知らないその鳥には、果して現在の境遇を苦痛として籠の中から逃れようといふ實際的な欲望があるかどうか、それは頗る疑問であると言はねばならない。小鳥を飼つた人には經驗があるであらうが、さういふ生ひ立ちの小鳥は籠を離れるのが反つて不安さうに見えるものである。小鳥はどうでもいゝとして、人間がかう言つた欲望を持つた場合には、事實に於てもつと多くのことを考へるのが常である。例へば『あゝ腹が空つた。』と感ずるのは第一の意識であつ

て、それにつれて『何か食べたい。』といふのが第二の希望であるが、この場合吾々はきつと過去のことを考へる。つまりかういふ欲望の満足から生じた過去の快感の追懐をする。いつかも腹の空いた時に――九月のあれば二日の夕方であつた――するとんを食べたら酷く美味しかった、などと思ふ。それと同時に、あれほど酷く腹が空いた譯でもないが、この際何か食べたら随分美味しからう、何かしら喰べたい、あゝいふ美味しい思ひをしたいと希望する。つまり第三に過去の快感を追想し、第四にその過去の快感を再現しようとして希望するのである。

然しこれだけではない。實際問題としてこの希望を実現する爲には、どんな犠牲を拂はねばならないかを考量する。そんなことを想像しなくてもよい場合もあるかも知れないが、原則として想像するのが本條である。上の例で言ふならば、いきなり料理屋に飛込んでもいゝが會計が大凡………といふことになる筈、それに従つてまた目前の希望を実現すべく暖簾をくぐるべきか、或はまた我慢してオペラ・バックの重量を軽減せしめない方が得策かといふことを考へる。即ち第五に希望の實現に必要な犠牲の想像と、第六にその希望の實現と犠牲との比較といふことが来るのである。尤も、これらの六つのものが別々に代る代る心の中に現れて

來るものとは限らない。順序が狂ふ場合もあるだらうし、その中の或るものは殆んど心の表面に現れないこともあるだらう。例へば第五第六などは、極端に貧しい人なら考へても見ないかも知れないし、また非常に富んだ人ならば無關心にして過せるであらう。然し一般に言つて、欲望といふものは以上の如き複雑した心理現象であつて、少くも以上の六つを引くるめたものが一つの欲望としての形をとるとせなければならぬ。

ところが、物を買つて喰ひ、それによつて空腹を充すなどといふことは、大昔には絶えて無かつたことである。して見れば昔と今では人間の欲望にも幾らか變遷があつた譯であるが、然しこれは勿論當然中の至當である。太古草昧の世にあつては凡てが簡單で、人間も單に口腹の欲望を満足させることが出来さへすれば、他に多く求めるところがなかつたに相違ない。けれども文明が進むに従つて種々と生活が複雑になつて來、社會の範圍も廣くなつて來、それと共に不快や不安を意識することも頻繁になれば、欲望もまた多様錯雜して來たことは言ふまでもない。欲望の複雑して來たのは文明が進んだが爲と言へばそれ迄だが、もう少し分解的に檢察して見るといふと、人間の欲望を複雑化した第一の原因は科學及び技術の發達である。これは

涯のない原因結果の關係を結んでゐるもので、人間の欲望が發達すれば何とかしてこれを満足させようと努力する結果、自然に科學や技術が發達せざるを得ぬ。例へば、一々使者を派するのは時間もかゝり要領も得難いから、居ながらにして多くの人々と直接に通信を取交したいといふ欲望、こんな蟲のよい欲望は遠い昔は起る由もなかつたものであるが、どうにかすれば出來ないことはないといふ現實の欲望となるに及んで、ついに電信となつて現れた次第である。

然る折に、科學や技術が發達するに従つて人間の欲望はそれに刺激されて益々増長する。遠いところで通信ができる位ならば、いつそ遠いところで直接に話をする工夫はないものかといふ欲望を起す。やがてそれが實現されて電話となるや、今度は聲だけではつまらないから顔も見えるやうにといふ欲望となり、今やその欲望を満足させる發明がぼつ／＼出來かゝつてゐるといふ風に、この二つは月は日を追ひ日は月を追うて歳月に極なると同様、實際際限のない因であり果である。

人間の欲望をして複雑ならしめた原因の第二として、交通の發達を算へることが出来る。交通が發達すれば他の社會の状態を知ることが出来る。さうすれば民主主義が世界の趨勢である

とか、駱駝の襟巻が暖かでないとか、産兒は制限すべきであるとか、マニラ煙草は香がいいとか、いろいろの事が起つて来る。つまり見聞が廣くなるによつて人間の欲望もこれに刺激されて複雑多岐に進む。そして欲望が進めばまた凡ゆる困難を排して遠隔の土地と交通し、欲望の満足を求めるといふ風に因果の關係を結ぶのである。

かうして見れば、人間に欲望さへなければ何の面倒もなく平和に暮せるやうにも思はれるけれども、然し若し人間に欲望といふものがない曉には決して活動するものではない。人間が精神と肉體とを疲らして營々活動する所以のものは、畢竟その人各々の欲望を満足させようが爲に外ならない。尤も、欲望は充分にあるが幾ら活動してもその欲望を満足させることは出来なない状態にある者は矢張り自發的に活動をしない。だから人間に欲望あり、その欲望を満足させるだけの保證條件が社會にあつて始めて活動がある譯で、活動があつて始めて社會が生きる。従つてここにも原因結果の關係が結ばれてゐるので、人間をして活動をせしめるものが社會なら、社會をして進歩發達せしめるものが人間の活動である。要するに、人間をして最もよく活動せしめる社會が最もよき社會であり、さういふ社會に於いて最もよき成員は最もよく活動す

る人間である。そして活動の原因が人間の欲望にあるものならば、欲望の増進といふことは社會から見ても個人から見ても決して憂ふべきことでないのみならず、欲望の短小はやがてその個人乃至社會の衰微と見て差支ない譯である。

然し、如何に欲望の増進は歓迎すべきであると言つても、自ら限度があり節度のあるべきことは論を俟たない。自分の欲望を満足させる爲に社會に與へる傷害を顧りみなかつたり、又は不正の手段を弄してまで欲望の満足を計るといふが如きは、決して個人を幸福にする所以でも社會を發達させる所以でもない。吾々人間は社會的生活を營むものである以上、或る程度の欲望の制限は蓋し止むを得ないところである。然し、その欲望の満足はどの程度まで正當であり、どの程度よりは排斥せられねばならないかといふことは、考へやうによつて廣狹如何やうにもなる。例へばストア哲學者の言ふやうに凡ゆる欲望を罪惡視するやうな極端に狭い見解もあれば、法律にさへ觸れなければ買占も暴利も敢て差支はない、畜妾も遊蕩も敢て憚らないといふ現代の資本家階級に見るやうな極端に廣い見解もある。且つそれは一律に規定せらるべきものではなく、論理的に宗教的に法律的に、いろいろの方面からいろいろ規定せられる譯であ

るが、經濟學としてはその方面に深入りする必要はない。

欲望には、それを満足させないことには生きて行けないといふ欲望がある。例へば食欲とか性欲とかいふ種類のもので、これは先天的に本能的に各人の備へてゐる欲望であつて原則として發達したり變遷したりしないものである。それに對して、外部の刺激と經驗とによつて發達變遷する後天的な欲望がある。例へば今の駱駝の襟卷のやうなもので、無いにしたところで生命に別條のない欲望である。ワグナーは前者を生存的欲望と呼び後者を文化的欲望と稱した。一切の欲望は、理論的にはこの二つに分けられることが出来るであらう。然し實際には中々さう簡単にゆかない場合が多い。

獨逸の經濟學の大家ロッシェルは欲望を分類して自然的欲望、地位的欲望、奢侈的欲望の三つとした。第一の自然的欲望は前の生存的欲望を含んで更に廣いものであつて、食欲さへ充たされれば金錢は無くとも命に別條はないと言へば言へるやうなものの、現今のやうな資本主義の世の中になつてはそれは一片の屁理窟である。金錢がなくては食欲は充たれないのが事實である。従つて生命と健康とを維持する爲に無くてはならないだけの賃銀に對する欲望は、これ止

に自然的欲望であると言はねばならない。第二の地位的欲望といふのは、言ふ迄もなく吾々が社會上に地位に相當した品格を維持する爲に満足せざるべからざる欲望である。例へば華族は長家住ひも出來かねるし、大學教授は間借りでもあるまいといふ類であるが、然し勿論明確なる標準があつて存する譯ではない。大凡の振合とか従來の習慣とかいふ漠然とした標準によつて定まるものであるから、華族の長家住ひや貴婦人の茹小豆賣も時と場合で強ひて不可はない。それと同時に、それであるからして、自分の地位的欲望の範圍を越えた欲望に捉へられることも有勝のことである。自分の生命や健康を維持する上にも、或はまた地位に相當した品位を保つ上にも、毫も必要のない欲望は即ち奢侈的欲望であつて、これは個人の爲にも社會の爲にも何の益にもならない。従つて力めて抑へなければならぬ箇のところ、中々抑へられないものと見えて中流以下の女達でもへらくした錦紗とかを着てゐるやうに見受けられる。

以上の二つの分類は普通に行はれてゐる分類であるが、ワグナーの分類は理論的には明確であるが實際に當て飲めて見ると幾分物足りない感があり、ロッシェルの分類は理論上は不明確であるけれども便宜である。且つ、人は各々その分限を守つて奢侈に流れぬやうにすべきを經

濟學上から教へてゐるやうな、一種道義的教訓を含んでゐる點で多くの人々に採用されてゐる。

人間の欲望の對象は勿論種々雑多であらうけれども、その欲望を満足させることの出来る外界の有形物をば凡て財又は貨財といふ。即ち貨財といふものは、第一に吾々人間の欲望を満足させるものであつて、第二にそれは外界の有形物件でなくてはならないのである。そこで、或る物件が吾々の欲望を満足させるといふからには、吾々は先づその物件に吾々の欲望を満足させるに足る効用のあることを知つて居らなければならぬ。その効用を知つて居らなければ吾々はそれを欲望を満足せしめる手段として用いないから、結局貨財たることは出来ない。例へて言ふならば、私の故郷は木材の名所で挽材會社が三つあるが、最初の中は毎日頻しく出る鋸屑を實に持餘し切つて居つたものである。焼いても煙つてばかりゐて燃えないし、川に流すと養魚場や百姓側から烈しい抗議が出るし、止むを得ず人夫を使つて遠い谷地に捨てさせたり埋めたり焼いたり苦心慘愴して居つた。勿論貰ひにでも來るものがあると喜んで俵まで呉れて持たしてやつたものである。この場合、この鋸屑は貨財ではなかつた。何故となれば、

それを手段として用ひた人の欲望を満足させることの出来る効用を知らなかつたから。然るに或る時喜ぶべき發明が出来た。それは或る装置によつて鋸屑を燃料とすることの出来る竈が發明されたのである。それが爲に鋸屑は、それをを用ひて欲望を満足させる効用があることを知られたからして、挽材會社の方でも捨てることをやめて屋根の下に蓄へるやうになり、無代で呉れることをやめて相當價で賣るやうになり、要するに鋸屑は一の貨財となつたのであつた。斯くの如く、貨財は人間の欲望を満足させ得る限りに於いて始めて貨財である。

第二に、貨財は外界の有形物件でなくてはならない。謂はゆる外界とは吾々の身體以外の意味で、有形物件とは吾々の五官感覺によつて知覚し得る物の意味である。従つて外界の有形物件といへば吾々の身體に屬しないで吾々を圍繞するところの自然及び自然物であると言はねばならない。中には貨財といふものを廣く解釋して、苟も吾々の欲望を満足せしめるに足るものは悉く貨財であると言ひ、内的貨財の中に腕力、藝能、知識なども含ませ、また外的貨財の中に勞働、特許權、得意關係なども含ませる一派がある。凡て貨財といふものは經濟學に於いて研究されるべき性質のものであるが、若しさういふ内的貨財を研究の對象とせねばなら

ないとすると生理學、力學、心理學、認識論などにまで這入り込んで行かねば落着かないことになる。またさういふ外的貨財は、無形ではあるがこれを他人に譲り渡す場合には相當の對價を得る點で幾分有形物件に類するけれども、對價を有するもの、悉くが貨財と稱すべきであるかは頗る問題である。殊に勞働を商品と見、従つて貨財と見るのは勞働者の人格を無視するの甚しきものであるといふので、『勞働は商品にあらず。』といふことが國際勞働會議に於いて眞先に決議されてゐる。それ故にそれらは貨財ではないといふことにして、貨財は尙くまで外界の有形物件と定めて置いた方が穩當であらうと思ふ。

今度はその貨財を分けて二つにする。一は自由貨財又は非經濟貨財であり、他は經濟貨財又は貨物である。その中で自由貨財といふのは自由に處分することの出来る貨財、即ち何等の犠牲や對價を拂はずに獲得し使用することの出来る貨財であつて、その量は多くの場合無限である。例へば日光、空氣、水、氷、雪などはこれで、皆生活に必要なものであるが自由に處分することが出来るかうして自由貨財である。尤も、これらのものも時と場合とでは對價を出さねば使用できないこともある。例へば都會に居つて水を使はうと思へば水道料金を出さねばなら

ず、夏に氷を得ようと思へば買はなくは手に入らず、殊に熱帶の亞刺比亞地方などでは清水は葡萄酒よりも高いことがあるといふ。かういふ場合は本來の性質から言へば自由貨財であるべきものが、事情によつて經濟貨財となつたのである。また現今では餘り見當らないけれども、逆に元來は自由貨財ではないものでも都合上自由貨財として取扱はれるものも無いではない。例へば昔は原野や森林や河川沼湖や自由貨財として人々の自由な使用に任じてあつたものである。何れにせよ、自由貨財は何等の犠牲や對價を拂はずに使用できるものであるから、それは非經濟貨財で即ち經濟學の研究の範圍外にあると言はねばならない。

次に、經濟貨財又は貨物は、その數量には限があつてそれを得る爲には何等かの犠牲又は對價を拂はねばならないものである。この經濟貨財の中に、吾々の欲望を直接に満足させることの出来るものと、間接にしか満足させることの出来ないものとの二つがある。例へば袖を通すばかりに縫ひ上つた着物や、箸をつけるばかりに作られた卵焼は前者であつて、これを享樂貨財といふ。同じ享樂貨財でも一回の使用で形を失ふ卵焼のやうなものを消費貨財といひ、何回も使用することの出来る着物のやうなものを使用貨財と稱するのである。これに對して、享樂

貨財の原料として間接に吾々の欲望を満足させることの出来るものは生産貨財である。生産貨財を享樂貨財とする爲には、他に必要な生産貨財を取用ひなければならぬのは勿論、それにとつて必要な勞力を加へなければならぬのである。例へば反物は一種の生産貨財であるが、これを享樂貨財にするには針、鉄、尺度、ヘラ、縮臺、その他の生産貨財を用ひて、一日なり二日なりの勞力を費さなければならぬ。然し、享樂貨財と生産貨財とはさう始から一定してゐる貨財の性質ではないので、場合々々でどつちにもなるものが多いのである。今の着物を作るに用ひた針にしても、着物を縫ふ場合には生産貨財であるが、鐵といふ生産貨財を原料とする享樂貨財の使用貨財と見れば見られる。その鐵を溶かす場合には石炭は生産貨財に相違ないが、さてそれを暖爐に用ひる場合になると石炭も享樂貨財の消費貨財となる。といふ風に、生産貨財と享樂貨財との區別は、理論上は出来ても、或は個々の場合々々なれば出来ても、一般的には逆も定めることの出来ないものである。その個々の場合でも複雑な機械工業の過程に這入つてしまふと、何が何だか分らなくなる場合が多い。



そんなに複雑な過程でなくとも、右の圖で見るやうに鐵槌で叩いて鶴嘴を作り、鶴嘴を振つて石炭を採掘し、その石炭を燃して鐵を鑛石から吹き分け、その鐵で以て鐵槌を作るとしたならば、一體どれが生産貨財であつてどれが享樂貨財だか分らない。今生産貨財と定めたものを作る爲に、先刻享樂貨財と認めたものを原料とするといふやうなことも、隨處に起り得るのである。

二 價 値

貨財は吾々の欲望を満足させるものであるが、先づ吾々の欲望は皆一樣ではない。大きい欲

望もあれば比較的ひかくてきの小さい欲望よくぼうもある。然るに或る欲望よくぼうを満足まんぞくさせる際に、或る貨財くわざいは完全に満足まんぞくさせるが或る貨財くわざいは不完全ふたふぜんにしか満足まんぞくさせないといふ事が必ず起つて来るに相違ない。例へば衣服いふくにしても、寒さを凌しのがうといふ欲望よくぼうを満足まんぞくさせる程度は、絹織物きんおりのものは木綿織物もめんおりのものに比して遙かに高い。かういふ風に貨財くわざいの欲望よくぼうを満足まんぞくさせる程度の認識にんしきが即ち價値かちである。つまりよりよく満足まんぞくさせる貨財くわざいは價値かちが高く、より少く満足まんぞくさせる貨財くわざいは價値かちが低いといふ。然るに、欲望よくぼうそのものに既に大小輕重たうせうけいじゆうがあるからして、小さな欲望よくぼうを完全に満足まんぞくさせる貨財くわざいの價値かちも、大きな欲望よくぼうを不完全ふたふぜんに満足まんぞくさせる貨財くわざいの價値かちより低いといふことが起り得る。例へばよき酒さけも濁にごつた水みづに劣る場合あひまがあり得る。従つて、大體に於いて貨財くわざいの價値かちは、満足まんぞくせしめるべき欲望よくぼうの大小輕重たうせうけいじゆうに正比例せいひれいすると同時に、その貨財くわざいの欲望よくぼうを満足まんぞくせしめる能力のうりき即ち貨財くわざいの効用くわうように正比例せいひれいすると言へよう。すなはち吾々の生活せいかつにとつて最も緊密きんみつな欲望よくぼうを満足まんぞくさせるに最も適あした貨財くわざいは、その價値かちが最も大いと言ふことが出来るのである。

然しこゝに考へねばならないのは、貨財くわざいの數量すうりやうといふことである。如何いかに緊密きんみつな欲望よくぼうを適切てきせつに満足まんぞくさせると言つても、その量りやうが無む限げんにあつて幾らでも自由に使へるならばその價値かちは輕

くならざるを得ない。米と水とさへあれば當分命たうぶんめいに差支さしあはなく、その何れがなくても早速參つてしまふにしても、水はどこからでも自由に汲んで來られるから米に比して價値かちが少い。これは生存せいぞんといふ一つの欲望よくぼうに關する場合であるが、満足まんぞくせしむべき欲望よくぼうの種類の違ふ場合でもこの理りに變化へんかはないのであつて、何時かのやうな非常ひじょうの際さいには純金の指輪ゆびわ一個と女米にょまいの握飯にぎわひ一個とが交換かうかんされたといふけれども、普通の場合には指輪ゆびわ一個は握飯にぎわひの百個にも千個にも價する。然も舌慾せつよくは最も根本こんぽん的な欲望よくぼうであるに反し、指輪ゆびわを欲めるといふのは地位的ちけいてき乃至奢侈しよしよ的な欲望よくぼうに過ぎない。それにも拘らず何故にかういふことが起るかといふと、一に貨財くわざいの數量すうりやうの如何いかにある。早い話が世の中に金の存在そんざいは少いが米は澤山にあるからである。欲望よくぼうや効用くわうようが如何いかに大きくても、數量すうりやうの點で比較ひかくにならないからして鐵と金剛石こんがうしとはその價値かちに格段かくだんの差さがある。要するに、貨財くわざいの價値かちは欲望よくぼうの大小たうせうと貨財くわざいの効用くわうようとに正比例せいひれいをするが、貨財くわざいの數量すうりやうに反比例はんひれいをすると言ふことができる。

その價値かちはいろ／＼の標準へうじゆんによつて分類ぶんれいされるが、最も一般的ぱんてきなのは使用價値しじゆかちと交換價値かうかんかちとに分ける分け方である。使用價値しじゆかちといふのは、その貨財くわざいの直接じきやくに欲望よくぼうを満足まんぞくせしめる程度ていどの認

識であり、之に對して交換價值は間接的である。然るに貨財の使用價值といふものは時により人によつて同じくないものである。先年の非常の際には暑い時分であつたから先づ衣服よりも食物であつたが、バラツクの際も風が身にしみるに及んで食物よりも衣服が大事になつてきた。また百姓は米があるが着物がなく困ると思ひ、織物屋は布があるが米を欲しいと思ふ場合がある。かういふ場合に交換といふことが行はれるのであつて、米と布とを交換するのは畢竟その人にとつて使用價值の少い貨財を與へて使用價值の多い貨財を代りに得るのである。そしてかういふ交換を行ふ際に、吾々がその米乃至布に置くところの輕重の念が即ち交換價值であつて、換言すれば交換價值は交換といふ現象の存在を前提として或る貨財の間接に吾々の欲望を満足させる程度の認識である。従つて交換することの出来ない貨財、例へば華族の世襲財産といふやうなものには使用價值はあるが交換價值のないことは言ふ迄もない。けれども交換價值がないからと言つて必ずしも價格がないとは限らない。交換價值と價格とは元來別物で、價格とは或る貨財が現實に他の貨財と交換せられる割合のことである。従つて世襲財産は交換することが出来ないからして交換價值はないが、財産そのものには一定の價格があるといふべきである。つまり價格に つもることは出来るが、その價格によつて交換することは出来ない故に交換價值はないといふまでである。

ある。つまり價格に つもることは出来るが、その價格によつて交換することは出来ない故に交換價值はないといふまでである。

價值はまた主觀的價值と客觀的價值とに分けられる。主觀的價值はやがて個人的價值で、例へば祖先の功名手柄を語る古鑑などといふものは、賣りに出して社會一般のそれに對する輕重を問ふたならば一文の値打もないかも知れないけれども、その子孫たる個人にとつては千金にも代へ難いのであるかも知れない。故にこれを愛惜的價值とも言ふのである。これに反して客觀的價值はやがて社會的價值である。即ち或る貨財に對して社會一般が認める價值である。例へば社會の多數者が銀よりも金が良いと認めれば金の客觀的價值は銀のそれに勝るといふことになる。これは產出量や性質やの關係上さもあるべきことながら、布の肩掛よりも毛絲の肩掛が流行するなどといふことになる。流行といふ以上は別に確な根據のある譯のものではないが、そしてそれは年と共に變遷するのを當然とするものではあるが、然もなほ現に社會の多數者が布よりも毛絲の肩掛を尊重する以上、比較的その客觀的價值が大きいと言はざるを得ない。そしてこのことは其の貨財の價格を決定する上に少からぬ影響を與へる

ものであるから、物の価格は客観的交換価値によつて最も直接に賦與されると言ふことができる譯である。

次には如何にして價值を計算するかといふ問題である。その第一は限界効用説といふのであつて、一定量の享樂貨財の使用價值は、その最後の一定量を以て満足せしめる欲望の如何なるものであるかによつて計量することができるといふのである。例へば五丈の長さの反物があるとして、裸で焼け出されたところの彼女は假にその一丈で以て着物を拵へる、第二の一丈で寢具を拵へる、幾分體裁といふこともあるから第三の一丈で帯を拵へる。そこで第四の一丈では用心の爲に羽織を拵へ、これでどうやら必要なものは出来たからといふので第五の一丈を用ひて卓子掛を拵へたとする。若し反物が四丈しかなかつたならば彼女は卓子掛を拵へるのはやめたらうし、三丈しかなかつたら羽織を作らずにしまつたであらう。だから彼女が最後の一寸を何に振り向けたかを見れば、彼女のその反物に對して認めた價值を知ることが出来るといふのである。尤もこれは一定量の享樂貨財の價值に關してのみ言ふことの出来るものであるが、昔の學者は價值を計量するのに生産費等を主にして吾々の心理作用を除外して居つたのに慚ら

ず、ワルラス及びメンガーが吾々の心理作用を基礎として唱へ出した説である。

貨財の價值は生産費で定まるといふ説の非であるとは、生産貨財の價值を考へて見れば直ぐに解る。先づ生産貨財の價值といふものは一にそれを使用して得られるところの享樂貨財の價值によつて定まるもので、前者の價值は後者の價值以上に上ることの出来ないものである。即ち反物の價值はそれで作られる着物の價值によつて定まるもので、着物の價值は反物の價值よりも高い。これが反對に、反物の價值が着物の價值よりも高く、着物といふものは有つてもなくともいふものだとなつたら反物を多大の生産費を費して作り、更にそれに勞力を加へて着物にする者は一人も居ない筈である。着物といふものに價值があるから、その原料たる反物にも價值があり、相當の生産費を費しても悔むないのである。これを着物の價值は反物の價值によつて定まると説くのは、實際に於いては同じやうに見えても理論上は逆である。

享樂貨財の價值が生産貨財の價值を定めるとしても、同じ生産貨財からしていろいろの享樂貨財が作られる場合には、その澤山の享樂貨財の中の何れが生産貨財の價值を定めるといふと、最も價值の少い享樂貨財の價值がそれを定める。何故といふ迄もなく、生産貨財の價值は

享樂貨財の價值以上に上ることのないものであるから、若し多くの享樂貨財の中の比較的價值高いものによつて生産貨財の價值が定まるものとすれば、價值の低い享樂貨財を得る爲に價值の大なる生産貨財を消費するといふ不合理の場合が生じて來るからである。要するに限界効用説は、享樂貨財の價值は吾々の心理的現象に屬してその限界効用によつて定まり、斯く定つた享樂貨財の價值はやがてその生産貨財の價值を定めるといふのである。

之に對して、享樂貨財の價值は生産貨財の價值によつて定まると説くのは英國學派の唱へる生産費説である。それによれば貨財には二種あつて、一は任意に幾らでも生産することの出来るもので、例へば反物その他凡百の工業品等である。そしてこれは明かに生産費によつて價值が定まるのであつて、もしこの貨財の交換價值が生産費を超過すれば誰しもこの生産に従事することになつて競争が起り、結局生産費に幾分の利潤を加へた價格に落つく。またその貨財の生産費よりも交換價值が落ちた場合には、引合はないから皆その生産をやめて他に轉ずるの結果、やはり生産費より少し大きい價格に落つく。つまりかういふ貨財の交換價值は生産費によつて定まる。然るに任意に生産することの出來ない貨財、例へば美術品とか古文書とかいふも

のは、その交換價值は全然生産費とは無關係なもので一に需要の強弱と數量の多少によつて定まる。けれども貨財の大部分は任意に生産し得るものであるからして、原則としての貨財の交換價值は生産費によつて定まると言へると言ふ。

以上は生粹の生産費説であつて、貨財の交換價值はその貨財を生産するに要した費用そのものによつて定まるといふのであるが、同じ生産費説には違ひないが前説を修正して、貨財の交換價值は實際にそれを生産するに費した費用によつて定まるのではなく、將來それと同様の貨財を生産するに要すべき費用によつて定まるといふ説がある。これは特に複生産費説と稱されるが、その何れにもせよ前の限界効用説とは正反對の立論である。即ち貨財の價值を吾々の心理作用から説明せずに外界の原因によつて説明するのである。外界の原因によつて説明するところが假りに正しいとしても、貨財の交換價值が生産費用の多寡によつて定まるといふのは、然し少くとも現今に於いては正鵠を得て居らない。何故といふに、この説は第一に先づ生産者の間の自由競争といふものを前提として、それが完全に微妙に自由無礙に行はれることを條件としての話であるけれども、實際は決してさう美事に自由競争が行はれては居らないからである。

極く初期の簡單な手工業や家内工業の時代には幾分さういふこともあつたか知れないが、現在の複雑で大規模な工業にあつては、引き合はないからと言つておいそれと轉業する譯にも行かない代り、或る生産が儲かると言つても鐵工場を急に紡績工場にしたり、旋盤工が俄に菓子屋の職人に早變りすることは出来るものではない。産業が複雑になればなるほどさうである。尤も、或る生産に利潤が多ければ競争者が輩出し、利潤が少ければ轉業者が續出するといふ傾向はあるかも知れない。例ひ傾向があつたにしても實際速かにそれが實現するものではない故に、生産費説は依然假定の上に建てられたる假説といふより外はないのである。

更に別の一派は、貨財の價値はこれを生産する際に費された勞力の數量に基くものであると主張する。すなはちアダム・スミスの創唱に係る勞力説であつて、勞力は價値の本原であるから生産に際して用ひられた勞力が大であればその貨財の價値も從つて大に、その勞力が少ければ貨財の價値もまた自ら小であると言ふ。然し實際に吾々が貨財の價値を評定する場合には、決してそれを生産するに要した勞力の多寡を標準としてゐるものではない。一概に勞力と言つてもいろ／＼あるし、一々の貨財について吾々がその生産に要した勞力の數量を正確に知る

といふことも不可能である。僅か二三分もかゝれば十分な雀一匹の給が千圓もしたり、一世の碩學が十年も二十年もかゝつて拵へた著書が僅か二三圓で吾々の手に入つたり、いろ／＼不思議なことがあるのであるから、單に生産勞力の多は即ち貨財價値の大とばかりも言へない次第である。然しこのことについては結論を急がずに、追々と説明して行かうと思ふ。

三 經濟行爲及び經濟

空氣を呼吸するには何も要らぬが、何か經濟貨財を手に入れようとする場合には、必ずそれ相當の犠牲又は對價を出さなくてはならない。例へば反物を欲しいと思へばこれを買はなくてはならない。その折にはその貨財によつて満足される吾々の欲望と、それを得る爲に出さねばならない犠牲又は對價とを比較して考へて、犠牲の方が小さいと思へば取得するし犠牲の方が大きいと思へば取得しない。解り易く言へば反物を買ひたいと思つて、反物の必要と値段とを考へ合せ、買つた方が得だと思へば買ふし値が張りすぎると思へば買はないといふ迄の話であ

る。かういふ風に吾々がその經濟貨財によつて満足させられる欲望と、これを得る爲に要する犠牲又は報酬とを比較した上で、その經濟貨財を取得しようとする行爲が經濟行爲である。考へては見たが思ひ返してやめにしたり、死ぬほど欲しいが買へないからと言つて萬引したりしては經濟行爲にはならない。人によつては經濟行爲とは經濟貨財を消費する謂であるといふが、それではどうも面白くない。食物を得る爲に耕作するのは確に經濟行爲であるが、食物を以て口腹の欲望を満たすことは經濟行爲とは言ひ難いのである。尤も、吾々が貨財を得るについては原則として他の貨財を消費するか他に與へるかするものであるが、これは貨財を得る爲の當然の手段であつて、單に貨財を消費するとは譯が違ふのである。して見れば經濟行爲といふものは、欲望と犠牲又は報酬との比較考察の上に行はれた意識的行爲でなくてはならない。深山を探し歩いて思ひがけないところに鑛山を見出すのは經濟行爲であるが、それとよく似て居つても吾々が偶然路傍で寶石を拾つてもそれは經濟行爲ではない。何故といふまでもなく前者は意識的な行爲であるに反し、後者は意識的にした行爲ではないから。

經濟行爲の本質がさういふものであるとすれば、吾々が經濟行爲をなさうとする時には出來

る限り貨財を得るに要する犠牲又は報酬を少くしようとするのは當然である。といふよりは、さうするのが經濟行爲の眞面目である。即ち學者は經濟の法則として、最小の犠牲又は勞費を以て最大の効果を擧げるものと言つたのは蓋し至當であらう。そしてアダム・スミスは人間のかういふ働き、即ち經濟行爲の動機を利己心に歸して説明した。今その大要を述べるならば、利己心といふのは成るべく犠牲又は報酬を少くして成るべく多く欲望を満たせようとする心で、吾々にこの心がある爲に自由競争といふものが行はれる。即ち賣手はなるべく高く賣らうとし買手はなるべく安く買はうとするが、餘り高くては買手がつかず買手がつかねば商賣は立行かない。また買手もなるべく安い店から買はうとするが、餘りに安く買はうとすれば賣手がなくて求めることが出來ない。結局物價は生産費に幾分の利潤を加へた適當の水準を保つといふことになるのである。斯くして社會の生産者及び消費者の各階級の間に自ら利益の調和が生じ、經濟社會は圓滿に發達するのであるから、國家は各人をしてその利己心に基く經濟行爲を爲すがまゝに自由放任して置いて毫も差支あることはない。かう、スミスは説くのであるが、利己心による自由競争が果して社會各階級の利益を調和するや否やは別問題として、畢竟吾々

の經濟行爲なるものは、それによつて得る利益とそれに要する犠牲とを比較して、より多くの利益を得より少い犠牲を拂はうとするところに成立すると言つたのは當を得てゐると思ふのである。

凡そ經濟行爲は以上の如きものであるとすれば、『經濟』とは何であるか？ 經濟行爲は單に意識的に然も有利に貨財を取得する行爲であるが、經濟とは多くの經濟行爲が組織的に行はれて、それに基いて人類が個人又は團體として生活を営むことを意味するのである。例へば家庭經濟といふ場合は、一家族のものが毎日一定の方針の下に一定の順序によつて多くの經濟行爲を行ひ、同時に經濟行爲によつて得た貨財を消費しつつ生活を営むことを意味する。この經濟は文明の進むに従つて變化するものであつて、それを多くの標準によつていろいろに分類するが最も代表的な分類の仕方はリストの分類である。

- 一 狩獵及び漁業時代
- 二 牧畜時代

三 農業時代

四 農工業時代

五 農工商時代

リストが經濟生活を以上の五階級に分つたのは、實は經濟史の立場からしたものではなく、寧ろ經濟政策の立場から分類して一國の經濟政策は各々の經濟的時代によつて異らなければならぬことを言つたのであつた。然しその分類は經濟史的に見ても適切であるから、一般に經濟生活の發達を示す階段として採用されてゐる譯である。仍で、太古の時代にあつては人は水草を追うて諸所に放浪し、主として狩獵又は漁業に従つてその生命を維持してゆくに過ぎなかつた。然るに當時は一部落又は一酋族が共同してそれらの經濟行爲を行ひ、得たるもの凡ては部落又は酋族の共有とし、未だ私有財産の觀念がなかつたものと思はれる。その中に食料を得る爲に、或はまた勞働を助けさせる爲に、動物を飼養することの利益を知るに到つた。この時代にも共同して經濟行爲を行つたのは前同様であるが、何しろ動物を世話するのであるから自ら誰がどの動物を世話するといふことが出来てきて、臆氣ながらも私有財産の觀念が出て來た譯

である。これが牧畜時代であるが、更に時代が進んで人類は種々の理由によつて定住することとなり、従つて食料を得る爲には土地を耕して人爲的に野菜果實を作らねばならないこととなつた。これが農業時代である。農業時代の特徵として算ふべきは、私有財産制度の發達したること、奴隷制度の發達したことである。尤も農業といふものは私有財産制度が確立して始めて發達する筈のもので、土地の生産力には限があるから濫りに使用すれば數年ならずして駄目になる故に、長く使用するには是非とも私有にして手間をかけねばならないからである。また奴隷制度は最初は戦争の結果捕虜となつたものを使役したのに始るが、使つて見れば如何にも便利であるところから捕虜と限らず一般に使用することとなつたものである。次に農業時代は農業と共に工業の發達した時代であつて、従來は農人が自ら家屋を作り農具を作り衣服を作つたのであるが、農業が次第に發達して複雑な農具を要するやうになり、一般の經濟状態が進んで立派な家屋を作るやうなことになる、農人の耕餘の片手間では間に合はなくなつた。それに人口も殖えるしするので、手の器用な一部の人は農具やその他の品物を専門に作つて、それを農人達に供給することが起つたのである。且つそれらの工人達は便宜上一つ所に集つたか

らして都市が出来、こゝに都市は工藝品を以て地方に供給し、地方は農作物を以て都市に供給するといふことになつた。それが更に進歩するといふと、農工業の外に商業といふものが生じて來た。つまり農作物と工藝品との直接の交換では兎角圓滑を缺くので、その間に這入つて取次をする役目が出來た譯である。かういふ風にして漸次發達して現代に及んだもので、現代も勿論農工商時代に屬するのである。

以上は人類の經濟行爲を基本として經濟の發達を觀察したものであるが、更に貨財の交換といふことを基本としてその發達を見ればどうなるかといふと、それは自給經濟の時代から交換經濟の時代に進んだといふことが出来る。これはヒルデブランドに始る分類の仕方であるが、自給經濟といふのは、經濟的單位すなはち部落とか一族とかの者が消費する凡ての貨財を自分達で生産して、他の經濟主體とは没交渉な經濟生活を営むことである。然しそれはいろいろの事情で次第に出來なくなり、一の經濟主體は他の經濟主體に餘るものを與へて不足するものを取る必要を覺えてきた。斯くして他の經濟主體と有無相通じて經濟を営むのを交換經濟と稱する。

交換經濟となつても、最初の中は物々交換の自然經濟であつた。つまり漁師は捉へた魚を持つて農夫のところへゆき、幾匹かの魚と幾升かの米とを交換して互に欲望を満足させるといふやり方であつた。然し乍らこれは如何にも不便な話で、恰度要求と要求とがびつたり合へば文句はないが、農夫が魚を欲しくないと云へばその漁師は魚を持つて別の遠い農夫のところに行かなくてはならない。そこでもつと簡便な方法を考へた揚句、第二の貨幣經濟といふものになつたのである。即ち互に直接に必要な貨財と貨財とを交換する代りに、その社會に於いて尊重されてゐる或る種の貨財を選んで交換の媒介とした。例へば貝殻を媒介として、漁師は魚と貝殻とを交換し、その貝殻を以て米と交換するといふ風にした。これは一見却つて面倒で手數がかゝるやうに思はれるけれども、實際は物々交換よりも簡單にゆくことは現に見る通りである。この場合、交換の媒介をするものを貨幣といふ。

貨幣といへば今日では直ぐに金屬貨幣を思ひ浮べるが、昔はなか／＼さうではなかつたものである。凡そ貨幣は昔はその社會の上下を通じて一般に消費せられるもの、又はその地方の産物で他地方に盛に輸出せられるもの、乃至はその社會の人民が喜んで身體裝飾の用に供し、即ちその財産権を代表するものであつたら何でもよかつたのである。日本では和銅年間に銅鐵を鑄造するまでは、稻錢と稱して米を貨幣として交換の媒介とした。支那では永い間貝殻を貨幣としたもので、價値に關係を有する文字の多くは貝といふ字を含んでゐる。一般に牧畜時代には牛馬や皮革類が貨幣であつたのは當然で、農業時代には穀類が貨幣であつたのもまた當然である。また海に遠いところでは貝殻や隨甲を、砂漠地方では石などを貨幣としたことも十分に首肯できる次第である。然し貨幣用としてはその價値の大である點、保存に便である點、及び攜帶に便である點から、何物も金屬に如くはないので、長い間には何處の國でも期せずして金屬の貨幣を造るやうになり、今日では貨幣とさへ言へば凡て金屬貨幣を意味することゝはなつた。一度金屬貨幣が汎く行はれるやうになれば、吾々の日常の買物取引は勿論のこと、社會一般の經濟行爲は皆貨幣を中心に行はれるやうになる。従つて貨幣制度の良し悪しは直ちに經濟社會に影響を及ぼし、この制度に缺陷があると經濟が發達しないことになる。かういふ關係の時代は即ち貨幣時代に外ならない。

交換經濟時代の第三期に屬するのは信用經濟時代である。吾々は物を買ふのに平氣で紙幣を

使ひ、爲替手形で支拂をしたり小切手で支拂を受けたりする。ところがさういふ所謂信用證券は、貨幣を代表するものであつても貨幣そのものではない。然もそれらを流用して毫も支障を來さないところを見ると、今日では貨幣は有つても無くてもよいやうにも見える。けれども勿論貨幣はなくてはならないので、信用證券が貨幣の代りに流通するのは信用證券そのものに價値があるからではなく、若し必要があればいつ何時でも貨幣と引替へられるといふ信用があるからである。斯く信用證券が貨幣の代りに流通する時代は即ち信用經濟時代で、今日の文明國は皆この時代にまで進んできてゐる。何しろ商品取引が頻繁になり且つ大規模になつた今日では、一ヶ所で何萬何十萬といふ金が日に何度も動くからして、その度に毎に本物の貨幣を取扱ふことになれば運搬だけでも容易の業ではない。然るに貨幣の代りに信用證券を用ひることになれば、如何に大額でも一枚の紙片で間に合ふから便利この上もない。のみならず斯うなくては敏活な經濟活動が出来るものではないのである。

ピニッヘルは經濟の發展を別の方面から眺め、經濟團體を標準として家族經濟時代、都市經濟時代、國民經濟時代の三期に分けた。家族經濟といふのは前の自給經濟に相當するものであ

つて、部落又は氏族が一の經濟單位となり、他の經濟單位とは全然離れて活動し、その部落乃至氏族で消費するものは生産するけれども消費の目的のないものをば生産せず、苟くも生産したものは悉く消費するから交換といふ現象も起らねば、交換がないからそれに必要な度量衡も貨幣もないといふ状態である。この家族經濟の行はれたのはリストの農時代まで、ヒルデブランドの分類の自然經濟時代までであるから、期間も永くいろいろ形式上の變遷もあつたのは勿論當然とする。例へば、家族制の最も古い形式は氏族制であつて、血族關係にある十人乃至百人位が一團となつて共同生活をし、各々分擔的に自給自足の經濟生活をした。そしてこの時代には定つた夫婦關係がある譯ではなく、混婚の状態であつたが稍進むに従つて先づ母權が發達してきたのである。つまり同じ母から生れた者達が相集つて家族を作り、生活を營んだものと信ぜられる。けれども一の氏族が母權を中心にして幾つにも分れたとはいふもの、やはり一の氏族が經濟の單位であつて、誰が得たものも氏族全體の有に歸して私有財産の觀念はなかつた。この氏族が極端に大きくなると、狭い土地に押合つて生活するのは不便になつてきたのと、狩獵や農業や戰爭に於て、何と言つても女よりは男が重要な位地を占めてゐるの

とで、氏族制度が破れると同時に母權制度もまた破れ、ここに父權を中心とする家族制度が生れたのである。然しこの時代の初期にあつてはなほ氏族制度の名残が見られ、或る家族に屬するものが同じ氏族の中の他の家族に出入して、自由に欲しいものを持出して來たと言はれる。この後更に經濟が進歩するに到つて、經濟團體は分裂して小家族制及び私有財産制が起り、それにつれて交換經濟時代を顯出することとはなつた次第である。

その中に前に言つたやうな原因で都市といふものが發達し、従つて都市經濟といふものが現れて來た。つまり都市といふものが當代の氏族に變つた譯で、都市はその周圍の一定の土地と共に一團を作り、原則として他と没交渉に經濟單位を形成するやうになつたのである。すなはち都市に居住するものは、その都市の周圍の一定の地域に居住する農民の爲に工業品を供給し、その代りに農民達は必ずその都市居住者の爲に農産物を供給するといふことにした。この城内城外は合して一單位で、城外の農民は必ずその都市に於て工業品を求め、その農業品をば必ずその都市に供給するし、工業者はその土地以外の地に於て工業に従事するを許されず、況して彼等の生産するところの工業品をその地域以外に賣捌くなどいふことは假にも許さるべ

きことではなかつた。そして此の都市で工業に従事するのがまた中々面倒で、先づ何に限らず工業を営まうとすればその方の同業組合に加入してその會員とならなければならぬ。同業組合といふのは同じ都市に居住する同種の工業者達の全部によつて組織されて成つたもので、都市に於ては絶大の勢力を握つたものと見做される。同業組合の起原については學者の間に種々の異説があるが、とにかくその都市に於ける工業者の利益を保護する機關であつたことは疑ない。同業組合は徒弟と職人と親方とから成り立つて居り、その都市の工業者となることの出来る者はその都市に生れた者に限られて居り、彼等は先づ一定の儀式を経て徒弟となり、親方の許にあつて一定の徒弟年限を専心に修業する。それが年明けになると同業組合に於て一定の試験を受け、それに合格すれば始めて一人前の職人になれる。職人が親方になるにはまた一難儀で、何よりも數年間諸國を巡歴して腕を磨かねば親方になる資格はなかつた。諸國——と言つても諸都市であるが——の同業組合もまたこれに對しては互に便宜を與へたもので、この巡歴が済んで元の都市に歸つて來、再び組合の試験を受けて腕がすぐれて確かだとか、新技術を覚えて來たとか、獨創的な工夫があるとかいふ譯で、幸に合格すれば、漸く親方

となることが出来る。そしてこの親方にならなくてはその都市に店や工場を開いて業を営むことが出来なかつたものである。且つ業を営むにしても、同業組合によつて多くの制限が附せられて居つて、賃銀や値段などを勝手に上げ下げすることは許されなかつたし、日曜操業や夜業なども禁ぜられた代り、毎月一定の金額を積んで生命保険のやうな制をも立てて居た。

この制度には勿論長所もあつたし短所もあつた。概観すれば都市の工業は同業組合によつて獨占されて居つた譯で、定めし弊害が多かつたらうと思はれるけれども、當時の工業といふものは頗る幼稚であつたのみならず販路も局限せられて居つたからして、自由に工業に従事せるといふと工業者は自然相當の所得を得ることが出来ないばかりでなく技術の發達を望むことは到底出来なかつた。かうして同業組合の制度も當時の經濟狀態では有益無害の必要止むを得ない制度であつたらしい。然し都市が次第に膨張して、人口も多くなり市民乃至農民の欲望も復雜になつて来るにつれて舊式の工業品に對する需要が少くなる。ところがそれでは舊式工業の親方が困るからして、新式の工業品を作る親方の擡頭を極力押へ、或は徒弟期間を無暗に長くしたり或は親方となる爲には技術ばかりではなく費用を要するやうな制度を設けたりしたか

ら、ここに弊の堪へ難きものが生じたのであつた。この同業組合といふのは經濟の發達する或る途中に於いては必ず起るものと見えて、どこの國にでも主としてその封建時代に一度は現れてゐる。日本に於いても足利時代にはこの制度が公然と認められてゐたが、徳川時代の中頃になつて弊害が甚だしいので禁止された。尤も今日でも同業者組合、例へば理髮組合だの菓子屋組合だのといふものが認められてはゐるが、到底昔の同業組合の面影すら偲ぶことの出来ぬ勢力のない骨抜きである。

兎に角、その當時は都市がその周囲の若干の農業地域、大體に於いてその日の中に農作物を市に出で賣りその錢で工業品を買つて歸宅することの出来る程度の地域と共に一の經濟單位を作り、原則として他の地方と交通することがなかつたからして、この經濟單位に於いて行はれる經濟を都市經濟といふのである。然し何しろ狭苦しい地域のことであるから、人民の要望する凡べてのものを生産するといふ譯にはゆかないからして、一定の時期を限つてその都市を一般に開放し、誰でも來て品物を賣ることを許した。これが即ち歲市の制度で、歲市はつまり當時の外國貿易市場であつた譯である。

都市經濟が發達するに従つて封建制度が破壊せられ、封建制度が破壊するに従つて君主の權力が増大した。然るに君主の權力が増大するに従つて都市經濟が破壊して、茲に國家經濟といふものが成立した。國家經濟といふのはその國內に於いては自由に交通賣買できると同時に、國民全體が一團となつて經濟單位を作り、さうして諸外國に對峙するものの謂である。國民經濟時代の來たのはつい近世の始めであるが、國民經濟が成立すると同時に起つた問題は、如何にすれば自給自足した上に力を蓄へて諸外國を凌駕し、以て天下に覇を稱へ得べきかといふ問題であつた。富國強兵論の盛に唱へられたのはこの時である。

そこで、國富を増進するの途は生産の要素を増加するにありとばかりに、その要素に利用すべきかといふ質的な問題は顧みもせず、盛んに量的擴張の競争に各國は鎬を削つたものである。生産の要素と言へば差しづめ土地と勞力と資本とであるから、諸國は力を極めて四隣を蠶食し植民地を擴張して土地を廣め、また子供騙しのやうな規則を立てて無理にも人口を殖やさうとした。例へば完史になる者は妻帯者でなくてはならず、妻帯をする費用のないものには大金を貸すとか子供を何人以上生んだ者には褒美を出すとか、大勢の子供を抱へて扶養に困る者

があつたら官費で養育するとか、その他いろいろの懸賞めいたことを行つた。尤もこれはマルサスの人口論が出るに及んで幾分沙汰やみになつたけれども、それでも何かの拍子に昔のその名残が見られる。

次は資本の増加に憂身を窺した話であるが、當時はまだ資本と貨財と貨幣との區別が判然りして居らなかつたから、貨幣と資本とを同一に見て何でも國內に貨幣さへ澤山に溜つて居ればその國は富み、貨幣の畜積が少ければその國は貧乏であると思ひ込んで、せつせと貨幣を集めることにかゝつたのである。即ち諸國は盛んに鑛山を採掘して競つて金銀貨を鑄造し、鑛山のないものは外國貿易によつて外國の貨幣を吸收すべく、是が非でも輸出超過を計つた。だから百方術を講じて輸出を奨励し輸入を抑壓し、出超と聞けば雀躍し入超と聞けば青菜に鹽と情れ返つたのである。然して斯く貿易の順逆を標準とするのは、要するに多くの貨幣を外國から吸收するのが目的であるからして、價格の高い工業品のやうなものを輸出して價格の安い農産物のやうなものを輸入し、その安い品を更に加工して再び輸出するといふ方法は最も理想的でなければならぬ。仍で輸入必ずしも不可ならず、商工業さへ發達して居れば原産物の輸入反つ

て喜ぶべしとなつて、一段に商工業を貴んで農業を輕んずる思想が生じた。して商工業を上げて農業を輕視する方針を重商主義と呼ぶのである。

重商主義は要するに一國を以て經濟單位とし、一國民を以て一の經濟團體と見て萬事自國本位に經濟活動をし、從つて自己の勢力を張つて他國の據頭を抑壓しようとするのである。これは家族經濟乃至都市經濟とその理に於いて何等異るところはなく、ただその規模が大きいといふに過ぎない。蓋し、經濟組織が進むに従つて經濟單位が益々少くなり、これと同時に經濟主體の範圍が益々廣大になるのは自然の勢である。そこで國民經濟の成立した當時にあつては、どここの國でも富國強兵を唱へて世界を擧げて重商主義に傾いた。そして遮二無二輸出超過を計つたのであるが、その張本人たる英國に於いて右の重商主義的輸出超過主義に反對の氣運の現れたのは注目し得る。それは一口に輸出入平均論といふので、輸出入といふものは一時は如何に順逆の差があつても、久しからずして平均するものであるといふ説であつた。その理由は、若し輸出が多ければその國に輸入される貨幣が多いからして、自然に物價は騰貴して來る。自國の物價が騰貴すれば誰しも安い外國品を買はうとするから輸入が多くなつて、結局前

に這入つて來た外國貨幣は耳を揃へて左様ならをする。からして輸出喜ぶに足らないといふのである。また、輸入の多いのはその國の富裕を示すものであつて、輸入と言つても貨幣がなくでは出來ない業であるから、輸入の盛なのは金持の證據であるが故に入超反つて喜ぶべし、もし國が貧乏で輸入貨物の價を支拂ふことが出來ねば勢ひ物貨を輸出して支拂に充てねばならぬ故に、出超寧ろ悲むべしといふ論である。加ふるに、貨幣を以て唯一の貨財としたのも誤なら、商工業を尊んで農業を侮蔑したのも誤であつたことが次第に明になり、なほその上に國民主義的思想に破綻を來して個人主義的思想の勃興するに及んで、諸國は惡夢から醒めたものゝやうに國民經濟主義の政策を抛ち、換言すれば出超にばかり血眼になる重商主義を捨てて、自由放任主義をとり始めたのであつた。つまり貿易も自由、營業も自由といふことになつたのである。

然し、世の中が自由放任主義流行となつても、天は必ずしも公平無視に各國を惠むとは限らなかつた。弱國は毎に強國の爲に脅威されるし、強國も油斷をすれば弱國と侮つたものに追ひ抜かれるといふ風に、遠慮會釋のない下尅上が行はれた。のみならずこの傾向は、交通機關の

急速な發達につれて益々烈しくなる有様が見えたから、各國も自由放任では頗る不安になつてきた。そこで十九世紀の後半に到つて、再び國民經濟主義でなければならぬといふことになつて、改めて國際的交通に制限を附したり國民の經濟生活に干渉を加へたり、幾分その精神や方法に違ひはあるが前の重商主義類似の政策を探ることになつて今日に及んだが、その新しい政策を一般に新重商主義といふのである。

今日の有様を見るのに、大體に於いて各國が一の經濟單位を形成して對峙してゐることは、昔の家族の對峙、都市の對峙、乃至は重商主義時代の國民の對峙と何等變つたところが見えない。各國民が自由に交通し貿易し、どこの世界に行つてどんな商賣をしようとするかといふ譯にはゆかない。みな國民乃至國家が標準になつてゐて、世界經濟又は國際經濟といふやうな、世界の各國民が合して一の經濟團體を作り、地球が一の經濟單位となるといふことは近い將來に於いて庶幾し得ない事柄である。然し一步國民經濟の内部に立入つて見るといふと、決して昔の家族經濟や都市經濟の内容とは同一でない。國民經濟に於いては一國民が一團體として經濟單位を形作つてはゐるが、その團體内部には更に多くの經濟團體が含まれて居り、それが互

に相倚り相扶けて全體としての經濟を營んでゐるのである。従つて其の間には複雑な分業交換が行はれると共に、私有財産の制が十分に發達して經濟組織の根柢をなしてゐるのである。だからして現今に於いては、中世の家族經濟の根柢たる莊園制度のやうなものも、或は都市經濟の根本たる同業組合制度のやうなものもなくて、營業は飽くまで自由を以て原則とする。尤も自由と言つても自ら制限はあるべきで、例へば醫者が儲るからと言つて醫學の知識のないものが醫者の看板をあげるとすると、少くも一人は犠牲になるに相違ないから國家は無拘束に差出す譯にはゆかない。そんな譯で國家は經濟上社會上種々の原因によつて公益を維持する爲に特種の營業に關しては一定の制限を設けてゐるのである。また營業の自由といふことの中には、營業の場所種類の自由、販賣する貨物の價格の自由、労働者の雇傭の自由、労働者の労働組合組織及び企業家の企業組合組織の自由等が、原則として含まれてゐる。この營業の自由といふことは、各國の憲法に於いて認めてゐるが、日本の憲法には特にそれを認める意味の條文がない。然し、居住の自由を認めてゐるから、この中に營業の自由といふことも含まれてゐるといふのが伊藤公の説明である。

營業自由制度の特長とするところは、自由競争が行はれるといふことである。利益の多い營業を見つければ、何人でも遠慮なくその營業を行ふことが出来るし、同じ營業を營む者の間にも收利の競争が行はれて、なるべく良い品をなるべく多く賣つて他を壓倒して利益を擧げようとする。それ故に經濟を營むものをして、各々その得意とする方面に能力の有らん限りをつくさせる結果になる。事情がさうであれば、各營業者は一刻も油斷ができないからして、常に經濟が活氣を呈し、營業自由制度から引いて自由競争の行はれた結果、經濟の發達したことは眞に目覺しいばかりであつた。とは言へ、物には一利があれば一害が伴ふもので、畢竟營業自由制度は營利主義の經濟であるから、随分困つた弊害も生じて來た。例へば品がよくて安い物の賣れるのは當然だが、専門家でない一般の消費者はその良し悪しを見分けるだけの知識を持たないのに乗じて、外觀だけよくて中味の粗悪なるものを安く賣るとか、誇大な廣告で估客を釣るとか、他品の商標や商號を模して估客を欺くとか、強ひて他の商品に難癖をつけるとか、その他種々の不正手段に訴へてまでも勝を制しようといふ弊が露骨に現はれて來たのである。それに競争が激烈になればなるほど、經濟の力の強いものは經濟力の強いものに壓倒されるのは

易い道理で、近頃のやうに生産の道程が複雑になり、販賣の方法が大規模になり、販路が廣くなつて、大工場で大袈裟に生産して安く賣らねば追いつかないやうになつては、營業の第一條件が先づ資本といふことになる。それも生じつかの資本では齒が立たないからして、昨日の小資本家も今日は倒産して労働者となるのは殆んど既定の事である様に、中流社會とか中産階級とかは次第々々に消滅してしまふ。そこで社會は資本家と労働者との二側に分れ、敵味方のやうな關係の下に相對峙する結果、社會存立の基礎をも危くするやうなことになるかねないのである。また、右のやうに自由營業は個人々々の間に急速にして殘酷な優勝劣敗の現象を生ぜしめるが、自由貿易はそれと同様な優勝劣敗の現象を國際間に生ぜしめるからして、苟くも存續を希望し繁榮を企圖する國家であれば、自由營業を原則としては許可しても少くも公正な手段を以て競争するやうに嚴重に取締る必要があるし、また貿易も保護貿易主義を取つて經濟的に他に壓倒されるのを防ぐ必要があるといふものである。

四 經濟學とその分科

以上によつて、經濟行爲並びに經濟といふものの大體の概念は得られたことと思ふから、今度は「經濟學」といふものの字義、定義、範圍などの方に話を向けようと思ふ。

全體經濟といふ言葉は、支那の熟語の經世濟國又は經國齊民といふのをその作用の方面だけを抽象して約めたものである。だからして本來から言へば經濟は今の政治に當り、政治はまた今の實際の政治以上の歴史的な象徴的な廣い意味を持つた言葉である。ところが一方に於いては、英語のエコノミー (Economy) は元來家法といふ意味の羅典語の轉で、即ち今の家政學といふやうな意味を持つてゐた。それ故に英語のエコノミーは修身齊家の道であり、本來の經濟は治國平天下の道であつた様である。然るに國民經濟の諸現象を組織的に研究する學問を英國ではエコノミックス (Economics) と言ひ做すことになつて、元の修身齊家の道たる家政學の意味が失はれることになつた。同時にそのエコノミックスを日本では經濟學と稱することにな

つて、經濟といふ語の元の意味即ち治國平天下の道たる政治學の意が失はれることになつたのである。兎に角、英國のエコノミックス及びその譯語たる日本の經濟學といふのは、社會的見地からして國民の經濟生活に伴ふ諸現象を研究する學問、換言すれば物質的方面から國民の共同的社會生活を研究する學問のことである。かうきまつてしまへば、エコノミー乃至經濟の元の意味はどうあらうと差支はない話で、現に舊意には拘泥せずにエコノミックス經濟學といへば今言つたやうな學問のこととして通用する。だが、何かの調子で舊意が邪魔をする場合がないとも限らない。さういふ時には特にこれをポリテイカル・エコノミー (Political economy) と稱し、家政學をば特にドメスティック・エコノミー (Domestic economy) と稱するのである。そして日本でもまたポリテイカル・エコノミーを理財學と言つて、經濟學では曖昧な時にはこの方を使ふ。それ故に理財學と言つても經濟學と言つても、經濟といふ言葉の元の意味にさへ捕はれなければ、結局同じことと思つて差支はないのである。

國家の中における百般の事象を國家の立場から組織的に研究するのは廣義の國家學である。狹義の國家學は主として國家の組織論的及び發生論的研究であるが、廣義の國家學はそれを土臺

とする國家の現象論的研究であると言つていい。従つて經濟學はその廣義の國家學の中に含まれる。人類の共同生活の最も進歩した形は今のところ國家で、國家を組織するに到れば人類は即ち國民であり、その國民が國民としての共同生活を全うする爲にする經濟は即ち國民經濟である。ところで人類が國民として營む共同生活は勿論種々の方面から研究することが出来るであらうが、それを特に物質上の方面から研究して國民の物質的幸褔の増進に資するものが經濟學であるから、經濟學は言ふ迄もなく國民經濟の立脚地から論ずるものであつて、必要上國際經濟學及びその他の經濟學に對立せしめる時の外は殊更に國民經濟學と斷ることは要らない。同時に國民經濟學と言はなくても、經濟學は個人の經濟的生活現象を研究するものではなく、個人經濟の立脚地から百般の現象を研究するのは商學である。つまり世界經濟の立場からするものが國際經濟學、個人の立場からするものが商學で、國家の立場からするものが經濟學であるが、その意味が何れかに紛れる怖のある場合に限り國民經濟學と呼び做す様である。

次には經濟學の分科のことになるが、これは昔からいろいろに分けられて必ずしも一定して

ゐる譯ではない。純正經濟學と應用經濟學とに分ける分け方は極く常識的な分類で、比較的古くから行はれてゐるが現在には餘り用ひられない。ツグナーは經濟學を原理と適用とに分け、適用をば更に理論と應用とに分けてゐるが、これも餘り理窟ぼくて感心しない。シュモーラーは一般經濟學と特殊經濟學とに分けたはいゝが、經濟政策は科學に非ずとして斥けてしまつたのは聊か思ひ切りがよすぎる。それに苟くも經濟の事を研究するからには、その歴史的研究をも除外することは出来ないからして、經濟學は純正經濟學(經濟原論)經濟政策(應用經濟學)及び經濟史の三つに分ける位が最も穩當なところではないかと考へられる。

純正經濟學又は經濟原論は即ち經濟學の原理論で、國民の經濟生活に伴ふ諸現象の性質を明にし、その現象間の因果關係を説明するのが目的である。だからしてこれは飽くまでも科學的に、現在する經濟現象そのものを分析綜合してそこに一定の法則を求め、その法則によつて遂に現象を説明するといふ出力をせねばならない。尤もさうする爲には現象を歴史的に闡明したり、經濟政策によつて現れた結果を吟味したりすることもあるかは知らぬが、然しどこまでも客觀的に法則定立的に眞理を探求して、苟にも利害を論じたり可否を斷じたり、或は將

來の趨勢を卜したりすることは避けねばならない。

經濟政策は一に應用經濟學とも言はれ、國民の經濟生活を如何に導き、その現狀を將來如何に變化させるべきかを研究する方面である。それには何よりも純正經濟學の教へるところに基いて、國民の經濟的福祉を増進する目的の下に國家の行ふ經濟的諸施設を模倣して、その不可なるものを排し可なるものを更に進める方策を研究することが必要である。ところが茲に問題となるのは、國家は果して國民の經濟生活に干渉していいものか、乃至は抑々國家は果して國民の經濟生活を指導し得るかといふことである。モンテスキューによれば、經濟現象なるものは天然自然の結果であつて、富むも富まぬも自然の條件一つであるから人力の以て如何とも爲し能はぬところであるといふ。これに對して言ふ人は、英國の富んだのは英國が天産に豐な土地を占めてゐる爲ではなく、専ら經濟政策が宜しきを得た爲であると論ずるのである。けれどもこれは何れも楯の半面で、一概に言つてしまふのは誤である。國家が國民の經濟的福祉を増進する爲に行ふ施設の範圍は、自らその國の文化の程度によつて異つて來なくてはならない筈だ。國民の文化程度が高くて各々が正しい國家的觀念を有し、自らの權利を遂行し義務を果

すことを知ると同時に他人の權利や利益を重んずることを知つてゐるなら、國家は寧ろ國民の經濟生活に愁じつかの干渉を加へない方が得策である。けれども國民の文化程度が低く、國家の不利益や不面目には頓着なく自分だけが得をし、權利のないところでも利さへ見れば押かける癖に、義務となつたら知つても知らぬ振をして愈々求められれば逃げる、勿論他人の權利や利益などは考へても見たことはない、脱税はする不正品は作る、見本と實物とは違へる破約はする、樹目や目方は胡魔化す商標は盗む、密輸はする密賣はする、それで儲けた金で別莊を作つて妾を畜へて時を得顔に誇る。誇られた者は眞似をするといふ風であつたら、國家として捨て置けない。それも國家が單に獨立存在して法律をさへ守ればよいといふなら知らぬこと、近代國家學の教へるやうに國家は國民の福祉を増進することを目的とするものであつたらば、面倒でも彼等の爲に適當な經濟施設を施してやらねばならない譯である。換言すれば、國家は國民をして自由に經營させることを理想とはするが、國民の經營だけに任せて置けば、彼等の爲にならないばかりでなく、國家そのものゝ不爲になるやうな場合には已むを得ず干渉し保護すべきで、それがまた國家の義務でもあり本務でもあるといふことになる。

右によつても解るやうに、國民の自活能力の發達と國家の國民經濟に干渉することの必要程度とは正に反比例するものであるが、現今に於いて全然國家の保護干渉を要しない國民は何處にも存在して居らない。また自治能力が發達してゐて、或は全く放任してもよくはないかと思はれる國民もあるかも知れないが、歴史に徴して見ても國民の自治能力を過信して過度の放任政策をとるよりも、幾分内輪に見て大事をとつて保護政策に出でた方が國家としては得策であるから、今のところ敢て完全な放任政策をとる國家もまた存在しない。然し、國家が國民をして自ら自由に經營せしめることの利益は極めて大で、先づそれによつて國民をしてその各々の能力に應じて奮闘努力、最善をつくさせることが出来るからして、その結果は小にしては各人の收入所得を多からしめ、大にしては經濟社會をして常に活氣あらしめ、引いて國家經濟を進步發展せしめることが出来るといふ譯である。また、國家が國民の自ら經營する能力を有するにも拘らず、強ひて國家自ら計劃經營し保護干渉するときは、國民をして國家に對する依頼心を牛ぜしめ、ともすれば卑屈退轉の氣風を生ぜしめて國家經濟を萎微せしめる憂なきを保せずといふこととなる。そこで國家が國民の經濟生活に干渉し保護せざるを得ない普通の場合を列挙して見るならば、

(一) 國民の經濟的知識が尙ほ幼稚で、まともな經濟生活を營むことが出来ない場合、或はどろやら營むことが出来ても改善してゆく途を知らない場合には、國家が指導し保護して行かなくては仕様がなない。例をとるまでもなく昔の國は皆これ、かういふ時代にあつては爲政者は文字通りに物質的にも實際に經濟國民したのである。その意味に於いて經濟といふ言葉も強ち不適當とは言へないやうである。

(二) 國民はその經濟生活を營み且つ改善するの道を知つては居るが、それをするだけの力のない場合には國家が誘掖して行かねばならない。例へば戦後とかその他の事情で非常な不景氣が襲つて來、國民の意氣も沮喪して誰も積極的な活動する者がなない、或はしたくても財界不況の爲に損失を恐れて手出しすることが出来ないといふやうな場合には、國家は自由放任以上更に一步を進めて國民の經濟生活を勵ます爲に保護政策をとらねばならない。

(三) 國民經濟の發達の上にとつて妨害となる制度があるにも拘らず、或る階級の利益の爲にこれを廢止することが出来ないやうな場合には、國家が干渉して強制的にでもさういふ制度は

廢しなくてはならない。例へば同業組合制度の如きものが存在して、徒弟、職人、顧客が皆迷惑を感じ、經濟の發達もそれが爲に阻止されるが、それを廢すとすると親方の利益がなくなるから親方達が相結んで飽くまでも該制度を存続せしめるといふ場合があるとすれば、國家は權力を以てその惡制度を廢止する必要がある。

(四) 國民の社會的階級の間には利益の衝突があつて、國家が權力を以て臨まないことには緩和させることが出来ない場合には、國家の權力による干渉も亦已むことを得ない。例へば一國內の資本家と労働者とが相對峙して所謂階級戦を演じ、經濟組織が破壊されて國家の存立の基礎が危いやうな場合に立到れば、若し出来ることなら國家が公正な立場から間を調停しなくてはなるまい。

(五) 外國との競争の結果、放つて置けば自國民が蹴押されてその國の産業が發達しない時は、已むを得ず國家は何かの制限を設けて自國の産業を保護する。早い話が保護貿易の政策に出るのである。

(六) 事業の性質上、これを私人の經營に任して置けば公益を害する虞がある場合には、不本

意ながら國家は官營といふことをせねばならない。然しこれはよく〜の場合で、大抵のことならば適當の制限を附して私人の經營に一任して置くべきである。

その他算へ立てれば種々あるだらうが、經濟政策といふのは要するにさういふ場合に於いて、如何なる施設方策を採用すべきであるかを研究することに外ならない。そして國民の文化程度が進むに従ひ、國民の經濟生活も複雑に入り組んで来るからして、經濟政策もまたそれにつれて益々細密精緻に研究を遂げねばなくなるのは、事新しく言ふまでもない話である。

最後に經濟史とはどんな研究であるかといふと、國民の經濟生活が如何なる徑路を踐んで現在の經濟社會を現出するに到つたかを研究するものである。この經濟史は、國民經濟生活の時代時代による實際上の遷り變りを調べるのは言ふまでもないが、經濟史はその對象によつて廣狹様々に、研究されることの出来るのは當然で、例へば或る地方の經濟發達の歴史、或は或る國の經濟發達の歴史を單に歴史的に、即ち個性記述的に研究することが出来る。然しまたそれと同時に、各地方又は各國の經濟發達の徑路を比較して、一般の經濟發達の徑路といふものをば、一面個性記述

的にはあるが他面通則發見的に研究することも出来る様である。この問題は六ヶ敷く言ふと面倒になるが、ここでは大した必要がないから割愛することにしよう。

第二章 經濟學の歴史と學派

一 正統學派

A アダム・スミスの『富國論』

科學としての經濟學が始めて世に現れたのは、僅々百數十年前のことである。それは誰でも知つてゐるやうにアダム・スミスの所謂『富國論』によつて、經濟現象が最初に系統的組織的に説明された、即ち經濟學が生れたと言はれるけれども、勿論その以前とても全然經濟思想のないことはなかつた。蓋し、經濟思想といふのは所と時とによつて當然變化すべき現實的なもの

のであるが、經濟學となれば所と時とによつて變化しない筈の法則的なものでなくてはならぬ。然らばどんな經濟思想が行はれたかといふと、先づ十七世紀から十八世紀にかけて、前に述べた重商主義が汎く一般に行はれた。即ち金銀貨幣が唯一の基本的な貨財であつて、これを多く吸集して蓄積することによつてのみ其の國は富む。そしてかういふ富國の目的を達成する爲に、直接の方法として盛に貨幣を鑄造したが、間接の方法として貿易に於ける輸出超過によつて外國貨幣を吸集する手段に出でた。その輸出超過を招來する方法としては、どうせ農産物は安いものだから輸入しても知れたものであるといふので、全力を擧げて工業的生産に集中し熱心に高價な工業品の輸出を計つたのである。この主義の發頭人は英國であるが、その思想の反動として佛國に所謂重農主義が生れた。これによれば、工業々々といふけれども工業なるものは自然が吾々に授けたものの形態を變するに過ぎないからして眞正の生産とは言ひ難く、商業に到つては單に物の位置を變するに過ぎない故にどう考へても生産ではない。吾々の眞に力を致すべきは生産であつて、生産の本領は自然を利用することにある。自然の利用に於いて最たるものは即ち農業で、この意味に於いて工業や商業やは農業に比すれば多く言ふに足

らない。……かういふ風に、スミス以前に於いても経済思想は餘程はつきりした輪廓形態を備へ始めては居つたのである。

アダム・スミス (Adam Smith 1723-1790) は一七二三年に蘇格蘭の小都會カーコーデーに於いて一税關吏の子として生れた。一七三七年にグラスゴー大學に入學し、後に牛津大學に轉學した。最初は神學を修めたが嫌になつて哲學に移り、牛津卒業後はエデンパークで哲學の講義をして名聲噴々たるものがあつた。乃ちグラスゴー大學に聘せられて、倫理學を受持ち、一七五一年から同じく六四年まで前後十三年間講義を續け、その間に『道徳的感情論』の著があつた。一七六五年に教職を捨てて歐洲大陸に遊び主として佛國の經濟學者達と交遊したが、翌六六年に歸國して後は専ら富國論の著述に従事したのである。所謂富國論はその後十年を経て一七七六年に公刊されたものであつて、その本當の題目は『諸國民の富の性質及び原因に關する一考察』といふ長いものであるが、普通は略して『富國論』又は『諸國民の富』と言つて置くのである。彼はこの大著によつて始めて經濟現象を體系的に説明し、兎に角に經濟學といふものを法律學及び政治學とは獨立な一の學問として立てたのであるから、彼自身は

『經濟學の父』と呼ばれ彼の學統は『正統學派』——又は古學派——と稱されるもの蓋し故なきにあらずと言はねばならない。

アダム・スミスの經濟學の根本思想は、必然論的な社會觀である。即ち彼によれば、經濟組織は政治家や學者が頭の中で考察した計劃によつて出来上つたものではなく、人間性に含まれてゐる或る傾向からして、長い間の歴史的發達の階程を経て徐々に生じた必然的な結果であるといふのである。人間性に含まれる或る傾向とは何であるかといふと、それは即ち利己的傾向に外ならない。スミスによれば人間は利己的なもので、利己的であることが人間の天性であり自然であつて、政治家や學者やが如何にこれを矯めようとしても如何ともすることの出来ないものである。またかういふ人間の天性に基くものは矯める必要がない。人間性の必然的產物であり、必然的に發達したものは最もよく人間の天性に適應してゐるからして、必ず社會全體の爲に有益なものであるに相違ないのである。自然的なものは善いものであり、善いものは必ず必然的なものであるから、従つて或ることが必然的であれば、必ずそれは善いことである。ところで現在の經濟組織は長い期間に亘る歴史的發達の自然的結果であるから、必ずそれは善き

組織であるに違ひない。換言すれば、資本主義的經濟組織は人間の天性であるところの利己心に基いて自然に發達してきた必然的結果であるが、それが利己心であれ何であれ鬼に角人間性に基く必然的結果である故に、必ず社會全體の爲に有益な組織制度でなければならぬといふのが彼の根本思想であつた。さういふ意味で彼は資本主義的經濟組織を最善の經濟組織として是認した譯であるが、これには無理ならぬ理由もないではない。何しろ彼は英國に於ける産業革命以前に生れた人である。産業革命は最も早く英國に起つたのであるが、それにしても十八世紀の末頃であつた。例へばハーグリブス、アークライト、クロムプトン、カートライト等の紡織機械や織物機械の發明、ワットの蒸汽機關の發明、その他鐵道、汽船等の發明は凡て十八世紀の終りに相次いで起り、それが爲に經濟界の状態が根本的に革命されて即ち産業革命となつたのであるが、スミスはこれをすら見なかつた人である。現にその富國論も一七七六年の公刊であるから、彼は若くして新しい資本主義が古くして既にその弊に堪へなくなつた在來の經濟組織を、勇しく破りつつ發達してゆく華々しい姿を見たに止り、とてもこの組織の病弊などを見るに到らなかつた。従つて彼はこの組織の謳歌に全力を注ぎ、この組織を是認する爲に歴史

的必然論を説いて同時に各組織の如何に巧妙に出來てゐるかを説明するに忙しかつたから、到底この組織に弊の據つて來るべき缺陷を探索する暇はなかつたのである。

以上はスミスの經濟組織の成立に關する考であるが、そして此の組織は頗る巧妙な社會組織であつて、その下に於いて各人が各々自然の性情に基いて自己の利益の爲に活動しさえすれば必然の結果として社會全體の公益を増進するに到るといふのであるが、公益の増進といふことを分析して考へて見れば大體二つになる。即ち、富の生産といふ方面から見ればこの組織は最もよく社會全體の富を増進する結果となり、富の分配といふ方面から見ればこの組織は最も公平に社會の富を各人に分配する結果となるといふ。仍で便宜上、これを生産と分配とに分けて改めてスミスの考を簡單に檢べて見よう。

一國の富といふものは、各々の資本家が生産した生産品の價格の總額である。然るに資本家は、所謂人間の天性たる利己心に基いて、それ／＼自分の利益を出來るだけ多く擧げるべく努力し、その爲に最も有利な企業を選んでするのみならずその企業に於いて、最小の費用を用ひて最大の價格に賣れるやうに生産する。ところで若し或る事業にばかり投資する者が集つて、

或る品物ばかりが無暗に多く生産されることになる、その生産品の価格は下落して資本家は利益を収めることが出来ない。とすれば資本家は自分の利益を標準として資本を投ずるものであるから、利益の擧らない生産に投資する氣遣ひはない故に、決して或る品ばかりが多く生産されて或る事業にばかり資本が集中するといふやうなことも従つてない。自然に調節が行はれて資本は凡ゆる事業に投ぜられ、自然に凡ゆる品物が最も有利に生産されることになる。つまり資本なるものは、自然のままに資本家の利己心のままに放任して置いても、決して偏らずに社會全體の爲に最も有益に投ぜられるのである。さうすれば期せずして社會全體の富が殖える。社會の富が殖えることは、つまり社會全體の幸福であり利益である。これを彼自身の口から聞くならば、「一定の資本の所有主が、その資本を農業に投ずるか製造業に投ずるか、乃至は卸賣商業又は小賣商業の或る特殊の部門に投ずるかを決定する唯一の動機は、彼自身の利益如何といふことである。その資本をばこれらの種々な方法の中の何れかに投ずることによつて、それによつて運用せられる生産的労働の分量に差異のあることや、またその資本が一國の土地及び労働の年々の生産物に附加する價値に差異のあることなどは、決して資本主の考には這

入らないのである。それ故に巨萬の富を作るのには農業が最も近道な國柄に於いては個人の本は自然に農業に投下されるが、その事はまた社會全體にとつて最も利益のある方法でもあるのである。』(『富國論』第二編第五章の結語。)

次に分配の方面に關するスミスの考へ方はどうかといふと、彼は自由競争が完全に行はれたならば社會の富は最も公平に分配されるといふのである。例へば労働者が資本家から受取る賃銀はもとより一定して居らないが、その労働に伴ふ苦痛の大小とか労働を習得する準備の難易や費用の多少とかいふ點で十分に埋合せがついてゐる。従つて誰にでも出来る樂な仕事に對する賃銀は安く、困難な仕事に對する賃銀の高いのは、寧ろ公平な分配の仕方である。そして誰しも高い賃銀をとりたいのは山々であるから、皆なるべく特殊な技能を得ようとして勉強するが、さて實際に特殊の技能を習得して高い賃銀を取り得るやうになる者は少い。これはその人の才能でありその人の心掛でありその人の罪であるから、それに誰しも利己心のない者はなく好んで腕を磨かないやうな者はないから、矢張り彼等の自由競争に任して置いて差支はない。自由に放任して置けば各々彼等としての最善の努力をして能力の限りをつくすといふので

ある。また資本家の收得する利潤についてもその通りで、甲の企業が非常に利益が多いが乙の企業の利益は少いとすれば、多くの企業家は甲を捨てて乙に走るに極つてゐる。人には利己心があつてわざ／＼好んで利益のない仕事に投資するものはないから、遠からずして甲の企業と乙の企業との利益は平均する。それだからして一切萬事この理法、即ち自由競争によつて富の生産も分配も偏頗がなく過不及なく、自然と公平になつて行くからして、個人の利己的活動は少しも制限したり干渉したり、乃至は保護さへもする必要はない。自由放任主義こそ最も適當な政策である……かういふのがスミスの大體の考であつた。同時に正統學派の根本の考であつたのである。

B マルサスの『人口論』

アダム・スミスの歿後八年目、一七九八年に『將來の社會改良に資する、人口の原理に関する一論』といふ小冊子が匿名で刊行された。何故かういふ本が現れたかといふと、そこには色々事情があるのである。殊にこの本には本標題の他に『附、ゴッドキン氏、コンドルレー氏、

及び其の他の著作家の思索に関する評言。』といふ傍標題のついてゐるのを見ても、何かしら曰くがなくてはかなはない。

引合ひに出されたゴッドキン (Godwin) とはどんな人であるかといふと、これはスミスとは全く反對の側に立つ思想家、即ち資本主義側ではなく所謂空想的社會主義側の人である。彼はスミスの死んだ翌年の一七九一年から九三年までかかつて『政治的正義及びその道德並に幸福に對する影響に関する一考察』といふ本を書いたのであるが、この本はマルサスの人口論の現れるまでは非常な勢を以て社會の上下を風靡したものであつた。ゴッドキンの政治的正義は年代録を繰つて見るまでもなく佛蘭西革命の眞最中に書かれたものであつて、その思想は正に佛蘭西革命の本來の思想を經濟的方面に於いて代表するものであつた。彼によると、凡ての人がその道德的理想に基いて行動するならば、社會の經濟組織は當然に共產主義的組織をとるやうになるだらうといふのである。詳言するならば、一般社會全體の爲に最も利益のある行動をとることが所謂正義であつて、正義は凡ての人のとるべき道である。これを財産の所有といふことに當徴めて考へれば、自分が或る物を持つてゐる場合に社會の公益上から見て自分よりも以

上にその物を必要とする人があるにも拘らず、その物をば飽くまで自分の所有物であるからと言つてその人に與へないならば正にその行爲は正義に反する。例へば或る人が金の腕時計を巻いてゐるとする。巻いてゐるからには幾らか必要でないこともないか知らぬが、どうせ呉服屋に行つたり芝居に行つたり丸ビルを素見す位しか仕事はないから、辻に立つてゐる時計を見るだけで十分なのだ。然るに或る車掌は時計を持たない。列車の運轉上甚だ不便であるのみならず、引いて多くの旅客に損害を與へる位はまだしも、衝突その他の危険さへ無きを保し難い。とすれば先刻の人は金の腕時計を早速その車掌に提供すべきである。それが正義であるといふのである。今、皆がさういふ正義の原則に基いて行動することになれば、世の中は期せずして共産主義の社會になる譯である。ゴッドキンはまた一方に於いて労働の分擔といふことを主張した。金の腕時計を巻いて毎日ブラ／＼してゐる人が多いから、車掌は朝から晩まで働いても足りないのだ。これが皆が皆、兎に角何かしらの労働につくとすれば、最早やそれは労働とは言はれない娯樂的な運動位にしかつかないだらう。さうなつたら實に楽しい黄金時代が現出する譯であるが、それには何よりも理性が必要である。人間は本來の利己心などに任せて勝手な

行爲をすれば人類は滅亡し社會は壊滅するが、理性を働かして正義を行つてゆけば人類は向上し社會は進歩する。従つて罪惡とか貧窮とかいふものは社會からその跡を絶つてしまふであらう、といふのが彼の思想の大體である。ゴッドキンの政治的正義とは僅か一年を距てて、佛蘭西のコンドルセー(Condorcet)は『人心の進歩に關する歴史的觀察に關する概説』といふ本を著した。これもゴッドキンの説と同巧異曲のものであつて、二書相並んで英國その他の思想界を支配して居つたのである。

御話變つて英國の或る片田舎に、一寸風變りではあるが英國式の頭をもつたトーマス・ロバート・マルサス(Thomas Robert Malthus 1766-1834)といふ名もない醫師が住んでゐた。當時は今言つたやうな空想的社會主義思想が、靡然として上下の人心を支配して居つた時代であるから、彼の父デニエル・マルサスも大方の例に洩れずゴッドキンやコンドルセーの著書を受讀してその説に心酔して居つた。然るに子のロバート・マルサスはどうも父の意見に承服することが出来ないで、家庭の中に於いて常に老理想主義者たる父と議論を闘はして居つたが普通の開業醫にしては稀しく妥協的でない心を持つて居つた男と見えて口で喋つただけでは取

留めがないからと言ふので順序を立てて自分の考を文章に綴つたのである。そしてそれを一七九八年に匿名で公にしたのが今の『人口の原理に關する一論』の初版であつた。して見れば人口論なるものは第一にゴッピンやコンドルセ等の思想を反駁する爲の著作であり、第二にルッソー等によつて代表されて佛蘭西革命の起因となつた十八世紀の世界的理想論のイリュージョンを打消す爲の勞作であつたのである。元來彼は醫を業とする者で格別經濟學の方面に造詣がある譯でもないから、意識的にアダム・スミスの學統をついでそれを發展せしめようなどといふ野心は、露ほどもなかつたに相違ない。たゞ醫者として自然科學方面に縁が深く、従つて現實主義的な物の考へ方に慣れて居つた故でもあるか、ゴッピン流の抽象的な理想論には我慢がでなかつた。そこで彼は理性などといふ捉へどころのないものではなく、人間として誰でもが持たないものない根本的な性質を出發點として、社會にはゴッピンの言ふやうな黄金時代は決して來るものではないこと、換言すれば罪惡と貧窮とはどこまでも人間について廻るものであることを説いた。更に言へば、富の不平等な分配は人類の本質上避くべからざることであるのみならず、それは寧ろ人類の進歩向上の爲に必要な事柄でさへあるのだから、

富の分配を平等にして社會から貧窮や罪惡を根絶しようといふ企は、一切無用にして有害であると言ふのである。従つて富の分配は、スミスが富の生産に於いて主張したやうに唯だ自由放任が唯一最善の策であるといふ。茲に於いて彼の人口論の説は、多く期せずしてスミスの不當に看過した分配問題でスミスの經濟學を補修し、富國論と人口論とが合して首尾一貫した經濟學を形成するといふやうな結果になつた譯である。つまり富國論の生産問題はそのままとして、その杜撰な分配問題はそつくり捨てて代りに人口論をそのまま持つて來ることによつて、正統學派の資本主義的自由放任主義の經濟學が、兎に角一應の形體を備へることになつたのである。この意味に於いてマルサスはアダム・スミス及び後に來るリカードと共に資本主義經濟學の三大建設者として並稱される次第である。

そこで次にマルサスの所説の大略を述べて見ようと思ふのであるが、マルサスは今言つたやうにゴッピンの論據とした理想乃至空想を排斥して、一の疑ふべからざる現實を持つてきた。即ちそれは食欲と性慾であつて、この二つの慾望の當然の發展の上に人口の原理といふ自然的法則を認めたとである。彼の人口の原理なるものを簡単に言つて見ると、人間には男女間

の性慾がある以上は人口は益々増加する傾向を持つてゐる。然るにそれと同時に、人間は食慾を持つてゐるからして、一定の營養を攝らねばならない。ところで人口増加の割合と食物増加の割合を比べて見るのに、前者は非常に大きく後者は非常に小さい。つまり前者は幾何級数的に二が四になり四が八になり八が十六になるといふ風に $\times 2$ になるが、後者は算術級数的に二が四になり四が六になり六が八になるといふ風に $+2$ の關係になる。だからして幾ら努力しても段々に食物が不足になつて來る筈である。然るに、人類の歴史も可なり長いものではあるが、どうやらこの二つが平均してゐるといふのは甚だ不思議で、それには何かしら理由がなくては協はない。けれども食物といふものはさうく増加する譯のものではないから、そこには必ず人口の増加に對する障害がなければならぬ。それが即ち貧窮及び罪惡である。何しろ食物増加と人口増加とは、是が非でも釣合つて行かねばならないものであつて見れば、その人口増加に對する障害も不可抗力であるから、貧窮及び罪惡の生ずるのは蓋し自然の法則と言つて宜しい。従つてそれは人力を以て如何とも爲すなきものであり、理論上社會制度や經濟組織とは全然無關係なものでなければならぬ。

以上は有名な人口の原理の主要であるが、つまり理論であるが、マルサスはそれに基づいて如何なる政策を主張したかが第二の問題である。が、貧窮及び罪惡の生ずるのは自然の法則であつて、人力で動かすことの出来ないものであるのみならず人類の進歩にとつて必要なものである以上は、自由に放任して置くのが最善の方法でなければならぬ。マルサスは明かに自由放任政策を主張したのである。この意味に於いて人口論は富者の階級に向つては貧民救助の責任を解除し、又政治家に向つては分配問題を考慮する責任を解除したものと云ふことが出来る。つまり誰が貧困になり誰が富裕にならうと、それは各個人の勝手に敢て國家の關知するところではないが、ただ各個人は道德的節制によつて人口の増加を或る程度まで緩和し、引いて貧窮から免れることが出来るのである。それはどうしてかと言ふと、家族を養ふことの出来る見込みがつかない間は結婚しないことによつてである。成算の立たない結婚は不道德である。然しながらそれは國家の権力や法律の力で取締るべきではないので、かういふ不道德な行爲に對して人は自然は貧窮といふ鞭を以て峻嚴に制裁を與へる。即ち貧窮は天罰で、貧乏の責任は全然貧乏人自身にある。社會も國家も何等關係はない。また労働者の賃銀では家族を養ふことが出来な

いとすれば、それは國家にとつてそれだけの人口が不必要であるか、或はそれらの人員を養ふ力がないからであつて、誠に氣の毒な譯だがどうも致し方がない。止むを得なければ労働者ではなく、もつと勉強してもつと収入のある仕事をすればよいので、國家は誰が何の職業に就かうと何にならうと、さうする爲に如何に競争しようとする自由を放任して置くのだから、貧窮や餓餓や失業やの責任を國家に持込まれては甚だ迷惑する。『兩親から生活資料を得ることもできず、また社會がその人の労働を必要としない場合には、その人は少しの食物をも要求する權利がない。』かう言つて彼は貧窮、失業、及び餓死をば、個々人の不心得に對する自然の刑罰として是認してゐる。そして無暴な結婚を防止する自然の制度は、家族支持の負擔を伴ふ私有財産及び相續の制度であるから、これほどうまく出來た制度はあるものではない。それに私有財産の不平等は勿論當然で、不平等であればこそ各人は努力するのであるからして、不平等といふことは人間の進歩に最も適した状態である。斯くして彼は徹頭徹尾、資本主義の經濟組織を謳歌し且つ擁護したのであつた。

○ リカードの『地代論』及び『労働價值説』

アダム・スミス及びマルサスに引き續いて資本主義經濟學の最後の完成者たる位置を占め、資本主義の經濟組織を盤石の上に置かうとしたのが、同じ英國人のデビッド・リカード (David Ricardo, 1772-1822) である。既に述べたやうに、アダム・スミスは主として生産問題に關して個人主義乃至自然主義を主張したに止つたが次に次に出たマルサスは更に分配問題に關して同様の主張をした。つまりマルサスは人間と貧窮といふものを人口の原理といふ自然的法則の鐵鎖で縛りつけた。そこで今度はリカードが出て、その貧窮といふものを遮二無二労働者階級に結びつけて仕舞はうとしたのである。だからして彼の分配論は、何が故に貧窮の運命は労働者階級のみが負擔しなければならないかを論證するもので、これがうまく行けば實際に於いて資本主義的經濟學は完成する譯である。従つて彼の主として目指した方面は分配問題であり、就中有名な説は地代論及び労働價值説であつて、これらはその著『經濟労働』の中に述べられてゐる。

先づ地代論の方から言ふと、彼によれば地主がその所有する土地から地代をとるといふことは蓋し當然であつて且つ必要である。何故かといふと、優良な土地といふものはさう無限にある譯のものではない。換言すれば使へない土地は随分廣くあるけれども、使へる土地といふものには限りがある。それにまた如何に優良な土地であつても、無制限に收穫の擧るものではないのである。土地には如何に肥沃であつても必ず收穫遞減の法則といふものが行はれてゐるが、これらは自然に起つた事實であつて人力では如何ともすることの出来ぬことである。そこで、人口が次第に増加して食糧に對する需要が増して來ると、自然と優良な土地だけを耕作して居たんでは間に合はなくなり、劣悪な土地をも開墾耕作して穀物を生産する必要があるとして來る。さうなると劣悪な土地から優良な土地から上ると同量の收穫を得る爲には、随分餘計な骨折をせねばならない。骨が折れるから穀物の價格も騰貴する。この場合、劣悪な土地から上つた穀物ばかりが騰貴する筈はないから、優良な土地からの穀物も同じ程度に騰貴する。すると、優良な土地を耕す者は餘程利益なわけで、この利益は自然に優良な土地に對する地代となつて現れて來るのである。それ故に穀物の高いのは地代が含まれてゐるからではなく、反對

に穀物の高いからして自ら地代が生ずるのである。従つて地代を廢したからと言つてそれだけ穀物の價格が下る筈がなく、地主が地代を取らねばそれだけ借地人の利得となる。けれどもこれは地主と借地人との問題で、消費者は地代がどうなつて居ようと一向に痛痒を感じるものではない。また地主が優良な土地を借して借地人から地代をとるといふことは、自然にその所有する土地に生じたものを收得するといふだけのことであるから、言はば自然の法則に従つてゐるのであつて極めて正當であり、正當であるが故に取らなければ困つたことが起るからして取ることが必要である。かういふのが彼の地代論の大意である。

次に資本家の利潤であるが、彼によれば生産物の總額から當然のものとして地代を差引き、残る分が労働者の賃銀と資本家の利潤となる。即ち社會的労働の全生産物は地代と利潤と賃銀とに分れるのであるが、地代はこれは別物であるからして、賃銀が多くなれば利潤が少くなり、利潤が多くなれば賃銀が少くなるのはこれ當然で、賃銀と利潤とは生産物の相對的價值に影響することなく互に反比例して高下する譯である。斯く、利潤と賃銀、或は資本家の利益と労働者の利益とは絶対に一致しないものであるといふのが彼の見解である。ここで問題は重大

な岐路に立つ譯で、労働者の利益と資本家の利益とは兩立せずには必ず他を犠牲にするとすれば、何れを捨てて何れを立てるべきかが大問題である。資本主義的經濟學者としてのリカードは、勿論資本家側に加担した。即ち労働者の利益の爲に資本家の利益を犠牲にしてはならないといふ。何故となれば、資本家が資本を投じて企業するのはそれによつて利潤を收得したいが爲である。利潤がなかつたならば資本家は何を好んで事業を始めやう。人間元來利己的であるから、一文の得にもならないと努力するものは一人もない筈である。斯く一切の事業が無くなれば社會は立つて行かない。のみならず資本家が事業を起さなければ、労働の需要といふものが全く無くなるからして、労働者は失業して餓死せねばならぬ。兎にも角にも労働者が生活をして行けるといふのは、一に資本家が事業を起すからである。この點で労働者は随分資本家を有難く思つて然るべし。ところで資本家は利潤が見られるからして事業を起す。利潤が見られねば事業を起さない。事業が起らなければ労働者は餓死する外はない。それ故に資本家が一定の利潤を收得するといふことは、労働者が生活する上にとつて是非とも必要なことであるから、寧ろ労働者は資本家が一定の利潤を取つて貰はねば困る。利潤をとつて事業を始めて

貰はねば顎が干上つてしまふ。この意味で労働者は一生懸命に働いて資本家に利潤を提供するのが當然中の當然である。それ故に資本家が利潤をとるかとならぬかは労働者の生死の分れ目であるから、多少の貧乏位は我慢して精々資本家に利潤をとつて貰ふ工夫をしなくてはならないといふのが、リカードの主旨であつた。

次にリカードの經濟學說の中で有名なのは労働價值説であるが、これを要約して見ると、各商品の價值はそれを生産するために費された労働の分量によつてのみ決定されるといふのである。彼の言葉によれば、労働は『交換價值の本源』であつて『凡ての物の價值の大小は、その生産の爲に投ぜられる所の労働の多少に應じて定まる。』といふ。彼はそれに續いて労働の價值といふことを述べてゐるが、労働者はその労働を資本家に賣つて一定の賃銀を貰ふその賃銀が即ち労働の價值である。然し労働者そのものの價值と労働の生産物の價值とは決して同じものではない。ここに労働の生産物の價值といふのは労働者が労働して作り出した生産物全體の價值のことであり、労働者そのものの價值といふのは労働者が労働の報酬として貰ふ賃銀の高のことである。ところで或る資本家の事業に於いて、百人の労働者が一ヶ月間に十萬圓の品物を造り

出すが、百人の労働者全部の一月の賃銀の和は一萬圓であるといふ風に、その間に差異が生じて来る、換言すれば労働者はその労働の報酬として労働の生産物全體を貰ふのではなく、その生産物の一部分を報酬として受取るに過ぎない。然らばその労働の代價は如何にして定めるかといふと、彼によれば労働は凡て賣買せられるところの、そしてその分量を増減し得られるところの一般貨物と同じやうに、自然價格と市場價格とを有するものである。労働の自然價格といふのは労働者としてその數を増減することなしに、互にその生活を維持しその子孫を繁殖せしめるに必要なだけの生活費用である。換言すれば、労働の價値は労働そのものの生産の爲に必要とせられるところの労働の分量、即ち労働者及びその家族の生活を維持するに必要な貨物を生産する爲に必要とする労働の分量によつて定まるといふのである。ところで彼の言ふには、凡ての物の價格に自然價格と市場價格との區別があると同一やうに、労働の價格にもまた自然價格と市場價格とがあり、その自然價格は今述べたやうなものであるとして、市場價格はどうであるかといふとこれは市場の景況如何によつて一高一低を免れ得ない。けれども自由競争といふものが行はれてゐる以上は、貨物の價格を眞に動かすところのものは需要供給の關係で

はなく、實に生産に要する費用である。と、かういふのがリカードの労働價値説の大要である。

このリカードの説は、不思議なことに後に説く社會主義經濟學の創設者カル・マルクスの労働價値論及び剩餘價値論と、その議論の立て方に於いて符節を合するが如きものがある。然るにリカードはアダム・スミスからマルサスを經て資本主義經濟學の建設に於ける重大なる一人であるに反し、マルクスは社會主義經濟學の建設者であるといふ風に、兩者の立場が全く反對であるのは尙ほ一層不思議に思はれる。然し乍ら實は不思議でも何でもないので、リカードは労働者が自ら生産した價値の一部分だけを賃銀として受取ることは、經濟上の自然的法則に基く止むを得ざる現象であるとしたのに反し、マルクスはこれを以て資本家の掠奪であり搾取であるとしたのに過ぎない。つまり労働を以て價値の源泉であるとした點は兩者共通であるが、その同じ事實を兩者の立場の相違から全然正反對に解釋したのであつた。それは兎に角、アダム・スミスに發してマルサスを經た資本主義的な正統學派の經濟學は、リカードに到つて略完成を告げたと言つていゝ。然し、何事に限らず盈つれば虧くるのは世の慣ひで、それに對して

いろ／＼の反動的な説が起つてきた。以下それを順次に述べて行かうと思ふのであるが、忘れない中に言つて置かねばならないのは、正統學派はまた英國學派と言はれることがその一である。蓋し、アダム・スミスは勿論のこと、彼の學統をついで更にその學派を發展させたマルサスもリカードも、乃至はここでは言はなかつたがペンサムの如き人々も、皆英國人であるからである。この學派の特色として算ふべきものは、先づ資本主義的であること、個人主義的利己主義的であること、それにつれて自由放任主義的であること等である。その二は、正統學派といふ名は異端派に對する名前であることである。けれども別に異端學派といふ經濟學派がある譯ではない。ただ、異端的に目せられてゐるものはある。即ちそれは社會主義經濟學でなければならぬ。つまり資本主義經濟學と社會主義經濟學とを對立させて、前者を正統派と言ひ後者を異端と言つたのが起りであるが、然し經濟學派はこの二つだけではない。その間に二つ三つの有力なものがある。尤もそれらは、或る程度で資本主義的であり或る程度で社會主義的でありするのは止むを得ないところであらう。そこで本書に於いては、既に正統學派のことは述べ終つたからして次には社會主義經濟學以外のものを述べ、最後に正統派と呼應する意味に於いて社會主義經濟學のことを述べて次章に這入らうと思ふのである。

二 歴史學派

A 先驅者リスト

正統學派は經濟法則の研究方法として凡て演繹法を用ひる。即ち或る前提を基本として凡ての經濟現象を説明し、時と所とを選ばぬ劃一的な法則を求めようとするのである。例へばアダム・スミスだけについて言つて見ても、經濟行爲の動機は利己心であるといふこと、經濟行爲を爲す者は經濟に關する十分なる智識を持つてゐるといふこと、自由競争が敏活に公正に行はれるといふこと、その他多くの事柄を前提にして、それから演繹的に結論を導いて來るからその結論は明瞭は頗る明瞭である。然しその前提が抽象的であり假設的である場合が多いからして、折角明瞭なる結論も惜しい哉實際の事實に適合しない場合が尠くないのである。それにど

うやら資本主義に陥つて、例ひ社會に如何に貧富の懸隔が甚だしくなつても、生産の方面さへ發達してその能力が増大するならば、經濟上喜ぶべきであるといふのも頗る亂暴であると言はねばならない。正統學派の經濟學説は一時天下を風靡した概があつたが、今言つたやうに色々の不備缺陷が次第に暴露されて來、それに對する反動説も從つて起つて來た。

ナポレオンの没落後のことである。全歐洲は彼の爲に散々に荒されて、諸種の産業は大打撃を受けて一時頓挫を來した。然るに英國だけは例外であつた。同じ損害を蒙るにしても間接で、比較的輕微で済んだのである。やがて奈翁が没落すると共に再び産業の時代になつて見たところ、既に歐大陸の諸國は英國の爲に一步も二歩も先んぜられて居つた。從つて英國の工業品は潮のやうに歐大陸の市場へ輸入せられ、その結果諸國の産業家は非常の苦境に陥らざるを得なかつた。若しこのまゝに自由貿易主義を採つて放任して置くならば、諸國の工業は英國に追ひ捲られて根こそぎ廢滅して仕舞ひかねない有様に見えた。この時に當つてこの状態を憂慮し、多年の蘊蓄を傾けて反英國學派の經濟學を唱道したのは獨逸のフリードリッヒ・リス (Friedrich List) であつた。

一八四一年、彼は『國民的經濟論』を著した。その中で彼は、前に言つたやうに、經濟行爲を標準として經濟の發達を五階段に分類し、狩獵及び漁業時代、牧畜時代、農業時代、農工業時代、及び農工商時代とした。そしてこの中の農業時代までは自由貿易によつて差支はないが、次の農工業時代になつたならば決して自由貿易によつてはならない。若し自由貿易に依るときは先進國の工業に壓倒されて、自國の幼稚な工業はどこまで行つても發達を見ることが出来ないのである。然しながらその國の經濟が漸く進んで農工商時代となつたならば、その國の經濟は既に十分に發達したものであるが故に、再び自由貿易に復歸するのが得策である。これを實際に徴して見れば、現今の英國は既に農工商時代に入つてゐるからして自由貿易による方が得策であらうけれども、今尙ほ農工業時代にある獨逸や米國などは直ちにその眞似をしては飛んだ不利益を蒙る。自國の工業の發達を希望し、從つて自國そのもの隆盛を庶幾するならば、どうしても暫く自由貿易を差控へて保護貿易を行はなければならない。かういふ主張を彼はしたのである。

これを要するのに、彼は各國に亘り古今に通じて、一定不變の經濟法則なるものがあるべき

道理がない。従つて各國の經濟政策はその國の經濟事情に應じて適宜に變改する必要があると唱へたのである。かう主張することによつて彼は英國學派の劃一的な主張に反抗したのであつて、その著の標題も右の意を採つて特に『國民的經濟論』と名けた譯であつた。リストのこの主張は、實際の經濟政策に刺戟されたもので純粹嚴密に學的なものではなかつたけれども、鬼に角難攻不落の觀を示した英國正統學派の牙營に對つて放つた嚙矢であつたのである。これより次々に鋭く磨かれた征矢が、矢繼早に放たれることとはなつた。

B 建設者 ロッセル

リストは經濟學の原理よりも、寧ろそれに附隨する經濟政策が自國に當倣めて非であるところから、正統學派に對つて除外例を求めた形があつた。何れは正統學派に弓を引くものであり、二の矢三の矢を續かせる上に甚大の效果のあつたのは争はれないけれども、必ずしも堂々と正統學派を否定する意圖に出たものでないことも同様に争はれない。然るにその後十餘年を経た一八五四年に、同じ獨逸のライプチツヒ大學教授たりしロッセル (W. Roscher) は

『國民經濟原論』を著して正面から正統學派の誤謬を指摘し、全然別趣の經濟學を提唱したのである。

彼は先づ、凡そ經濟現象の研究は決して演繹法によつてなさるべきではない事を主張した。つまり或る成心の下に經濟法則を導き出す如何なる前提をも置いてはならない。その前提が正しくなかつた場合には勿論結論も正しくないが、例ひ前提が正しかつた場合でも論理的に導き出された結論は實際とは離れたものになる怖れがある。先づ前提を置いてそれから演繹的に説き及ぼすといふことは何れにしても危険であるからして、是非とも經濟現象の研究法は歸納的方法に改められねばならない。歸納法と言へば言ふまでもない、歴史上の事實を歸納して眞理乃至法則を求めるのである。即ちロッセルは假説的前提よりも歴史的事實を選んだが故に、彼及び彼の學說を祖述するものを歴史學派と稱する。ところで歴史といふものは國々によつて異なるものである。して見れば各國を通じて誤りのない劃一的な經濟法則が存在するといふことは信すべからざること、若し強ひて一般各國に通ずる經濟上の通則を定める場合には、各國の歴史的材料を集めた後でなくては不可能である。廣く各國の材料を集めるといふことは困

難な事柄で、従つて各國に通ずる經濟通則を斷定するといふことはそれだけ困難ではあるが、然し全然不可能といふ程のことでもない。況して或る一國についての經濟法則を求め、あるならば、十分に歸納的に出来ることであるのみならず、さうして得られた法則でなければ實際に即した眞の法則といふことは出来ないものである。殊に經濟法則に關しては、一國の經濟事情に照し合はせて適宜の政策を探らなくてはならないもので、單に理窟一遍で以て自由放任主義とか保護政策とかを定めるのは危険の上もない。かういふのが彼の主張で、主張の上からは自由放任主義が是とも保護貿易が非とも言つて居ないけれども、そこはリストの系統を引いて正統學派の説を駁撃するものであるだけに、また當時の國情が自由貿易をすれば英國に蹴押されて不利益であつただけに、意のあるところは保護貿易主義の是認と擁護にあつたことは疑はれない。

C 社會政策論者

ロッシェルは斯く論ずればとて、經濟原理の少しく細いところになるとさうく突飛な説の出

せる譯のものではなく、結局は正統學派の説と大同小異のものにならざるを得ない。然し乍ら、經濟原理ではなく經濟政策の方面になると正統學派とは全然面目を一新した説の出て來るのは當然で、従つて歴史學派には政策論者が多士儔々の有様を呈したのは自然の勢ひであると言へる。彼等は表面上は歴史學派の別働隊であるが、實際に於いては同派の主力であつた。といふのは、歴史學派に於いては歴史的事實と經濟政策の研究にばかり熱心で、經濟原理の研究は自然閉却されたことを示すものである。

そこで彼等は、單に貿易政策を論じて保護貿易主義を主張する位では満足せず、更に社會政策について更に論議した。そして社會政策論者にも二派あつて、社會問題を解決するについて主として國家の力によらんとする派が第一、これにはシュモラー (Schmoller) 及びワグナー (Wagner) 等が屬してゐる。今彼等の主張を聞くのに、國家社會の目的はその社會に屬するものをして幸福ならしめるにあるが、社會の上流階級者はその經濟力によつて自ら幸福を得ることが出来るだらうが、下層社會のもの殊に労働者は自分自ら幸福を得る力を有しない。それ故に、國家は彼等を助けて幸福なることを得させ、それによつて社會の全員を幸福ならしめる

といふ國家社會の目的を達成しなくてはならない。茲に於いて國家の社會政策は、その勞働者に及ぼすべき影響を十分に研究考慮した上で、彼等の幸福を増進するものではなくては行つてはならないと言ふのである。その一例として、一八七一年にしたワグナーの演説の中に右の主旨の下に國家の行はねばならない常面の政策が述べられてゐるから、それを參考の爲に列擧して見よう。一、土地の所有權を制限すること、二、租税法を防止して少しでも勞働者の負擔を軽くすること、三、勞働者と資本家とを包含する團體を組織して兩者の間を圓滑にすること。四、勞働者保護法を制定して彼等を極端な經濟的不幸から救ふこと、五、勞働者保護法を制定すること、六、勞働者の住居を改良すること等であつて、これらは須く國家の力を以て行はねばならないといふのである。然るにブレントノ (Brentano) 等、社會政策論者の第二派は勞働者の幸福の増進を圖らねばならない事を説く點に於いて前者の異なる所はないが、ただ其の手段に於いて意見を異にする。彼等によれば、勞働者の幸福増進は極めて可であるが、然しなから其の事に對して國家が干渉するのは不可である。勞働者の幸福は勞働者のみが眞に知つてゐるので、國家が餘計な干渉をした結果が反つて勞働者の幸福を奪ふやうなことになるまいと

は斷言できない。且つ、現在の國家が眞に勞働者の爲に幸福を増進するの途を圖り得るや否やは更に疑問であるから、勞働者はさういふ當にならないものを當にすることなしに、勞働者自身の自由意志によつて作つた團結例へば勞働組合等の力によつて該問題を解決しなくてはならないと主張するのである。

斯く、社會政策論者は資本家の利益を抑へて勞働者の幸福を高めようとするものであるから、その點から見ると彼等は社會主義者と殆んど選ぶところが無い。たゞ實際運動には手を染めずに講壇から唱へるだけの差に過ぎないといふところから、時に彼等は講壇社會主義者と呼ばれることがある。けれどもこれは皮相の見で、彼等の論ずるところと社會主義者の所論とは、その根柢に於いて異つてゐるのである。社會主義の委しいことは後に譲るけれども、社會主義は大體に於いて現今の經濟組織の基礎であるところの私有財産制度を破壊して悉く社會の所有とすべきであることを説くのであるが、彼等所謂講壇社會主義者等は、私有財産制度を破壊しようとはしらずに單に現在の經濟組織の下に於いて、出来るだけ勞働者の利益を増進しようといふのである。従つて彼等は、その可能不可能は別として、社會主義經濟學に對する資本主義經

濟學の原理を採用してゐることになるから、その點で決して社會主義の名に値しない譯である。然し、この歴史學派とマルクス等の社會主義經濟學とは、非常に近い間柄にあるといふことだけは否まれない。

三 英國學派

獨逸派の歴史學派は英國派たる正統學派に一步を抽ん出たところのあつたのは事實であるが、然しこの派に屬する學者が兎角歴史上の事實と經濟政策の研究にばかり熱中して、肝心の經濟原理の研究は動もすると閉却せられ、歴史學派が一議にも及ばず正統學派の經濟原理を借用して怪まないうやうな醜態もないではなかつた。そこで其の缺陷を補ふ爲に現はれたものが英國學派である。

英國學派の代表者はカル・メンガー (Karl Mengler) である。彼は一八七一年に『經濟學の諸原理』を著して、經濟學の基礎觀念の解剖から始めて諸多の經濟法則を説明したのである。

彼に續いてパウエルク (Baueck) やワイゼル (Wieler) 等の學者が、相呼應して經濟理論の研究に努力した。爲に經濟學の研究は長足の進歩を見たので、何れは正統學派系のものであるけれども今のところこの派の上を越す經濟學派はないからして、特に斯界に於ける最新派と稱せられる。本書の第一章は主としてこの派の説に據つたものであり、第三章以下も同様にこの派に據らうと思ふから、その點は豫め御承知置きを願ひたい。

ところで、この派は研究方法としては専ら英國派流の演繹法にのみ従つては空論に流れる虞があるが、さればと言つて獨逸派流の歸納法にばかり頼つたのでは經濟原理は成り立たない。この方法を適宜に併用しなければならぬ。勿論法則は天から降るものでも地から湧くものでもないから、或る法則を發見する爲には先以つて歸納的な研究を必要とするが、その法則を基礎としてそれから演繹的に諸般の原理を説くといふのは之れ科學の面目であつて、籤から棒に或る前提を持つて來るのはいけぬが、單に事實を掻き集めたところでそれが科學でもなければ經濟學でもないと言ふのである。これは確にそれに違ひないが、實際については如何であるかといふと、同派は主として原理の研究に傾倒する結果、適當といふよりは少し以上に演繹法

に頼つてゐる傾がある。蓋し止むを得ないところであらう。彼等は既に方法に於いて幾分英國派に傾いてゐると共に、全體の態度も幾分英國派に同情してゐるやうに見受けられる。先づ歴史學派が物の見境もなく英國學派の學說を破壊しようとするのに對して、英國學派は頻りに英國派の長所を擧げて彼等を辯護し、短所を補つてこれを生かさうと努力した。それと共に歴史學派の諸國に通ずる經濟法則は存在しないといふ至極短氣な獨斷に反對して、吾々人間の心理作用の方面から研究を進めて行けば、結局人間全體に通じ従つて各國に通ずる經濟法則を發見できない筈はないと主張するのである。この主張は、兎に角理論としては通つてゐると言はねばならない。……以上三派は經濟學派の中で最も著名なものであり、後は社會主義方面を述べれば足る心持もするが、序だから多少の特色ある佛派及び米派を簡單に述べて置かう。

四 佛國派と米國派

先づ佛國學派から言ふと、彼等は英獨の何れかから影響されたものであるから、獨逸學派に

近い者も中には居るけれども、その多くは更に一層英國學派に近い。佛國の經濟學者の多くは經濟法則の存在を認める。この點で獨逸學派とは反對で英國學派と同じであるが、たゞこの法則は常に單純な形式で以て何時どこでも同じやうに働くものではない、時と所とによつて種々の原因から色々に變化して現れるものであるから、その法則を求めようとすれば千態萬狀の現れを分析して特殊の事情を除き、純粹なものに還元して行くより外に仕方がない。つまり法則は事實の歸納的研究によつてのみ求められ得るといふのであるから、この點に於いては寧ろ獨逸學派に近い譯である。次にこの學派の經濟政策に對する態度はどうかといふと、原則として勞働、營業、貿易等の自由を認めるといふ點で英國派に近く、純然たる徹底的自由放任を不可として國民の經濟行爲の監督及び保護を以て國家の任務と考へる點で獨逸學派に近い。斯様な次第で、佛國經濟學派の經濟原理並に經濟政策に關する研究上の位置は、略英獨兩學派の中間にあると言ふことが出来るであらう。

次に米國に於ける經濟學を見ると、米國の學者は最初は英國學派の學說をそのまま繼承して、

特に甚しく米國の國情に通じないものは適宜に改訂して居つたに過ぎない。これはその國情から見て蓋し當然の事柄であつたと言はねばならない。

然るに一八八〇年代に入つて獨逸の歴史學派の説を輸入するに及んで、米國の經濟學界は俄然として活況を呈するに到つたのである。抑々米國に於ける經濟の發達は歐洲のそれとは全然趣を異にするもので、米國でなくては見ることの出来ない經濟現象、例へばトラストのやうなものも多々ある故に在來の經濟學說によつては説明に困難を覺えたからして遅かれ早かれ英獨とは異なる一生面を打開せねばならない必要に迫られた譯であつた。先づ米國學派は原理の研究に於いて英獨學派の説を折衷して獨特の進歩を遂げたが、然も英國學派とも違つて經濟現象を靜的に見ずに動的に見、これを生産力の觀念を以て説明しようとして試みた如きは確に學界の一異彩たるを失はない。それから經濟政策の方面に於いては、大體保護主義と放任主義との勢力が相半してゐるけれども、外國貿易についてだけは殆んど全く保護貿易主義に傾いてゐる。

五 社會主義經濟學

A 社會主義經濟學の成立

以上を以て廣義の正統學派の説明を終つたから、今度は社會主義經濟學のことについて述べる順序となつた。社會主義と言へば誰でも直ぐにマルクスを思ひ出すであらうが、然し社會主義的な思想はマルクス以前の古くからあつたところである。例へばこの章の始に言つたゴッペンンの思想、マルサスの人口論の爲に散々に追ひ捲られてしまつた彼の思想なども、確に一種の社會主義思想に違ひなかつた。然しながら、社會主義の經濟學を建設したのはマルクスである。つまりマルクス以前には社會主義思想はあつたけれども社會主義そのものはなく、マルクス以前には社會主義經濟思想はあつたが社會主義經濟學はなかつたのである。然し、マルクスといふ社會主義者がいきなり世の中に生れて來た譯ではなく、また生れる譯もないのであつて、

彼の生れる以前からあつた社會主義思想が凝つてマルクスの社會主義となり、マルクスといふ社會主義者が彼以前の社會主義經濟思想を集めて改良して社會主義經濟學にしたのであるから、先づここでは社會主義經濟思想が社會主義經濟學になる迄の間のことを話しようと思ふ。社會主義といふ言葉の起りは比較的新しいことで、それが經濟學上の術語として認められるやうになつてからは未だ百年と経つては居らない。社會主義の名稱はこのやうに新しいけれども、若し最も廣義に解して財産の私有獨占を否定せんとするものを社會主義と名けるならば、これは人類と共に古いものであると言ふことが出来やう。例へば印度及び支那等の東洋古代の思想家にはさういふ思想を懐いて居つた者の少くなかつたことは吾々の知るところであるが、希臘古代の代表的思想家たるプラトンやアリストテレス等にも社會主義的思想があつた。例へばプラトンの『共和國』に示されてゐる社會改良策などには可なり過激(?)な社會主義思想が盛られてゐるのである。更に宗教家の方面を見るといふと、釋迦にしろ基督にしろ、其の他の多くの宗教の開祖は恐らく皆一様に社會主義的な思想を持つて居つたことは推測に難くはない。蓋し、自分のもの他人のものといふ限界を嚴重にする結果、その爲に心を煩はし魂を惱ます

よりも、天下のものを天下の人々と共に享有するといふ思想の方が、彼等にとつて遙に親しい思想であつたに相違ない。かういふ風に考へるならば、『空想的社會主義の起原は古代の霧の中に失はれる。』と言つたローリヤの言葉の正しいことを首肯せざるを得なくなる。

然し今日一般に言はれてゐる社會主義といふのは、かういふ廣義な漠然としたものではなく、もつと限定された意味を持つた經濟上の主義である。つまり現今の資本主義的經濟組織の下に於ける資本主義的財産、即ち資本の私有に反對することを主義とするものであつて、一層簡單に言へば資本主義的經濟組織の廢止を主義とするものである。とすれば、社會主義は資本主義に相對するものであつて、資本主義の經濟組織が歴史的に生じた歴史的產物である以上、それに対する社會主義もまた歴史的なもの、従つて一時的なものであるに過ぎない。そしてそれは現に、資本主義的經濟組織が必ずしも崩壊するに到らない今日、既に盛に特殊化しつゝある。つまり社會主義系の諸派に分れつつあるのである。然し今は、専ら廣義の社會主義が今日の狹義の主義に凝結する筋道を歴史的に辿ることによつて、社會主義經濟學の成立するに到る由來を述べて見ようと思ふのである。

社會主義といふ名前さへなかつた時代のことは暫く措く。社會主義といふ名前の生じて以來の約百年間に、それは如何なる進化の路を辿つて來たか。このことは二つに分けて考へることが出來やう。その第一は社會主義の理想乃至理論に於ける進化であり、その第二は社會主義の理想を實現する爲の手段乃至運動に於ける進化である。この二つは勿論離るべからざる關係の下にあり、殊に最近に特殊化した分派などはこの第二の實際的方面を看過しては無意義になるものすら有ると思ふが、本書の性質上その方面に深入りする必要はないと思ふからして、便宜上第一の問題だけに限つて進化の跡を述べる事とする。

社會主義はその思想全體の學問的性質を標準とする時は、これを空想的社會主義と科學的社會主義との二つに分けるのを普通とする。言ふ迄もなく初期の社會主義は空想的であつて、それが過去百年足らずの間に次第々々に科學的基礎を有するに到つたものである。そこで初期の空想的社會主義者等は、將來の理想的社會をいろ／＼勝手に空想したといふだけの話であつて、時にはそれを實現しようとして試みた人々もあるにはあつたが、彼等の理想なるものが果して實現せらるべき可能性を持つてゐるかどうかといふ事については殆んど考へて居らないが、或

は考へたにしても現實に對する科學的知識を根據としなかつた嫌がある。例へば前に話したゴッピンであるが、彼は先づ正義といふ觀念から出發をし、正義は人間の理性の要求するところであり、理性は萬人に備へる人の本性であるとした。次に正義を分析解剖して、正義とは自分の利益よりも社會全體の利益を先に立てることであるから、餘分の財産があつたら他人に譲り與へるのが正義であり、従つて共產主義の社會が正義の行はれてゐる社會である。然るに正義は理性に基き理性は人間の本性であるから、人々が少しく心の眞の要求に聽従すれば共產主義の社會が現出せねばならない筈である。かういふのがゴッピンの議論であるが、さて實際が果してさうなるかと言ふと必ずしもさうはならない。何故ならいふ言ふと、ゴッピンの論はゾルレン（當爲）に基くものであつて些つともザイン（實在）に根ざして居らないからである。人間は斯くせねばならないとは言つても、人間が斯くあるといふ問題、例へば人間の理性が共産を肯んずる程正義の觀念に對して有力であるかどうかといふ現實の問題を徹底的に究めて居らない故に當が外れるのである。つまりゴッピンは結局實行不可能なことを主張した譯で、彼の理想は如何に高遠であつても空想に過ぎなかつた、彼は空想的社會主義者であつたと

しよんとに歸してしまふ。

空想的社會主義の代表者としては佛蘭西のサン・シモン (Saint-Simon) フーリエ (Fourier) 及びカベール (Cabet) それに英國のロバート・オーエン (Robert Owen) 等が算へられる。サン・シモンは彼の晩年一八二〇年頃の著述たる『新基督教』の中で、貧民の爲の主張を宗教の形に於いて現してゐる。彼は最も多數であつて最も貧困な階級の、道徳的、知識的、肉體的改良が一切の社會制度の目的であるとして、それを達成する爲に私有財産を國有財産に考へ、凡ての人々が能力に應じて働き、その勞働の結果を報酬として受取ることを經濟生活の原則とせねばならないと唱へた。その外に彼の思想は近世社會主義の萌芽とも見るべきものを多分に含んで居り——國際主義及び唯物史觀の萌芽等——『近世社會主義の父』と呼ばれるフーリエは一八二九年に『産業及び社會上の新世界』といふ本を著して、將來の理想社會のことを細々と述べてゐる。彼によれば將來の理想社會の單位は國家ではなくて地方的團體であつてはならないといふので、社會の究極的構成要素たる地方的單位をファランジュと名づけた。一ファランジュは約四百家族の千八百人を以て組織され、一平方リーグの地域を占めて分

擔的に種々の農業産業が行はれる。ファランジュの住宅はファランステールと言つて藝術的であると共に實用的であり、その中で人々は自分の好みによつて獨棲することも共同生活を営むことも出来る。個人の自由の貴ばれるのは勿論のこと、戀愛も自由であることは言ふ迄もない。自由戀愛による男女の結合は、自由に解くことも出来る代り恒久的な結婚となつても敢て差支はない。勞働は科學的方法によつて行はれるが同時にそれは愉快なものであることを要し、勞働の生産物はファランジュの収益となるが、ファランジュはその中から各人の生活を樂しくするに必要な最小量を全員に分配する。そして殘餘の十二分の五は勞働者に、十二分の四は資本家に、十二分の三は技能に應じて分配される。斯く凡てが個人的に處理されるからして、ファランジュでは婦人の經濟的獨立が十分に保障されるのである。フーリエによれば、斯くの如きファランジュを實驗的に一地方に拵へて見、これが成功すれば全世界を同様のファランジュを以て覆ひ、各ファランジュは一人の首長を選擧し、三個乃至四個のファランジュが聯合して全體の長を選び、漸次大きくなつて全世界のファランジュが集つて一大聯邦を組織し、コンスタンチノープルを以て全世界の首都とするといふ計劃であつた。勿論これは夢であ

つて、實驗用の一ファランジュも出来なかつたが、然しこの中には多くの暗示が含まれてゐるのである。

次にカペーは一八三九年に有名な『イカリヤ國航海記』といふものを書いて、イタリヤ國の理想的社會状態を描いてゐる。このイカリヤ國は平等主義共産主義を實現しつゝある理想郷で、例へば凡ての人が皆一様の服装をすることになつてゐて、各人の好みによつて選擇できるのはただ服地の色だけである。尤も男女とか老若とかに應ずる必要已むを得ない差別は別に設けてある。男子は十八歳から六十五歳まで、女子は十七歳から五十歳まで、悉勞働に従事する義務がある。勞働時間は夏は七時間で冬は五時間、但し女子の勞働時間は一日四時間を限る。午後の一時になると一切の勞働は中止せられて、各々勝手なことをすることが出来る。嫌な仕事は凡て機械で片づけ、人は愉快的勞働しか行はないから殆んど勞働といふよりは運動と言つた方がよい位、皆の氣が揃ふから貨物の生産は夥しい高に上り、それが社會一般の人々に平等に分類される、従つてこの社會には貧困といふものがなく犯罪といふものがない。其他これに類することが諄々と書かれてゐる。英國のロバート・オーエンは一七七一年に生れて

一八五八年に死んでゐるが、貧家に生れて十歳で奉公に出たが十九歳で五百人の職工を使用する大工場の支配人まで成功した。そしていろいろと慈善をしたり施設をしたり教育をしたりして見た後、結局共産主義より外に社會を救ふ道がないといふことに歸着したのである。彼は社會改革の障害は私有財産制度、現在の結婚制度、及び宗教であるとして、非常な迫害をも顧みずこれらの制度を攻撃した。そしてマルサスの人口論に對して、富は機械の移入によつて人口も遙に大い比例で増加した故に、問題は人口を制限することではなくて富の分配を公平にするのが第一であると言つて資本主義經濟學に楯ついたのであつた。彼もフリーエと同じやうに共產村即ちコミュニティの空想を描き、アメリカのインディアナ州に渡つて實驗して見たが、二年間の苦心も水泡に歸して英國に歸つて來たが、それと同時に財産の全部を失つたので直接労働者の群に投じて社會主義の宣傳者となつた。彼は直接労働運動家としては目覺しい効績を挙げたが、理論的には矢張り空想社會主義であつて、彼を動かしたものは事實の認識よりも寧ろ理想に對する感情であり、彼の社會主義は眞理、理性、正義等の表現に過ぎなかつたのである。以上の諸例によつても知られる通り、初期の社會主義は皆空想的であつた。然るに時代を經

るに従つてそれが漸次に現實的になり、遂にカル・マックス (Karl Marx, 1818-1883) が出るに及んで、社會主義は始めて十分な科學的基礎を有することとなつたと言はれる。今日、世界で最も勢力のある社會主義はマルクス派であるから本書では専らこれについて見ようと思ふのであるが。そのマルクス派の社會主義が一般に科學的社會主義であると言はれるのはどういふ譯かといふと、それはマルクスによつて始めて一つの理論的體系を有する獨立の科學として體面を備へた社會主義經濟學が唱へられたからである。つまりマルクスによつて空想的なものが科學的になつたのである。然らばマルクスは如何にして空想的なものを科學的にしたかといふと、先づ彼は社會の經濟組織は昔からどういふ原因に基いて變化して來たかを研究した。その結果、彼は凡て社會の經濟組織はその社會に於ける富の生産力の發達程度、又は生産の法の發達に應じて定つて來るものであることを發見した。社會の經濟組織は一二の爲政者がかうしたいとか斯う改めたいとか考へたところで如何にもならないので、手車で糸を紡いで居つた時代には封建的組織より外に仕方がなく、蒸汽機關を使つて紡績する時代には現在のやうに資本主義的組織より外に仕方がない。富の生産方法のみが經濟組織を動かし得、經濟組織が

動けば政治も動き學問藝術皆動く、かうしてマルクスは考へたのであつて、歴史の動きをかういふ風に見る見方を唯物史觀 (經濟的歴史觀) と言ふ。

この唯物史觀を考へたのは彼の未だ三十に充たない頃で、この考を基礎に置いて今度は英國學派の經濟學の研究に取かかつた。そして彼は今日の資本主義的經濟組織は、遠からぬ中に必然的に崩壊に陥らねばならないものであることを看取したと言はれる。彼の意見によれば、如何なる經濟組織も一時的なものであり歴史の運命の下にあるものである。そしてその組織は、社會の生産力の發展の爲に有利である間は維持されるが、社會の生産力の發展を妨げるやうになれば必ず崩壊するといふのである。ところで現在の資本主義的經濟組織は曾つては社會の生産力の發展の爲に好都合であつたが、好都合であればこそ發達したものであるが、それも或る程度に發達すれば各方面に於て社會の生産力の發展を妨げるものとならざるを得ず、現に色色の堪へ難い弊害を醸し出して來つつある。故にこれは早晩崩壊し、それに代つて社會主義的經濟組織の行はれるのは明かである。かういふ關係をば、現代の資本主義的經濟組織を縱横に解剖することによつて學問的に論證しようとしたのが、彼一生の大著たる『資本論』三卷の

目的であつたのである。

要するに、マルクスのした思索上の仕事は單に彼の希望する理想社會を描出したのではなく、科學的研究の結果將來の經濟組織は斯くあるべしと豫言したのである。當然來るべき變化を論證したのである。言はゞ空想的社會主義者達はその理想社會を發明したのであるが、マルクスは社會主義的經濟組織の行はれる社會の實現する條件を現代の社會に於いて發見したものと云つていふ。マルクスは空想的な事柄は絶対に説いて居らないからして、従つて空想的社會主義者のやうに細いことまでは言はずに、單に將來の社會には資本家と労働者との階級的對立がなくならないと豫想を述べてゐる位のものである。蓋し發明ではなくて發見であり、希望ではなく論證である限りは己むを得ないと言はねばなるまい。

B 唯物史觀と階級争闘說

マルクスの社會主義には二つの理論的根據がある。その一つは彼の歴史觀であつてその二は經濟論である。そして彼の歴史觀即ち唯物史觀又は經濟的歴史觀には、缺くべからざる要素と

して階級争闘說が含まれてゐる。つまり凡ての歴史は階級争闘の歴史であるといふ考であり、従つて今日の社會組織は資本家と労働者との對陣であつて社會主義を實現する手段は階級争闘の外はないといふ考である。それ故に彼の經濟論を知らうとすれば彼の唯物史觀を抜きにする譯には行かず、唯物史觀並びに經濟論を貫くものは階級争闘說であるといふ關係になつてゐるから、先づ以て唯物史觀と階級争闘說について一應述べて置かねばならない。

唯物史觀は前にも言つたやうに、マルクスの經濟學研究の基調となつたものであつて、彼の凡ての説はこの思想を背景としてゐる。彼の専門的研究は最初法學であつたけれども、一八四二年から四三年に亘る『ライン新聞記者』時代に經濟上の問題にも筆を染めねばならなかつたが、彼の從來の研究だけでは權威ある批判を下すに足りないことに氣がついたことが、彼をして經濟學の研究に没頭せしめる動機であつた。即ち、政治や法律はそれ自身では根本から理解することが出来ぬ。それを理解するにはその根柢に横はつてそれらの變化の動因となるものを明かにせねばならぬといふ考から、彼はそれを經濟學に求めて經濟學の研究に着手したのであつた。そして彼は先づ唯物史觀といふものに逢着した。

彼によれば、人類が自分の生活を社會的に維持して行かうとすれば、つまり社會の人々と何等かの關係を保つて物質的生活を營んで行かうとすれば、或る一定の生産關係又は社會的境遇に入り込む外はない。その生産關係は其の人の生れない前から社會の生産力の如何に應じて一定してゐるものであり、従つてその人の意思とは獨立に決定されてゐるものであるが、その關係が氣に入らないと言つても少くも無産者はその關係に入り込まねば生きて行けないのである。早い話が、今日此の世に生れた無産者は、經濟的生活を營まうとすれば嫌でも應でも資本家對労働者の關係に入り込んで、銀行なり會社なり工場なりに備はれて資本家の手足となつて働く外はないといふのである。尤もこの所謂生産關係は生産は力の發展の程度によつて同じくはないので、昔の同業組合時代には親方と職人との關係であつたが今日では資本主と労働者とといふ關係であるといふ風に變る。即ち生産力が變るといふことは生産關係も別種のものになるが、或る生産關係が出来ることに應じた特殊の分配關係も従つてまた生じて来る。例へば昔の奉公人は主人から衣食住を保障された上に若干の小使を貰つたものが、今日の店員は日給幾らの貰ひ放しであるといふやうな具合である。兎に角、一定の生産關係にはそれに應ずる一定

の分配關係が伴ふのであつて、この二つは同一のものの表裏をなして居り、これらの生産關係と分配關係とが合して社會の經濟組織といふものが出来るのである。そしてその經濟組織が形の上に現れて來たものが、その國の法律及び諸制度であつて、マルクスはこれを上層建築又は上部構造と言つてゐる。つまり一の建物を一の社會と見做して、經濟組織は地球や土臺の基礎工事に相當し、これが眞の社會の礎になつて、其の上に壁や窓や天井や屋根等の上部構造が置かれる。これが即ち政治上法律上の制度だ。その上に更に宗教上、藝術上、哲學上の精神的生活に屬する文化といふ飾がついたのであつて、結局物質的生活の生産方法が社會的、政治的、及び精神的の生活過程を條件づけられてゐるといふのである。勿論、土臺があつてそれが原因になつて壁や屋根が出來たとは言はれないが、土臺があるのでそれに相當した壁や屋根が維持されてゐるといふ風にマルクスは見たのである。

社會の生産力に變動が起る。それは機械の發明が原因であつたり政策上の變化、例へば鎖國が開港になつたりすることが原因であつたりする。兎に角生産力に變動が來れば、それに連れて必ず生産關係が變つて來る。然るに生産關係の裏は分配關係であるからこれも變化し、生産

及び分配の關係の綜合されたものは經濟組織であるからして、必然的に經濟組織も變らざるを得ない。一度び經濟組織に變動が起るといふと、その土臺の上に立つ建物、つまりその實質を形式に現したところの法律及び政治の諸制度も一樣に影響を受けて變化を來す。經濟組織が變り法律政治制度が變れば、廣い意味に於ける社會關係といふものは全部變動した事になる。社會關係全體が變動して來るといふと、その社會に流行して居つたところの宗教、藝術、道徳、哲學等凡てが變る。これらは精神的文化の表現形式であつて、マルクスはそれを社會の意識形態と呼んだが、それが變つて來るのである。尤も個人の特殊な思想がさう規帳面に變るといふのではない、その社會に廣く流行する思想即ち社會思想が變つて來るといふに過ぎない。斯く、社會關係が變るにつれて社會思想の變るのを、マルクスは歴史の進行と名けてゐる。そして社會關係と社會思想の變遷を名けて歴史と言ふのであるから、彼によればこれらの問題に關係のない如何なる事變も決して歴史にはならない。凡ての事件は一般社會の變遷の上から見て意義のある點に於いてのみ歴史的意義を持つ。マルクスの言ふ歴史とは凡て斯くの如きもので、かういふ歴史の進行するについてその根本條件となるものが社會の物質的生産力の變動であるか

ら、そこで彼の歴史觀は一元論的な物質的歴史觀——唯物史觀、經濟的歴史觀——であるといふことになる。

以上はマルクスの唯物史觀の大體であるが、唯物史觀は彼の歴史の觀方であり、歴史の研究方法であり、兼て彼の經濟論の根幹である。ところで此の研究方法で從來の歴史を研究した結果、マルクスがその中に認めたものは階級の對立と階級の争闘との事實であつた。この事は彼の有名な『共產黨宣言』が、『凡ての從來の社會の歴史は階級争闘の歴史である。』といふ一句で始つてゐるのを見ただけでも明かに解るのである。

然らばマルクスの所謂階級とは何であるかといふと、それは専ら經濟的階級の謂である。經濟的に他人を支配してゐる人々と、他人に支配されてゐる人々との階級のことである。ではさういふ階級別がどうして生じたかといふと、共產社會から財産私有社會に移ると同時に出來たもので、即ち何處の國に於いても有史以後間もなくからあつたものである。この階級的對立の形式は、古から自由民と奴隸、貴族と平民、地主と農奴、領主と百姓等いろ／＼あつたが、極

く大雑把に言へば亞細亞的、古代的、封建的、資本主義的の別があつたと言へる。けれども其の何れに於いても本質は支配者と被支配者、壓制者と被壓制者との對立であることに變りはなかつた。古くは言ふ必要がない、最後の資本主義的社會に於ける階級對立の有様はどうであつたかといふと、言ふ迄もなくそれは有産階級と無産階級、資本家と労働者、ブルジョアとプロレタリアの二階級の對立であつた。この中ブルジョアといふのは社會的生產機關の所有者の階級であり、プロレタリアといふのは生活の爲に自分の労働力を商品として賣る階級のことである。勿論ブルジョアと言つても大資本家もあり小資本家もあり、工業家もあり商業家もありするし、プロレタリアと言つても年俸を貰ふから日給を貰ふもの、乃至は一寸手を借して幾らかを貰ふものまでいろいろある。そして富や社會的勢力の側から言へば小資本家に優る高級労働者もさらにあるが、然も凡ゆるブルジョアと凡ゆるプロレタリアとを區別する點が一つある。それは、ブルジョアは生産機關の所有によつて生活の資源を得てゐるものでありプロレタリアは自己の労働力を賣ることによつてのみ生活の資源を得てゐるものであるといふ一點である。そしてこの區別は經濟的に調和することの出来ないものであつて、兩階級の經濟的利害は融合

する術のないものである。からして従つて、兩階級の階級的爭鬭は免れ難いものとなつてくる。

階級爭鬭はどんな形で現れるかといふと、最初は經濟的爭鬭でありそして個人爭鬭である。労働者はなるべく自分の労働力を高く賣らうとし、資本家はなるべく労働力を安く買はうとする。つまり片方は高い賃銀を取らうとし片方は安い賃銀で使はうとするのである。けれどもこの取引に於いては労働者の方が甚だ歩が悪い。何故かといふと労働者は、そして無産者は、その労働力を賣らなければ社會的生活を營むことが出来ずに餓死してしまふ。この弱點につけ込んで、資本家は労働者が辛うじて労働を續けてゆくことの出来る最少限度の賃銀で以て労働力を買い取らうとし、そしてそれは間違なく成功するのである。斯くて資本家と労働者との、個人的經濟的爭鬭では労働者の方が負けるものに極つてゐる。資本家は嫌なら傭はないまでだから、所謂金持喧嘩せずで殆んど爭鬭にならない。爭鬭にならないから労働者は勝てない。勝たないで高い賃銀を得ようとすれば、勢ひ胡魔でも摺る外に道がないのである。勝たもつと高い賃銀を取りたい、また取るのが正當である、が個人では爭鬭が出来ない、と言つ

て胡魔も摺れない、何しろ正々堂々と争闘して當然の取分を取らねばならない。そこで労働者は多人数が團結して資本家に當ることになる。つまり個人的争闘が集團的争闘に進化する。斯くて労働組合といふものが出来ることになる。その中に労働の階級的自覺が進んで來ると、資本家と労働者の衝突は偶然の出來事ではなくて、即ち單に労働賃銀の高い安いの問題ではなくて、資本主義的經濟組織から生ずる必然の結果であるから、その組織の存続する限りは永久に除去することの出来ない争闘であるといふことが解つて來る。かうなると始めて純然たる階級争闘が開かれることになり、かういふ純粹の階級争闘になると労働者の争闘の目標は單なる賃銀でもなく個々の資本家でもなく、實に資本家階級そのものとなり資本主義的經濟組織そのものとなる。争闘するからには勝たうとするのは當然で、階級争闘に於いて労働者が資本家に勝たうが爲には、是非とも權力を獲得して資本家の特權を奪はねばならないことになる。斯くなれば労働時間や賃銀やの問題は、最早や労働階級の争闘の終局の目的ではなくなつて、争闘の中心は權力の争奪に移る。即ち、經濟的争闘から政治的争闘へと推移することとなる。この意味から究極の階級争闘は政治的争闘でなければならぬと言はれるのであつて、蓋し政治

的權力なしには労働者階級が自らを解放することが出来ない故である。斯くして資本主義社會から新社會への過渡期に於いては、無産階級獨裁といふことが避くべからざる政治形態であると見られるのである。それから、右のやうに個人的から階級的へ、經濟的から政治的へと進化した資本家と労働者との争闘は、始めは必ず國內的に行はれる。けれども資本主義そのものは元來が國際的であり、資本の支配は國境を超越してゐるからして、階級争闘も結局は國際的のものとならなければならぬ。世界各國の無産階級は、一國となつて國際的な資本主義乃至資本家に當らなくては、到底勝算覺束ない。そこでマルクスの『共產黨宣言』の最後の有名な一句が出て來る。「萬國の労働者、團結せよ！」と。

マルクスの階級争闘説は大體以上述べたやうなものである。そこで今度は、資本主義的經濟組織が遂にかかる階級争闘を招致して、必然的に崩壊して新しい組織に代られる理由を聞かう。その秘密の扉を開くものが實にマルクスの經濟學説であらねばならない。

C マルクス經濟學説

『經濟上の範疇——價值、價格、利潤等——は社會的生產關係の理論的表現乃至抽象に過ぎない。……社會關係は密接に生産力と關係してゐる。人類は新しい生産力を獲得することによつて、その生産手段を變化し、その生産手段乃至生活資源獲得の方法を變化することによつて一切の社會關係を變化する。風車は封建的領土の社會を作り、蒸汽機關工場は産業的資本家の社會を作る。その物質的生産力に對應する社會關係を樹立する人々と同じその人々が、同時にその社會關係に對應する原理、觀念、範疇をつくるのである。斯くの如く、これ等の觀念、これらの範疇は、それ等が表現してゐるところの社會關係以上に永遠ではない。これ等は正に歴史的、一時的な産物に過ぎないのである。』これはマルクスがブルードンの『貧困の哲學』を批評した『哲學の貧困』の中で言つてゐる一齣である。マルクスにとつては、經濟學上の範疇は撓ることの出来ない鐵の框ではなく、歴史と共に變る軟かな鉛の框であつたのだ。舊經濟學者はその範疇に於いて解決を見出したものを、マルクスはそこに反つて問題を見出したのである。即ち彼は唯物史觀を發見したのであつた。

斯かる見地に立つマルクスの經濟學研究に於いて、第一に爲すべきことは現實の資本主義的

經濟組織の解剖と批判とであつた。そしてその解剖の第一のメスは、勞働者はその勞働の報酬として彼の勞働價值の極めて僅かな部分しか與へられない故に不都合であるといふ點に觸れ、先づ物の價值と勞働との關係を明かにする勞働價值説を以て議論の端緒を開いてゐる。實に、マルクスの經濟學説の基礎となり出發點となつてゐるものはこの勞働價值説に外ならない。そこでそれを順に述べて行かうと思ふが、先づマルクスによれば凡ゆる商品は使用價值と交換價值とを持つてゐる。使用價值は人間の精神的及び肉體的欲望を満足させる効用であり、互に異なる二つの商品が交換される時にその標準となるものが交換價值である。これは前にも言つたことであるが、その交換價值が交換の標準となる爲には、二つの異つた商品の中に共通のものが含まれて居らなければならない。それが即ち勞働の分量である。凡ての商品を勞働の分量に還元してしまへば、そこには最早や性質上の區別はなくなつて、それを計る場合には時間を單位とするより外はない。然し實際に商品の交換價值を決定するものは、その商品の一つ一つを生産する爲に實際に費された勞働の分量ではない。況して勞働時間の長さではない。例へば、一反の織物を生産するのに或る織工は二十時間を費し、それと同じ織物を織るのに機械を應用し

た工場では五時間しかかからなかつたとしても、その交換価値は四と一との割合にはならぬ。同じやうに一である。そこでマルクスによると、商品の交換価値はその商品を再生産する爲に社会的に必要な労働の分量によつて定るといふのである。そして交換価値が貨幣に換算されたものが即ち價格である。

今日の資本主義的經濟社會に於いては、事の當不當は別として實際に労働力も一の商品として賣買される。言ふ迄もなくその賣手は労働者であり買手は資本家である。そこで、労働力を商品として見れば、その労働力の価値もまた普通の商品たる米や反物やと同じやうに、それを再生産するに必要な社会的労働の分量によつて定つて來る譯になる。ところで労働力を再生産するに必要な労働の分量は如何なるものであるかといふと、それは労働者とその労働力を維持し、即ち健康を保ちつゝ家族を扶養するに必要な生活必需品の価値であつて、これが貨幣に換算されたものが賃銀である。

然るに、労働力といふ商品はそれを使用することによつてそれ自身の持つてゐる交換価値よりも大きい交換価値を作ることが出来る。例へば賃銀に相當するだけの価値を作るためには、

労働力を四時間使用すれば十分で、八時間使用すれば賃銀相當の価値の二倍を作ることができるとする。この場合に資本家はその四時間の餘分の労働力を目當にして労働力を買取るのである。即ち労働者を傭ひ入れる。傭はれた労働者は、その労働力を再生産するに必要な労働力の分量以上に、無報酬で以て餘分の労働をしなければならぬ。これは不都合である、と言つたところで労働者自身には生産機關がないから、労働をせずには餓死するなら知らぬこと、生きてゆく爲に労働をしようとならば、見す／＼不都合な不利な取引をもせねばならぬのである。この労働者の無報酬とする餘分の労働を剩餘労働と言ひ、この剩餘労働が生み出した価値が剩餘価値と呼ばれるものである。

勿論商品の価値は労働力の価値ばかりではない。その外に建物、原料、機械等の生産機關の価値が幾分づつ含まれてゐる。例へば一臺のミシンで以て五百着の小供洋服が生産されるものとする、一着の小供洋服の価値にはミシンの価値の百分の一と、一着の洋服に要する布地の価値と、それからその一着を作るに要した労働力の価値とが含まれて居る譯である。然し、生産機關の価値はその生産物の価値へそのまま繰り込んでゆくからして、資本家が生産機關

に投する資本の價値は、工場を経営し商品を生産することの爲に決して消耗するものではない。尤もそれが爲に増しもしないから、これは不變である。マルクスは資本の中で斯くの如く變化しない部分を不變資本と名けた。然るに、同じ資本でも資本家が労働力を買ひ入れる爲に、即ち労働者に賃銀を仕拂ふ爲に費す資本は、商品の生産の途中に剩餘價値を作るのである。早い話はこの資本は明かに殖えるのである。からしてこれを不變資本に對して可變資本と呼ぶ。

剩餘價値を生ずものは可變資本に限る。そして剩餘價値は生産行程に於いてのみ創造される。従つて資本家が企業に投資をする間際で生産の行はれる以前には、可變資本と不變資本とがあつたばかりであるが、生産が行はれた後にはその結果たる生産品には、可變資本と不變資本との外に新に剩餘價値といふものが加つて來ることになる。そこで

$$\text{商品價値} = \text{不變資本} + (\text{可變資本} + \text{剩餘價値})$$

といふ關係になる。

この餘剩價値を生ずるのは可變資本に限るのであるから、不變資本は別物で剩餘價値とは無

關係であるから、剩餘價値の率を算する場合には資本全體に對する割合ではなく、可變資本に對する割合で計らなくてはならない。これを餘剩價値率といふのであるが、これは經濟學の理論上の言葉で、經濟界の實際上の言葉で言へば餘剩價値は利潤、餘剩價値率は利潤率である。ところで資本家は、斯くして得た剩餘價値をばそつくりそのまま利潤として懐に入れる譯には行かない。何故かといふと、資本家は労働者を使つて剩餘價値を含んだ商品を生産しても、それを賣り捌かなくては其の餘剩價値は實際の利潤とはならないからである。然るに、それを賣り捌く爲には、また別口の資本が必要になつてくる。この資本は、剩餘價値を實際の利潤に變ずる爲の資本だから剩餘價値を生まないことは言ふ迄もない。つまり販賣は剩餘價値を生まないものである。然も剩餘價値を販賣によつて利潤にしなくては企業が立ち行かない。

そこで企業の中に分業が出來て、生産に投資する側と販賣に投資する側とが出來て來る。然るに販賣に投資する側の資本家は、販賣は元々剩餘價値を生ずるものではないからして、そして利潤がなくては企業は成り立たないからして、勢ひ生産側の資本家に剩餘價値の分前を要求せざるを得なくなる。それ故に生産的企業資本家は、例へば十の資本を出して二十の價値の

ある貨物を生産したとしてもその價值通りに賣つて十の價值を利得する譯にはゆかない。更にまた生産的及び販賣的企業資本家等は、利子や地代やの形式で以て土地所有者及び金融資本家に剰餘價值の中の幾分を引き去られるのである。かういふ風にして資本主義的生產制度の下に於いては、生産品はその價值以下で生産的企業家の手から放れるのを原則とする。それは今言つたやうに、剰餘價值が凡ゆる資本家——生産的企業家、販賣的企業家、地主、金融資本家等に分配されるからである。

ところが資本家達は、可變資本即ち労働者に拂ふ賃銀に對する剰餘價值の割合を利潤率とは言はないで、實際には斯くの如く諸方に分配される剰餘價值と資本總額との割合を利潤率と言つてゐるのである。そしてこの利潤率は、各企業に於いて略一定してゐる。利潤率が一定してゐるとすれば、資本の大小によつて利潤の大小が定まることになる。ところが理論上に於いて剰餘價值を生むのは可變資本に限るのであるから、資本總額の中の可變資本に多くの資本を投ずれば、それだけ剰餘價值は大きくなり、従つて利潤率も大きくならねばならない理由である。それが實際には各企業の利潤率が一定してゐるとすれば、そこには理論上の缺陷があるか乃至

は實際上の事情があるかの何れかでなければならぬ。マルクスによれば、それは確かに實際上の事情で、各企業家の間に競争が行はれるからであるといふのである。つまり利潤率の大きな企業は競争者が多くなる爲に、利潤率が平均されるといふのである。然しながら剰餘價值の分量が大きければ大きい程平均利潤率の高くなつてゆく事は事實で、平均利潤率の剰餘價值に對する關係をマルクス自身の譬で言へば、『種々の資本を種々の利率で貸し出す高利貸の平均利率と同じなのである。』その結果として商品は價值通りに賣られずに、

商品價值—生産價值+平均利潤

で以て生産的企業資本家の手を離れてゆく。そして商品價值から剰餘價值を差引いたものは商品の費用價值であるから、右の式は

商品の費用價格+平均利潤

といふ式に直すことが出来る。マルクスはこれを生産價格と呼んでゐるが、商品の市價は需要供給その他の關係から常に動搖してゐるから、生産價格が今言つた通りの經過を正確に辿つて

出来て来るものとは限らないのである。

以上はマルクス経済學說の中心たる價值說の大意であつて、彼は資本主義的生產組織をば以上の如く資本家が剩餘價値を搾取する生產組織であると見た。然し彼は、この組織を別に善い悪いのといふ譯ではない、社會の進化に伴つて必然的に生れて来たもの、歴史的使命を持つて生れて来たものと見る。けれども唯だこの組織が、彼の唯物史觀によれば最初は生産力の發達を促すものであつたからこそ生れて来たのであるが、やがて極度に成熟してその生産力の發達の障礙となるに到れば、理論上自然に崩壊する外はないといふのである。然らばこの組織は生産力の發達を阻止する程に成熟したかと言へば、殆んど十分に成熟したと答へる。

資本主義的經濟組織の下に於いて、資本家が企業をする唯一の目的は利潤即ち剩餘價値を得るが爲である。然るに生産力が發達するにつれて資本家が唯一の目的とする剩餘價値を得ることが益々困難になつて来た。つまり機械力の増進等によつて剩餘價値の源泉であるところの労働力を必要とすることが少くなり、従つて可變資本が減少して行つて利潤率が低下して来る。これがマルクスの所謂利潤遞減の法則で、彼はこれを以て資本主義的經濟組織の内部的矛盾の

第一とした。ところが資本家は、この利潤率の低下の傾向をば商品の分量の増大によつて補はうとする。言はば數でこなさうといふので、盛に生産の規模を擴大する。然してそれが爲には何よりも機械の應用を盛にせねばならず、その結果は労働者の數を減少して失業者を多くする。そこで折角生産を増しても市場の購買力が減少するから、生産過剩となり恐慌になり生産力の癱痺となる。強ひて捌かうとすれば市場の競争や原料の競争となり、終には國際戰爭までも引起す。その一方には資本の集中によつて労働者を團結させ組織させる結果となり、果は階級争闘の實現を促す。

斯く、資本主義經濟組織は生産力を發達させたことは著しいものであるが、遂にはその生産を包容することが出来なくなつて内憂外患度々到り、必然的に崩壊せざるを得なくなつてしまふ。そしてマルクスの唯物史觀の教へるところによれば、資本の集合及び集中の結果は新しく更に高度の生産關係即ち社會組織の、物質的存在條件をその資本主義的經濟組織の内部に準備する。然も常に物質的條件のみには止らない、その資本主義を崩壊する武器としての物質的條件を操る人、即ち労働者階級の數と勢力とを公然的に増加せずには措かないのである。斯

かる矛盾のために資本主義的經濟組織は自然に崩壊し、それと共に新しき共產主義がこれまた必然に起つて來ざるを得ないと、マルクスは考へたのであつた。

以上によつて經濟學の代表的學派の大體の主義をつくしたと信ずる。然し五節の社會主義經濟學のことは、或は最後に言つた方がよかつたかと思ふけれども、序だから比較的委しく述べて置いた。蓋し第三章以下に於いては、多く言ふ機會があるまいと思つたからである。

第三章 生産

一 生産の意義及び要素

抑々生産といふ文字を使ひ始めたのは、科學としての經濟學の現れる以前の經濟思想家達の中、英の重商主義に反對した佛の重農主義者であつた。彼等は重商主義者達が貴金屬を費んで

唯一の貨財としたのを排斥し、凡そ國民が富むといふのは金銀類を多く所有してゐるといふことではなくて、生活に必要な貨財を多く所有するといふことでなければならぬと主張した。彼等によれば、人間は決して新しく貨財を創り、す能力を持つてゐるものではなく、それを爲し得るものは獨り自然あるのみ。自然は吾々人類に對つて食料品を始めとして凡百の生産必需品を供給する。従つて自然を利用する農業こそは新しく貨財を産出する所以の業であつて、これこそ國富の本源といふことが出来る。即ち農業のみが生産業であつて、工業は自然が産出したる物の形を變ずるだけのもので、商業に到つては貨財の位置を變ずるだけのものに過ぎないから、何れも生産の名に値するものではないといふのである。勿論この論は正鵠を得たものではないので、アダム・スミス等の英國學派はこれを排斥して勞力を以て價値の本源と見做し、苟も勞力を以て貨財の價値を増加するものは凡て生産であると言つた。試みにこの定義にそのまゝ従へば、農業は勿論のこと、工業商業運輸業のやうに假にも勞力を用ひて貨財の價値を増加するものは皆生産的であり、さういふもののみが生産であるといふことになる。それもいゝとして、彼等はこの生産的不生産的といふ言葉を濫用して、國民經濟上に於ける有益なるものと

有害なるものとの代名詞にしてしまった。からして秋の日向でいゝ氣持に居眠りしいしい、時々鳴子の紐を引つ張るのは明かに生産的、だが敵軍の侵入を防ぐ爲の兵士の奮闘は不生産的であるから國民經濟上有害であるといふ妙な結論にまで来てしまった。のみならず貨財又は有形物件の價値を増加するものだけが社會上貴ぶべきことで、その他の例へば純粹な學問的研究等は不生産的であるが故に賤むべきことであるといふ風潮は、世人を騙つて唯物主義の弊に陥らしめるものであつた。茲に於いて歴史學派の經濟學者達は、以上の何れをも捨て、苟も價値を増加する行爲は生産であり、價値を減少せしめる行爲は消費であると説明した。とすれば、生産と消費とは行爲そのものの區別ではなくて、行爲の結果についての區別であるといふことになる。かうなると餘程變なことが起きるので、例へば或る間拔けな織物屋が今年頃はきつと素晴らしい賣行を見るだらうと思つて御高僧頭巾を澤山に製造した。然るに近頃の女の人は七分の髪にそれを被ると照る照る坊主のやうな格好になるのを嫌つて、誰も買はなかつた爲に織物屋の的が外れて收支償はずに大損をした。こんな場合に織物屋のしたことは原料としての絹糸の價値を減少さしてしまつたものであるから消費である、と彼等に從へば言はねばなら

なくなる。若しさうであれば生産しようと思つてした事が消費になつたり、反對に消費しようと思つてした事が反つて生産になつたりして、その間の區別は頗る不明瞭とならざるを得ない。茲に於いて塊國學派は諸説を斟酌して、略々當を得た見解を出してゐる。それを次に述べよう。

吾々の經濟貨財の大部分はこれを直接に自然から得るものではない。自然から直接に與へられたものを享樂貨財としようと思へば、これに勞力、自然力を加へ、また器具、機械、原料等の生産貨財を使用しなくてはならない。然るにこれ等の生産貨財も亦自然から直接に授けられるものではなく、勞力その他を加へたものである。例へば土地などといふ最も自然のままのものでも、純粹に自然のままでは多くは耕作も出來ず、況して其の他の用には役立たないのである。つまり經濟貨財の九分九厘までは自然に存するものではなくて、大なり小なりの人工を加へて始めて經濟貨財といふものは出來る。そこで、人類が或る貨財に技術的加丁を施してその形を變じ、或はそれと他の原料とを結合して、それによつてその價値を増加することを廣義の生産と言ふ。然るに現今の經濟社會に於いては、さういふ手續を施すのは一般原則として直接

に自らの欲望を満足させようといふのではなく、その加工品を賣つて多くの利潤を得ようとするのである。換言すれば現今の經濟社會に於いて生産といふのは、營利の念によつて加へられた技術上の手續のことである。だから生産といふことを狹義に考へて更にそれを分析して見るといふと、生産とは技術上から言へば天成の物體に効用を生ぜしめ、或はその効用を増加せしめることであり、經濟上から言へば營利行爲である。但し營利行爲とは利潤を得ることを直接の目的とするもので、實際に利潤が擧つても擧らなくても、乃至はその擧つた利潤を如何に使用するか等といふことは敢て問ふところではない。それ故に經濟學に於いて生産といへば農業、林業、鑛業のやうな原始産業と、それから現今の諸種の工業とも指すのであつて、商業は營利行爲であることは勿論ながら、たゞ技術上の手續を缺くからして生産とは言はれない。然し生産でない故を以て無用であるといふのは當らざるの甚しきものであることは言ふ迄もない。兎に角、生産といふ文字は經濟學上の術語であつて、それ自身に有用といふ意味を含むものではないといふのが塊國派の説であつて、先づ穩當なところであらうと思はれる。

右のやうに現今の經濟社會に於いては、生産と營利とは同一の行爲を立場を變へて見ただけ

の違に過ぎない事になるが、然し廣義の生産と營利とは全然別趣のものである。元來——廣義の——といふのは社會組織的觀念であつて人が社會に於いて貨財の効用を作り出すことを言ひ、營利とは個人經濟的觀念であつて交換經濟の下にその所得や財産を増加することを言ふのである。だからして客觀的に見れば生産と營利とは等しく貨財の價値の増加ではあるが、主觀的に見れば全く別物である。即ち生産は貨財の効用に基く價値の増加、つまり貨財の製出であるけれども、營利は貨財の効用に基かざる價値の増加、つまり貨財の轉換である。それ故に營利は交換經濟の下に於いてのみ存在し得る行爲であるに反し、生産はそれ以前の家族經濟の下に於いても存在し得るのである。ただ交換經濟時代である現今に於いては、一般の原則として生産は營利を伴ふといふに過ぎない。

生産を今日實際の有様から見て狹義に解し、その種類を少し詳しく調べて見よう。第一は自然に存在する物體の占有である。これに屬するものは採鑛、漁獵、狩獵等であり、桃太郎時代には柴刈り即ち採伐などもこれであつた。第二は所謂原始産業で一定の種類に屬する植物又は動物を、生長又は繁殖せしめる目的で爲される自然力の利用である。これには農業、園藝、牧畜、養殖、

植林等がある。第三は以上二種の生産によつて獲得したものを原料として、それを變形し又は結合する凡百の工業である。ところで、以上三種の生産によつて産出せられた貨財を、消費者に接近せしめる手段として商業及び運輸業といふものが出来て来るが、これに對して壘國學派は前に言つたやうに消極説を唱へて生産ではないといふ。然るに獨逸學派は積極説をとり、技術上の手續といふものを廣く解釋して商業及び運輸業もまた生産業であると言ふのである。何れにもせよ以上は生産といふものを内から見た區別であるが、今度は生産といふものを一纏めにして外から眺めた場合には、注文による生産と市場の偽の生産との二つに分れる。現今の生産は何れは營利と結びついて他人の爲にするものであることは論はないが、その他人の爲め直接である間接であるとの違ひは無視することが出来ない。そこで他人の注文による生産、即ち他人の注文を俟つて始めて爲す生産は、例へば印刷屋の仕事のやうなもので技術上の手續を完了して刻み上げてさへしまへば、その目的は殆んど全く達成される。然るに市場の爲の生産は他人の直接の注文を俟たずにする生産であるから、そこには常に多少の機械的分子の介在するのを免れ難い。この方の生産は原則として市場、即ち貨財を賣る者と買ふ者との集合

所に出すことを目的とするものであるからして、技術上の手續が完了してもその目的は半までも達せられて居らない。多分賣れるではあらうが、それとても確に賣れるとは限つて居らず、幾らで賣らうと思つても豫想通りの値段で賣れるとは一層限つて居らないのである。だからして市場を目的として生産するものは、常に二個の不明な分子について考慮を拂はねばならない。即ち同じ市場に於いて同じ貨財を求めようとするもの、つまり需要者の多少と、同じ市場に於いて同じ貨財を賣らうとするもの、つまり供給者の多少とである。そして供給者が少なくて需要者が多ければ比較的多くの利潤を得て比較的容易に賣ることが出来るのであらうが、供給者がばかりが多くて需要者が少い場合にはどんなことになるか。需要者といふのは或る貨財に對して欲望を感じ、且つその欲望を満足させ得る力を持つてゐて始めて需要者であるから、例へば幾ら駱駝の肩掛が欲しいと思つても買ふ金を握るまでは需要者の數には這入らない。然し幾らさういふ需要者であつても、決して好んで高いものを買はうとは思はないからして、多くの供給者が少數の需要者に各々自分の品物を買つて貰はうとすれば、勢ひ競争で價格を下げねばならぬことになり、果は生産その他の諸費用をすら回収できない事に立到らないとも限らない

のである。然るに同じ市場に於ける供給者と需要者との數及び割合は何人にも的確には解らないからして、市場の爲に生産をする者は常に一種の冒險を以て生産に當らなければならぬ。のみならず、經濟界の事情は常に變動を續けてゐるものであるから、その結果として價格も亦一高一低を免れることが出来ない故に、彼等は更に二重の危険を冒さねばならぬのである。そこで市場を目的とする生産は常に多少の機械的分子を含むといふことになつて來る。然らば投機とは何であるかといふと、これは經濟學に於いては自己の勞力によらずして單に價値の變動のみを利用して利潤を得ようとすることを指していふ。この投機は營利主義の經濟社會に於いては必ず存在する現象であつて、投機を内容とする取引を投機取引と言ひ、取引所に於ける定期取引——米相場や株相場の類——などはその適例である。定期取引といふのは賣買の契約が出来て所謂商談成立すると同時に貨財の現物を受渡するものではなく、一定の期日に到つて先に契約した價値で以て約束の貨財を引渡すとか受取るといふ遣方の商取引である。だからして定期取引をする者で、もう少し経つと或る貨財の價格が現在よりも騰貴すると考へれば、買手となつて現在の價格で例へば來月の末にその貨財を實際に買取することを約束

する。來月の末に豫想通り騰貴して居れば、前の安い價格で買ふと同時にその時の高い價格で賣り拂つてしまふから、その差額が勞せずして儲かるといふ仕組である。反對に來月末に價格が下落すると思へば、賣手となつて現在價格で來月末に貨財を渡すと約束する。けれども勿論現にその品を持つてゐる譯ではないので、豫想通りに來月末になつて値が下ればその價格で約束だけの品を買つて渡し、その代金として前の高い時分の價値を受取るからして矢張り差額が勞せずして懐に這入る。尤も一々現物を手から手に受渡しするとは限らないけれども、兎に角投機の觀念といふものは以上のやうなものである。ところで市場を目的とする生産並に營利行爲は、その種類によつて強かれ弱かれ價値變動の影響を免れることが出来ないものであるからして、勢ひ多少の投機的分子を含まない譯にはゆかないといふことになる。

市場を目的とする生産に關しては、その需要者と供給者との關係によつて生産過剰や恐慌やの現象が起ることがあるが、それは後の消費の項に於いて委しく述べることにする。

次に生産の要素であるが、生産要素といふのは生産を行ふ場合に絶対に必要なものゝ謂であ

る。然るに生産とは廣義に解して營利の爲にすると否に拘らず、或る有形物件に技術的手續を施してその形態を變改し、若くは他の原料と結合して以て其の價値を増加することであるから、如何なる原始的な生産であつても單に原料となる自然と勞力とのみではなく、何かしらの補助貨財を必要とする。これが即ち資本であつて、資本とは要するに過去の勞力の結果で未來の生産又は營利の爲に使用し又は保存する經濟貨財である。とすれば資本は自然に勞力を加へて得たもの、即ち勞力の變形したものであるから、自然及び勞力と並べて生産の要素とするのは當らない、生産要素は自然と勞力との二つに限るといふ學者もゐる。これを二要素説又は消極説といふ。現に田島博士の如きも、資本を以て生産條件と稱して生産要素とは言つて居らない。この消極説は成るほど理論から云へば正當である。理論上は正當であるが然し實際に於いては、少くも經濟組織の複雑になつた現今の經濟社會に於いては、資本の位置の重要なことは寧ろ自然及び勞力の上に及び、その經濟社會に及ぼす影響もまた前二者と頗る趣を異にするからして、實際上に於いては資本を以て生産の一要素とするのが極めて當然であると言はねばならない。斯く、自然、勞力、及び資本の三つを生産要素とする説を三要素説又は積極説といふ。

然るにこの積極説を更に積極的に擴張しようと試みる人々がある。それは右三要素の外に法律制度又は技術を要素として算へるので、彼等によれば法律制度が不備であれば生命財産の安全を期し難いから、例ひ三要素が具つて居つても満足な生産は出來ない。また技術といふものが進歩しなかつたならば、例ひ三要素が揃つて居てもこれを利用することが難かしいといふのである。勿論、法律制度の完備や技術の發達やは生産要素を活用するには有用の上でもないものではあるが、必ずしも生産を爲す上に於いて絶對的に必然的に必要であるとは言はれない。更に若し生産の要素を活用する上に有用なものを擧げて生産要素とせねばならぬといふことになれば、宗教や道徳を始めとして社會一切の現象が悉く要素となることになつて、終には經濟學の獨立の科學たる地位をすら危くする結果を見るであらう。従つてこれは生産の要素に加へないのを穩當とする。

二 自然

A 自然概説

生産の要素は自然と努力と資本とに定まつた。そこで第一の自然から順に調べて行くことにする。抑々経済學上に謂ふ所の自然とは、吾々の人類を圍繞する外界の一部並びに自然物及び自然力の一切のことである。即ち土地、動物、礦物、河海、湖沼、氣候、潮流、風位などで、全然受働的なところにその主たる特徴が存する。

自然の生産要素である所以は、即ち生産を爲すに於いて絶對的に必要である所以は、第一に自然は生産に必要な場合を提供することである。田畑がなくては農業が出来ず、河海湖沼がなくては漁業が出来ず、山野森林がなくては狩獵が出来ない。第二に自然は生産に必要な材料を供給する。自然は農業に對して植物を、牧畜に對して動物を、鑛業に對して鑛物を與へる。第

三に生産に必要な力を出すものは主として自然である。諸種の工業に於いて風力や水力乃至火力の須要なることは言ふ迄もあるまい。以上三種の要件の中、主として何れによるかによつて生産の種類が分れて來、またその種類の盛衰は三者の何れに據出するかによつて分れて來るのである。

自然を大別して土地、外圍、自然物、及び自然力の四種としよう。

B 土地

自然の中で經濟上最も重要なものは土地である。土地は山地平野、森林田畑は勿論のこと、河海湖沼等の一切即ち地球の表面を稱するのであるから、これは普通の意味に於ける土地即ち陸地よりは範圍が廣い譯である。そして土地が自然の一部として生産上に缺くべからざる所以は、第一に萬物を負擔積載する能力のあることを言ふのであるが、これは如何にも重要なことであらうが餘りに分り切つた事柄である。土地が例へば煙のやうなもので何物をも所謂負擔積載する能力がなかつたならば、生産どころか先づ第一に人間が居ないだらう。第二に土地が鑛

物等を包蔵してゐることで、これは確に生産上缺くべからざる所以である。第三は土地に植物を培養する能力があり、引いて動物を繁殖せしめる能力のあることであらう。この外に算へ立てれば種々あらうが主なるものは以上三つで、然もそれ等は第一がなければ第二第三が有り得ず、第二がなければ第三がないといふ關係になつてゐる。そして第一及び第二は純粹な自然の恵澤であつて、人力を以て如何ともすることの出来ないものであるが、第三だけは人力を以て或る程度までは如何にかすることが出来る。

農業は主として土地の植物培養力による生産であるが、この培養力を土地の生産力といふならば太古の農業は全く土地の生産力委せの農業であつた。それ故に天然自然に豊沃な土地、例へばナイル河口、チグリス・ユーフラット地方、ガンガ河口等は毎年常に豊作であるに反し、少し山地にでも這入ると比較にならない程の不作を普通とした。かういふ土地委せの農法を粗笨的農法といふ。然るに人智の進むにつれて、また人口が増加し欲望も多種となるにつれて、勞力及び資本の力によつて土地の生産力を増大しようとして試みるやうになつた。そしてナイル河口のデルマ地方で、年例の洪水を引いた後に種子をバラ蒔いて放置したやうな遺方ではなく、

肥料を施し灌溉の便を通じ、土地に合ふ種子を選んで播いて雑草を抜くといふ風な、集約的農法を採るやうになつたのである。

斯かる集約的農法によれば、確かに土地の生産力を人力によつて増進せしめることが出来ると言へる。然しその生産力は、勞力及び資本を用ひた割合に無制限に増加するものであるといふに決してさうは行かないのである。例へば或る一定の土地を耕作する場合に、十人の農夫を使つて二百石の收穫を得たとする、然るにその土地の生産力、即ち地力に尙ほ餘裕のあるのを察して農夫を二十人に増したところが五百石を擧げることが出来た。即ち前には一人の勞力に對して二十石の報酬があり、後には一人當り二十五石の報酬があつた譯である。そこで其れに力を得て農夫を三十人に増したところが、今度は地力の限度を超過した結果絶對數で六百六十石、相對數で二十二石しか取れなかつた。つまり金額では幾分増加したが勞力に對しては却つて減少を見たことになる。勞力のみならず資本について見ても、昨年幾らかの肥料を施したが爲に一段歩について三斗の増收を見たからと言つて、今年は何年の二倍の肥料を與へても六斗づつの増收を得ることが出来るとは限らない。勿論勞力についても資本についても、幾らを増

せば幾らの増収があつて幾ら以上は幾らの割合になるといふ正確なことは分らない。それは主として地力の強弱如何に係る問題であるが、兎に角その地力の最高限度に達するまでは勞力と資本とに正比例し、或はそれ以上の割合で收穫を増加することは出来るが、其の限度を過ぎると勞力と資本とを増すにつれて收穫の絶対數（全額）は幾らかづつ増加するけれども、相對數（平均額）は正比例して増加せず幾分づつ遞減するのである。これを收穫遞減又は地力遞減の法則、或は報酬遞減の法則といふ。

此の法則は頗る重大な法則で、それが經濟社會に及ぼす影響も輕くはない。先づ第一にそれが爲に農産物の價格が騰貴する傾向がある。農産物は元來原則として最悪の土地から出来る生産物によつて價格が定まるものであるが、最悪の土地と言へば勿論地力の限度を超越してゐる土地に相違ないから、そこには最も正確に收穫遞減の法則が行はれてゐる筈である。ところで人口が多くなつて需要が増して來れば、何れも兎もあれ收穫を増加する必要に迫られてゐるから、出来るだけの資本と勞力とをその土地に加へることになる。けれどもその増収は加へられた勞資に比例しないからして、従つてその土地からの農産物の價格は騰貴せざるを得ない。最

悪の土地から出る生産物の價格が上れば、引いて同種の農産物は一樣に價格騰貴するといふ關係である。そこで第二の地代發生といふことが生ずる。農産物の價格が騰貴すれば地味の劣つた土地を耕しても割に合ふやうになるから、方々を開墾する。さうなると地味の優つた土地を耕すことは頗る有利になるから、土地使用料即ち地代を出してこれを耕さうとする人が多く出る。即ち自らにして地代は生ずる譯で、その上農産物の價格が騰貴すればそれに従つて地代も騰貴して行くのは自然の道理と言はねばならない。第三には食糧問題といふ大問題が起る。收穫遞減の法則が行はれる結果、如何に勞資を増加しても常に人口の増加に比例して收穫を増すことは出来ない故に、人口が益々増加すれば農業のみではその全部を養ひ切れなくなる。そこで勢ひ其の國に工業を起して過剰の人口を工業に従事させ、その製品を外國に輸出して代りに農産物を輸入するか、乃至は過剰の人口を他の人口稀薄な國に移住させるかの、何れかを選ばねばならなくなる。但し工業には農業のやうに收穫遞減の法則は行はれず、寧ろ報酬遞増の法則が行はれるとさへ言はれるから、その點だけは先づ心配はない。然し、二者の何れを選ぶかは勿論その國の事情によつて定るべきもので、理論上から何れを可とし非としても始らな

い問題である。それに收穫過減の法則は自然界の法則で、人力では如何ともすることが出来ないとは言ふ條、農業法を改良して科學的大農法を採用するとか、有効卓抜な肥料を發明するとか、農具や農業機械を改良して水力火力電力を利用するとかによつて、幾分かは法則を加減することが出来るのである。そして法則を加減すべく便利な國もあらうし不便な國もあらう。また過剩人口を他國に移住させると言つても、植民地を持つてゐる他の統治權の行はれて居らぬ土地に統治權と共に人民を送り、そこに植民することの出来る國もあらうし、何だ彼だと難辯をつけられて他の統治權の行はれてゐる土地に、その統治權に服する覺悟でゆく移民すらも思ふに任せぬ國もあるであらう。からして「一層簡單に是非の判別を強ひる事は出来ないのである。最後に、これは土地の生産力とは餘り直接の關係のない事柄であるが、土地の利用と交通機關といふことは極めて密接な關係に結ばれてゐる。これについてフアン・テネンは『孤立國』といふ本を書いて詳密に論じてゐるが、廣漠たる土地の中央に都市があつて、その周圍の土地を利用するものとせば、都市に近いところは都市に到る交通運輸の費用が少いからして比較的集約的に農法を行つても利益があるが、都市を去ること遠くなるに従つて粗笨的農法でなくて

は割に合はなくなる。つまり都市に最も近い地域から、順にその地に行はれるものを算へるならば、先づ園藝、森林業、集約的穀物耕作、粗笨的穀物耕作、牧畜の順序になる。そして最後に荒蕪不用の地が續く。然るにその地に交通が起り、早い話が鐵道が延びてこれらの地域を聯絡することになれば、今まで粗笨的穀物耕作でなければ立行かなかつた場所に於いても、優に集約的穀物耕作乃至園藝が立行くことになるのである。即ち交通機關の發達は、土地利用の法に甚大なる影響を及ぼすものと言ふことが出来る譯である。

C 外圍と自然物と自然力

自然の中で土地に亞いで重要な生産要素は外圍である。外圍といふのは少し變な呼び方であるが、吾々を圍繞する外界の義であつて、例へば氣候、地形、水利、風利のやうなものを指す。土地は全然人力を超越するとは言はれないけれども、この外圍は原則として絶対に人力の干犯を許さない。唯だ人間は隨意にこれを利用することが出来るばかりである。

外圍と經濟生活との關係は、主として經濟地理の研究範圍に屬するからして、ここでは單に

その一斑を示すだけに止めやう。第一に地形で、モンテスキューは山間に住む人民は獨立の精神に富み、平地に住む人民は一層社會的で法治的であると言つたが、これを經濟生活に當てれば山地に於いては特殊工業が發達し平地に於いては農工業もさることながら就中商業の發達を普通とするといふことになるであらう。第二に氣候について言へば、熱帶地方は自然の恩恵に豐に過ぎて生活が容易である爲に、文化の發達は最も早いけれども人民は自然の恩恵に押れてその文明も大に伸びることが出来ない。之に反して寒帶地方は自然と戰ふことにのみ忙殺されて經濟を發達させる丈の餘裕を持たない。然るに温帶地方は自然の恩恵は左迄潤澤ではないけれども、勉強次第で必ずしも自然を利用するに事缺かない。従つて温帶地方は經濟の發達に最も適するといふことは、事實が雄辯にこれを物語つてゐるのである。第三は地位、即ち國土の位置であるが、君府とかマルセーユとか香港とか、日本で言へば長崎とか新潟とかいふ風にその位置が諸國諸地方の交通の要路に當るところには古くから仲繼商業が勃興した。けれども今のやうに交通機關の發達が著しくなれば、單に仲繼商業のみで經濟的繁榮を保つことは至難であらう。また英國が歐大陸の爭亂の餘波を受けずに、よく經濟の發達を見た如きも、全く

國土の位置の賜と言ふべきであらう。水利その他も大方この類。

自然物、自然物と言へば天地の間に自ら生ずる有形物件であつて、魚介、穀物、果根、鳥獸、礦物等のことである。この自然物にも自ら二種あつて、收得しさへすればそのまま直接に吾々の欲望を満足させることの出来るものと、そのままでは駄目だが農工業の原料として間接に吾々の欲望を満足させるものとある。魚介の類は前者に屬し礦物類は後者に屬することは論を俟たない。

自然物は礦物等について見れば分るやうに、吾々は單にこれを探取して利用することが出来るばかりであつて、人力を以て増加することの出来ないのを普通とする。然し、その位置を動かすことは或る程度までは可能で、その結果として世界に於ける自然物の分布は或る程度まで普遍的にすることが出来、現に或る物はさうなつてゐる。重商主義などは畢竟自然物の分布状態は人力によつて變更するを得るといふことを前提とするものである。

自然物と經濟との關係については、各々特別の科學を形造つてゐるものであるから茲には略

する。

最後に自然力であるが、これは豫め原始的な自然力と誘導的の自然力との二つに分れる。原始的な自然力といふのは、人間の勞力を須ひずして自然に存する力であつて、水力、風力、太陽の光力熱力等がこれに算へられる。この種の自然力の長所は、それを利用するに當つて比較的若くは全然費用を要しないことである。それと同時に甚だ困る短所もあつて、先づその力を隨時隨所に於いて利用することが出来ない。次に力量が氣紛れであつて人が自由に加減することを得ないといふ嫌がある。水が涸れては水車廻らず風落ちては風車は動かない。雨の降る日は洗濯物が出来ず、また寫眞屋の約束が反古になつたりする。

然るに火力、蒸気力、電力などの誘導的の自然力は、人間が勞力及び資本をかけて發生せしめただけに装置や設備に費用を要するのは瑕であるが、その代り隨時隨所に思ふ通りの力量で使用することが出来る。工業の發達は主としてこの自然力の發明並に利用に基くものである。そして要するに、原始的な自然力と誘導的の自然力との長所短所は、互に相反するといふことが出来やう。

三 勞 力

A 勞 力 概 説

最初に勞力とは何ぞやといふことが大問題である。これには大中小三通りの意義があつて、それを誤ると事が非常に面倒になる。先づ最廣義の勞力と言へば、或る特定の目的を達成せんが爲になされる人類の活動一切を意味する。これによれば苟も或る目的を意識して、これを達成する爲の手段としての活動であつたならば、それが精神的であらうと肉體的であらうと凡て勞力となる。だから目的を意識せずして行はれる活動は勞力ではなくて遊戯と言はれ、苟も勞力であるからには多少の苦痛、少くとも努力を伴ふものとされる。次に廣義の勞力、即ち經濟學上に謂ふところの勞力は、最廣義の勞力からして經濟上の目的を有せざるものを除外した

残りの活動のことである。換言すれば經濟上の目的を意識して、これを達成する爲の精神的並に肉體的活動が、廣義のそして經濟學上の勞力である。この廣義の勞力の中には、後に説く企業と狹義の勞力とが含まれる。然らば狹義の勞力とは何を指すかといふと、これは企業家の命によつて行ふ精神的並に肉體的活動の謂であつて、これを爲す者を勞働者と呼び、従つてこの意味の勞力は勞働力又は勞働といふのと少しも差はない。そして現今の經濟組織中にあつては、勞働者はその勞力を企業家に賣つて一定の賃銀を得ることによつて生活するのである。本書に於いては、勞力をばこの狹義の勞力（勞働）に限つて解し、資本及び企業と對立せしめるとすることとする。この勞力は生産に取つて必要缺くべからざるものである。それ故に勞働者に支拂ふ賃銀は、生産費の中の動すべからざる重要部分を占めることとなる。そこで儲けづくの企業家達は、少しでも利潤を多くしようと思ふから出来るだけ生産費を削減しようとかかり、その結果はなるべく勞働条件の方を悪くしようと思ふと欲する向が少くない。従つて勞働条件を改善して勞働者の位置を向上せしめようといふ立法に對しては、極力反對するやうな事になるのであるが、然しこれは目前の慾に眩んだ盲動と言はざるを得ない。何故となれば、第一に勞働賃銀を高くして勞

働条件を善くすれば、勞力の功程即ち所謂能率が高くなるからして、賃銀の増加は必ずしも利潤の減少を伴ふものではないのである。賃銀を高く勞働条件をよくすれば、勞働者の生活状態が改善されて智力も體力も共に進み、第一心に不平がなくなるから與へられた仕事を自分の仕事として熱心にそれに没頭する。即ち能率は上らざるを得ない。賃銀の方はその國々の生活程度によつて異なるべきであるが、勞働条件の方でいふと一日の勞働は少くもその疲勞が翌日まで持越さない程度に止めて置かねばならない。そしてこれを時間といふと、大體に於いて筋肉勞働は八時間、精神的勞働は五時間半を適當とすると言はれてゐる。つまりその程度を越えといふと、必ず能率が下るからして幾ら賃銀ばかり値切つてもその割に儲るものではないといふのである。但し、勞働者を明い中に餘裕綽々として家に歸してやると、家で内職をして働くから高給の出し損である。仕事が終わつたなら一杯呑んで寝るより外に何する元氣もない程に虐使せねば馬鹿を見るといふやうなことも、實際問題としてはあるであらう。それ故に勞働時間を短くして高給さへ出せばよいといふ譯のものではないが、原則としては今言つたやうに企業家と勞働者とは必ずしも利益が相反するものではないのである。第二に、賃銀を少くすれば社會

に多数を占める労働者の消費力を減じて従つて社會全體の消費力を少くするから、結局企業家の爲に販路を縮少する結果となつてその利潤は反つて減少する。今日の生産は社會の消費力即ち購買力を目的標準として爲されるものであるが、社會の購買力といふものは主として社會の下層にその根據を持つてゐるものである。然るに労働賃銀の減少は即ち労働者の購買力の減少であり、労働者の購買力の減退は應て社會全體の購買力の減退でなければならぬ。それ故に企業が營利である限り、労働賃銀を無暗に安くすることは畢竟自繩自縛である。

それは賃銀問題が企業に及ぼす影響の一斑であるが、次に勞力の國民經濟に及ぼす影響を見たいと思ふ。然しその影響は、勞力の數量（労働者の數）、勞力の功程（能率）、及び勞力の組織によつて色々異つて來るから、以下その順を追うて各別に説明して行くこととする。

B 勞力の數量

一國の勞力の數量は、その國民の中の労働する者の多寡によつて極まる。然るに一國の人口の大部分は労働者であるから、労働する者の數はその國の人口によつて定まる。但し労働者と人

とが正比例するものとは限らないので、人口が比較的多くても其の國の社會組織やその他の理由で、現に労働に従事する者は比較的少ないといふ場合も有り得るからである。然し大體に於いて人口が増加すれば労働者の數も増加し、従つて其の國の生産が増加することは疑ない。けれども人間は消費するものである。人口が増加すれば生産も増すが同時に消費も増す。からして人口の増加が直に國富の増進とはならない譯で、のみならず人口の増加に従つて消費額は正比例に増加することは疑ないが、生産力は決して人口の増加に比例して増加するものではないのである。寧ろ、一國の生産力はその國の生産階級の多少に比例すると言はねばならぬ。そして生産階級の多少は、生産年齢にあるものゝ多少、男女の割合、社會制度等に關係する。

生産年齢といふのはその消費するところよりも生産するところの多い年齢の意味であつて、先づ青壯年の時代に當る。然しこの生産年齢は必ずしも各國に共通するものではなく、年少から生産に従事して早く生産を切り上げる國もあれば、比較的遅くから生産に従つて遅くまで生産する國もあり、或は幼少から死ぬまで生産する慣しの國もないではない。けれども兎に角一

國の人口中に、生産年齢に達しない幼少年及び生産年齢を過ぎた老年が多ければ多いほど、その國の生産力は少くならざるを得ない。それに個人主義の行はれる國に於いては生産者が多いのみならず生産年齢が長い、家族制度の行はれる國に於いては生産者が少く且つ生産年齢が短いのは事實である。現に歐米にあつては一定の時期に達すれば親は子を養つて呉れないし、親を扶養しないのが普通であるが、家族制度が怪しくなつたとは言へ日本や波斯などでは、まだ／＼子が働き出すと同時に親は樂隠居をするやうな風が止まない。

一國の人口中に於ける男女の割合も、亦生産階級の多少に重大なる關係がある。原則として女子は男子に比較して生産することが少い。即ち一般的に言つて男子は生産階級であり女子は消費階級である。従つて人口中に男子が多ければその國の生産力が強く、反對に女子が多ければ生産力が弱いのである。それは確であるが然し、例へば植民地のやうに男が女に比して餘りに多すぎる所では、止むを得ず男子が一切の消費を取しきる事になる結果、生産も多いが消費もそれに劣らず多いといふことになる。その他にも種々の事情があるから、如何に生産力が多ければよいと言つても男ばかりが多くてよいといふものでもない。男女の数が略平均するか、

或は少しく男子の数の多い位が恰度よい割合で、現在の歐洲のやうに少し目立つて女子の方が多くなるといふと、思ひもかけない支障不都合が百出して甚だ面白からぬ社會状態となるのである。

最後に、生産階級の多少は種々の社會制度に關係し、引いて一國の生産力に關係して來る。例へば宗教や社會的な慣習やらで、労働を賤しき業とする國があるとすれば、少し位の無理をしても労働をしないやうになるから生産階級の者が少くなる道理である。維新前の日本の武士階級に於いては、ちつとして居て世襲の碌を貰つて萬事足れりとし、その外に労働をして收入の道を計る等といふことは絶対に唾棄されたものであつた。そのやうな關係が未だに中流どころ以上の階級に残つて居て、何がなしに労働を賤む風が日本にはあるやうである。それに言つた個人主義と家族制度で、現在の日本の一人前の男子で、親や妻子に稼がせることを衷心から當然と思つて晏如としてゐる者は恐らく一人もないではないかと思はれる。

これを要するに、事實の上から言つて其の國に於ける勞力の數量が多ければ、即ち生産階級が多ければそれだけ生産力が多く、不生産階級即ち消費する者が多ければそれだけ生産力が差引

かれる譯である。但し、國家には無暗に生産階級さへ多ければよいと言ふものでもなく、また不生産階級さへ少ければ賀すべしといふものでもないのは勿論である。

C 勞力の功程

勞力の功程即ち能率は國民の體格や健康によつて先づ異なる。その體格や健康やは人種や民族の歴史によつて異なるから、これは先づ止むを得ない差異であるとしても、能率は別に社會上の原因によつても高下の差の出来ることは否まれない。社會上の原因の中、勞働念慮の厚薄と勞働條件とはその主なるものであらう。

勞働念慮の厚薄を定めるものは、第一に其の社會が勞働を尊重するや否やといふことである。社會が勞働を尊重しなければ勞働念慮が薄く國民の勞力の功程が低く、従つて勞力の國民經濟に及ぼす効果が弱い。勞働を貴いものだと人も許し吾も思へばこそ、本氣に眞剣に勞働に身を入れることが出来る。従つて能率も擧るであらうが、一般に勞働を賤しいものと見做すならば已

むを得ず勞働に従事するとも、折さへあらば所謂脚を洗はうとするから力も這入らず能率も擧げられない譯である。第二には其の社會の法制が整備して、勞働した者がした丈の結果を完全に收めることが出来るかどうか、これが問題である。若しそれが不完全であれば勞働者は奴隸と幾何も異らぬこととなり、勞働者の胸に不平と恥とが絶えなから能率の擧る道理がない。第三に勞働者保護の制度、例へば工場法や勞働保險等が完備してゐるかどうかによつて、勞働念慮に厚薄の差が生ずる。この制度が整はずに勞働者は資本家の前には犬猫同様の有様であり、牛馬のやうに働か抜いても一朝働けなくなれば生活の道がないといふ事であつては、勞働者の味氣なさ心細さは容易なものではあるまい。つい自暴自棄にもなり、仕事に責任も持たなくなり、出来る限り手を抜かう樂をしようといふ風になつて勞力の功程は一向に擧らなくなつて仕舞ふのである。

勞働念慮の厚薄は、國民の體格健康ほどに不可抗的ではないとしても、それでも個々の企業家にとつては如何ともする事の出来ないところの、能率の高低に對する原因である。然るに勞働條件となると、これは決して不可抗的な問題ではなくて個々の企業家が自由に人爲的に動す

ことの出来る問題である。つまり企業家が労働条件を斯く々にすれば幾何程の能率を増進することが出来ると思すれば、即座にでもさう改めることが出来るのである。労働条件といふのは、企業家と労働者との間に成立した労働契約の内容のことで、例へば賃銀額、賃銀仕拂方法、労働時間、疾病や災厄等に於ける救済方法等のことで、これによつて企業家と労働者との關係が明になり、従つて労働者の位置が定まる譯である。そこで此の労働条件がどういふ風であれば、最も能率的であるかといふ問題になるのであるが、これは後の賃銀の條に譲ることしよう。

D 勞力の組織

家を建てるとする。先づ土臺石を据ゑつけねばならないが、甲が運んで來ようとしても動かない、乙にも動かさない、丙にも丁にも出来ない。四人が各々力を出したのだが目的は達せられず、家を建てることは断念せねばならなくなつた。然るに香を持つて來て前後に二人づつ擔

いだら譯もなく運ぶことが出来たとする。これは正に協力の賜であつて、一人が二十五づつの力を出しても如何にもならなかつた事でも、四人が同時に同じ事に二十五づつの力を出して百の力を得れば、容易に成し遂げる事が出来るのである。また同じく石を運ぶにしても、二人は先棒になり二人は後棒になつて互に分擔を定め、氣合を計つて掛聲をかけて擔ぎ上げ、調子をとつて歩度を合せ、よく連絡をとつて運ばなくては駄目である。協力はいふ言つても四人が四人、ただ無暗に力を出しさえすればよいといふものではなく、そこには分業といふことが行はれなくては満足な結果は得られないのである。この分業及び協力を指して勞力の組織と名ける。然し、今の例で見るやうに、分業と言ひ協力といふもその實質を異にするものではなく、ただ石を運ぶといふ全體的な見方をすれば協力となり、運ぶ場合の先棒後棒といふ部分的な見方をすれば分業となるに過ぎない。つまり見方の相違で、それ故に分業は協力の一種であるといふことも出来るやうし、また協力は外形でその内實は分業であるといふことも出来るやうといふものである。

仍で先づ分業であるが、これを定義すれば分業とは労働者が各々その分擔を定めて専念にこ

れに當り、其の結果を連結して以て經濟の目的を達するものを謂ふといふ事になる。これには數種類あつて、技術的分業、職業的分業、地方的分業及び國際的分業等がその主なるものと言へやう。

第一の技術的分業は狹義の普通分業であつて、即ち同一の生産又は營利事業に従事する者が、各々の分擔すべき生産手續又は事務を一定範圍に局限して、その結果を連絡結合するものを指す。かういふ分業の長所を列擧して見れば、先づ仕事の範圍が狭く限られてゐるからどうしても單純になる。従つて労働者がその技術を容易に習得することが出来るから、その爲に素養を要せずに誰にでも出来るといふ長所がある。また同一にして單純な仕事を反覆するから、労働者の技術に熟練が加つて生産額が多くなり、労働に關する方法や機械の改良、及び發明を促すことになる。それに同様の理由によつて労働者が技術に熟練すると、時間と勞力との浪費を省くことが出来て、一層生産額を増加するのみならずその品質をも優良にするであらう。最後に分業が盛になると難易強弱様々の仕事の種類が生ずるからして、労働者はその能力や長所や嗜好に應じて適當の仕事を選ぶことが出来、従つて婦人や年少者もそれ相應の仕事に就くこ

とが能るやうになる爲に、生産費を著しく節減することが出来る。然しその長所は同時に短所でもあるので、仕事が單純であり單調である爲に、労働者の精神を憂鬱にし果は健康をさへ害することが其の一。女工や少年工を使用して相當仕事を續けることが出来る爲に、さらでも餘り高からぬ労働賃銀を一層低減する傾向のあることが其の二である。さういふ譯で一家を擧げて労働に従事し得、また従事せねば活計が立たない爲に、労働者の家庭に一家團樂の樂がなくなり、そこから色々な病弊の起つて來るのが其の三。労働者は十歳やそこらから——日本では工場労働を爲すことを許す最低年齢は十二歳である——同じ單純極まる無意味な仕事にばかり固執してゐるから、どうにも融通の利かない一種の機械同然になつてしまふ。これは最も困ることの一つで、日本等ではまだ——心掛一つで労働者が労働者以外の階級に抜け出る道があるけれども、資本主義的經濟組織の殆んど極度に發達した歐米では、労働者の家庭に生れた子は労働者になり、労働者になつた者は労働者以外のものになれないといふことが、運命的な力で以て彼等を縛つて居るらしい。

技術的分業の利害は以上の如きものであるが、分業の利益のあることは言ふ迄もないからし

て、分業を行ふのはいゝが唯だその弊害を防止するだけの用意は無くしてはならない。例へば労働時間の短縮、工場衛生の勵行、女工少年工の労働の制限、それに職工組合を組織したり労働保険制を設けたりして、労働者を保護し労働者の雇主に對する隷屬的關係を少くする等、相當の用意さへあれば分業また不可ならずと言はねばならない。それに分業といふものは無制限に應用することの出来るものでもない。先づ事業の性質が分業に適して居らなくてはいけない。この意味で工業は概して分業に適するが、農業はその作業の種類、季節、天候等の關係で餘り分業に適して居らない。例へば一人で一段歩の田を作ることは譯はないが、さればと言つて一度に何百人かかつたとて種を蒔いて刈り取るまでの仕事を一日で仕上げることは出来ないのである。これに反して製紙工場に於いては、人手をさへ掛ければ襪襪が白紙に化するまでに數時間を出でない。そしてそれを日に幾度づつも毎日行ふことが出来るから、容易に分業を行ふことが出来る次第である。第二に分業を行ふについては十分に資本がなくてはならない。つまり分業によれば生産額が増加するから、その原料を供給してその製品を捌くだけの資本を準備して置かねばならぬ。第三にはその生産物に對する需要が多くなくては大规模の分業が不可能で

あり、第四には原料が豊富でなくてはならない。例へば極めて大规模の分業的實業工場を作つても、さう／＼原料のある譯のものではなく、縦しあつて盛んに製出しても右から左へと賣れる筈のものではない。

次に職業的分業であるが、これは別に社會的分業とも呼ばれ、要するに社會に於ける職業の分派である。生産事業に屬する職業が農、工、商等に分れ、各々分擔の範圍を局限して互に有無交換して經濟を營むことである。従つてこれを更に專業的生産的分業とも言ふことが出来る。

抑々職業の分化は一に經濟の進歩に基く現象である。これは何故かといふと一には經濟市場の廣くなるにつれて獨力を以て多種の生産を行はうとすれば資本を多く要し、到底その負擔に堪へなくなるからである。例へば昔は履物屋と言へば文字通り履物一切を作つたのだが、漸次草履や雪駄は分れて來ると言つた調子である。その二は生産の種類によつて自ら經營法が異なるからして、多數種類に亘つて生産經營することが困難になつて來るが爲である。兎に角、經濟の發達につれて職業的分業が増加するから、逆に職業の多寡によつて經濟の發達程度を卜する

ことが必ずしも不當ではない。とすると、獨逸に於ける職業数の六千三百餘に對して日本に於ける其れの千五百内外は甚だ名譽でない數字になつて來る。

然し職業的分業にも弊害はある。といふのは性質上凡ての職業が對等で、従つて同等の利益を受けるものではないからして、經濟上有利な位置にある者が不利の位置にある者を容めて益々不利に陥らしめ、自分だけが利益を壟斷しようとする者等がこれである。これを工業と商業とについて見るならば、昔は工業家は自分の作つたものを自分で販賣したから、その全部の利潤を手に入れることが出来たけれども、經濟市場が廣くなるにつれて工業家と商業家とが分れた結果、工業家は消費者の嗜好や市場の状況に疎くなつて、専ら商業家の注文を俟つて生産することとなつた。その爲に家内工業に於けるが如く工業家は職人で商業家は旦那といふ關係になつて對等ではなくなり、工業家は商業家の命のまゝに行動せねばならなくなつた。茲に於いて商人は横暴な振舞をなし、半金保留とか契約破棄とかを以て工業家を苦めたのであつた。この關係は外國貿易に於ける貿易業者と生産者との間にも常に行はれる。そしてかういふ弊害は經濟界が不況の場合に特に多いと言はれるが、然し罪は苦しめる者にも苦しめられる者にも

ある譯で、これが防止策としては各職業者の位置を對等ならしめ、市場を中心として互に連絡を保つより外に仕方がない。

第三は地方的分業で、これは經濟が進歩し且つ交通機關が發達するに従つて、生産を異にする各地方の間に有無相通することの謂であり、それが國際的に行はれるのが國際的分業である。この種に分業は半ば自然の状況、即ち自然的生産條件に基づくが、半ばその地方の人為的歴史的關係に基づく。例へば海岸地方からは魚や鹽が取れ、山間地方からは材木や薪炭が取れ、平野地方からは農産物が取れる等は前者の例で、これは分業と言へば分業に違はないが自然に定つたもので、山から鹽を取らうの海から米を取らうのと言つても無理な譯である。嫌でも應でも分業にならざるを得ない。また上杉鷹山公が獎勵したのが始まりで米澤機業が起り、何かの拍子から富山に賣藥製造が發達して全國に獨占的に活躍し、三河の國から日本中で使用する按火の全部が供給される等は後者の例である。然しこれも或る程度までは自然的生産條件に合致しなくては出來ることではない。例へば鷹山公は機業を獎勵したからよいやうなもの、隣の

秋田の佐竹藩に負けまいと杉の栽培を奨励したのだつたら明かに失敗であつたのである。故に要は各地の長所を利用するといふことに歸する。

斯く、一國の中に於いて各地方がその長ずるところの特殊の生産に當り、互に他地方と有無相通するならば、資本及び勞力はその生産に最も適した地方に集中するからして、従つて生産費を低く價格を廉にすることが出来る故に、國民經濟上から見れば大いに利益がある譯である。とは言へ地方經濟の見地から見れば自ら趣が異なるので、幾ら富山人でも樂ばかり呑んで生活が出来ず米澤人でも米澤船を着て野天に生活することが出来ない。それに全體として生産に適しない地方の資本や勞力が、全體として生産に適する土地に悉く流れて行くとすればその地方の死活に係る問題になるから、百方策を講じて勞資の逸出を防がねばならないといふ事になる。

最後に國際的分業であるが、これは地方的を國際的にしただけの差で、理窟の上では少しも差別はない。米露の石油、印度の胡椒、日本の絹、埃及の煙草、智利の硝石等は、その國々の自然的生産條件に従つて著しくその生産に富むもので、到底他國の眞似の出来ないものである。

る。ウィリアム・ゼ・コンカラーが和蘭陀人を招いで奨励してから英國に繅紗工業が発達し、山國で外にこれといふ生産の途がないので、瑞西に於いては時計其の他の精緻な機械製造が發達した等は、言ふ迄もなく保護奨励による歴史的關係によつて起つたものである。そして一般から言つて最も生産に適した所に世界各國の資本及び勞力が集中すれば、世界經濟から見れば、確に利益には相違ないが、世界國家が併合統一せず各國家が獨立して對立してゐる以上、さういふことになつては國民經濟上甚だ困ることになり、殊に日本などといふ國は眞先に困ることは地方的分業に於けると同様である。けれども國內と違つて國際間にあつては、言語や風俗の違、法律や制度の差、自國に對する愛國心、他國に對する不知案内、其の他種々の事情に制せられて、勞資の移動がそれほど自由にならないのは、國民經濟上から行つて勿怪の幸とせねばならない。

國際的分業の結果は外國貿易によつて連絡される。それ故に外國貿易は國民經濟にとつて必須缺くべからざるものであるが、輸出入の多少や性質によつて或る國は外國貿易上上位を占め、或る國は同じ理由によつて下風に立たねばならぬといふやうな、不對等の關係は必ず起るので

ある。尤も貿易上の位置の高下は必ずしも生産品の性質や多少にのみ係るものではなく、政治的原因も十分以上あるのであつて、從屬的國家や保護國等はそれだけ貿易上の位置に於いて損をしてゐるのは事實である。早い話が日本なども最初は所謂居留地貿易であつて、日本人の貿易商が直接に外國の市場を相手にしての貿易は出来なかつた。その爲に外人との賣買に於いて日本人には契約破棄の權利がないが外にはそれが有り、外人は契約をしてから品物と外國市場の景況とを見較べ、利益がないと思へば遠慮なく契約を破棄したものである。かういふ状態では國家としての日本が、外國貿易に於いて諸外國と對等の位置にあるとは言へない。然し勿論今日では對等である。

理論上や條約の上では對等でも、實質に於いて下位では然し何にもならない。とは言へこれは主として自然的生産條件によるものであれば、それを如何にして貿易上の位置を進めるかといふ點に外國貿易政策といふものが必要になつて来る。外國貿易は前にも言つたやうに、自國で出来ない貨財を得、自國で出来るものでも自國で生産するよりは廉く輸入することを得、自國に適した貨財の生産を盛にし、ポリーリーの言ふやうに穀價の騰貴又は饑饉に對する保險に

等しい効力を生ぜしめる等、種々の利益があるからして、一寸考へると飽くまで自由自在に貿易する方が得策のやうに考へられる。そして又現にさういふ自由貿易論を唱へる人々もあるが、然し全然自由といふのは不可ない、國家としては貿易を保護して行かねばならないといふ保護貿易論を唱へる人々もあり、貿易政策に關しては古來から二説が行はれてゐるのである。

先づ自由貿易論者の言分から聞くと、正常な交易といふものは當事者双方に利益を與へるものであつて、國民間に於いても個人間に於けるやうに自由に交易を行へば、各々長ずるところの産業を十分に發達せしめて兩國共々に利益を受けるものである。そこで若し外國人が内國人に比べて一倍優良な品を一層低廉に供給することが出来る場合、人爲的に故らにこれを自國の市場から排斥するとすれば、一部の内國生産者の爲に消費者全般の利益を犠牲にするものであつて甚だ不當である。のみならず特殊産業を保護すればするほど、その生産品の價格は騰貴するからして、國民は良い品を安く買へる筈なのを保護貿易の爲に悪い品を益々高く買はねばならなくなる。常に價格の高いのみではない、保護によつて成立した産業に於いては企業者が依頼心を起して進歩改良を怠るから、その生産品の品質が從來よくなかつた上に益々下落する傾

向がある。然し一旦成立した以上は、相當の資本と勞力とは是非とも要するが故に、例ひその産業がその國に適應したものでなくつても、その所要の勞資をばその國に適應した他の産業から幾らかづつ移して來なくてはならない。つまり不適當な産業に肩を入れて適當な産業を手薄にする。それに外國品の輸入に重税を課して輸入を少くすれば、觀面に自國産の物品の輸出も之に應じて少くなる。結局保護貿易によつてその國の産業は著しく衰退せざるを得ない。かう主張するのである。

然るに保護貿易論者にはまた相應の論據がある。先づ曰く、自由貿易論者は國際關係を以て個人間の關係と同一視してゐるやうだが、これは誤れるの甚しきものである。若し彼等の言ふが如くんば、各國が各々その長ずる所に従つて生産に従事すれば、自由貿易萬能であらうことは論を俟たないが、國際間の關係は個人間の關係と異つて、國家は全然他國に依頼して生存することは不可能である。不幸にして今は國家對立の状態にある。一朝國際戰爭でも起り、大規模の封鎖にでも遭つた日には果して如何なるか。今度の大戰の後に諸國に自給自足主義の聲の起つた事に徴しても、思半に過ぎるものがあるであらう。次に自由貿易論者は各國の有する

自然的生産條件を一定不變のものとして見てゐるらしいが、これも大きな見當違ひであつて、諄くは言はぬが現在世界の工場と稱せられる英國も、二三百年の昔に於いては純然たる農業國であつた事を考へて見るがよいのである。第三に自由貿易論者は各國の産業乃至經濟の發達程度を同一階段に見る傾があるが、これなどは最も當らない見解である。産業並に經濟の發達した國の生産物は、何に限らずその發達しない國の生産物に比較して優れてゐる。少くとも安いことは疑ない。それを自由貿易を以て安いからと言つて無暗に輸入して居ては、後進國の凡ゆる生産業は先進國の産業に壓倒されて終には拾收出來ないことになつてしまふ。これを保護貿易の立場から逆に言ひ直すならば、第一保護政策は幼稚な産業を發達せしめるに是非とも必要である。つまり經濟上に於いて、國民を教育する手段であるから、教育といふことの性質上その當座は多少の損失は免れないが、其によつて生産力を養成し、永遠に之を利用し得るとすれば將來に於ける利益は現在の多少の損失を償うて餘あると言はねばならない。第二に保護政策は國內に種々の産業を成立せしめ、多少の損得は別としても兎に角自給自足の出來るやうにさせる。不吉な豫想ではあるが、國家としては國際關係に異變を生じた場合のことをも平常

から心掛けて置かねばならない。第三に保護政策は内國の商業を盛ならしめる所以であつて、内國の商業は外國貿易に比して確實である。何者、内國商業に於いては市場が限定されてゐる故に需給の關係を知るに易く、且つ外國貿易は戦争その他の事變によつて妨害されることが多いが内國商業はその憂が少いからである。

以上を比較して見るのに、保護貿易論者に道理があるやうに思はれる。實際について見ても自由貿易を行つてゐる國は英國位のものであつて、涼しい顔をして自由貿易を唱へ得るのは全く英國のやうに經濟が著しく進歩し、他國と競争しても決して引けを取らないだけの自信を有する國に限る。經濟の發達が尙ほ幼稚の域にあり、或は重要な生産が外國との競争によつて滅びる怖のある國に於いては、國民經濟の立場から保護貿易政策に出るのは蓋し止むを得ないのである。さうして世界經濟の成立をば期待し得ない今日に於いては、當分國民經濟が基礎であるから、従つて國民經濟上已むを得ずとする保護政策は、結局止むを得ざる處置と言はねばならない。

以上、思はず長くなつたが勞力の組織の一たる分業は結つた。次は他の一たる協力である。

協力とは多數の者が協同一致して勞働することの謂であることは前に述べた。そこで協力の利益は何處にあるかといふと、これによれば個人が單獨では爲し得ない事業をも爲し遂げることが出来る。第二には多數の者が互に連絡を取つて勞働するからして、その結果に於いては各人の勞働の結果の和よりも多くなる。その協力といふ中にも二種あつて、一を結合勞力と言ひ他を集合勞力といふ。結合勞力といふのは、例へば多數の者が力を合せて重い車を押してゆくやうに、共同して勞働する者の爲す所が悉く同一なるものである。然るに集合勞力とは多數の者が分擔を異にして、共同の目的の爲に勞働することを言ふのである。からしてこれは見方によれば分業である。のみではない結合勞働と言つても、車を押すといふ點から言へば多數の爲すところが同一であらうが、然し嚴密に言つて同一のことを爲るとは言はれない。嚴密に同一の事をすると言へば、十人が十人一點に力を集めることになるけれども、それでは車は動かないのである。右端、左端、眞中、それに兩方の阿彌陀に手を掛けるもの、曳くもの、いろいろ有るべき筈であるから、矢張り集合勞力と見ることが出来、結局分業と見ることが出来

る。それ故に協力と言ひ分業と言ひ實質的に異なるものではなく、総合的に見るか分析的に見るかの差であると言ふべきである。

然る折にビュツヘルは協力の一種として集團労働といふものを擧げてゐる。これは多數の者が全く目的を異にする別々の労働に従事するのであるが、ただ労働の苦痛を忘れて能率を擧げる爲に一團となつて労働することである。例へば或る妻君が縁側で日向ぼつこをしながら裁縫してゐるところへ、隣の妻君が編物を持つてやつて來、向ふの家の妻君は刺繡の枠を擔ぎ込んて來て、春の日永を姦しく喋りながら但し愉快に仕事をした爲に、思はず拂るは拂つたが良人が勤先から腹を空かして歸つて來たのを知らなかつたといふ類でもあらうか。けれどもこれは單に多數の者が一緒に労働をするといふだけに止り、その目的が同じでないからして協力の一種と見なさないのを穩當とする。更に分り易い標準で言へば、それは如何なる見方をとつても分業にはならないからして、従つて協力と言ひ難いのである。

四 資 本

A 資 本 概 説

資本といふものは吾國の在來の呼び方で言へば『元手』である。そして元手といふ名が明かに示すやうに、これは利子（法定果實）に對する貨幣の義であつた。昔は貨幣は主として消費の爲に用ひられたから、その貸借も所謂消費信用であつて、貨幣を借りた者がそれを用ひて生産や營利を營むのではないから幾ら經つても利潤が生ぜず、その結果債務者は所定の利子は勿論元金をさへ返済するに困難を感じた爲に、中世の末葉までは諸國に於いて貸與した貨幣に對して利子を請求することを禁止した。然し其の後經濟が發達して他から貨幣を借りて利潤を得ることが起つたから、貸金に對して利子を取ることが許されるやうになり、そこで所謂元手となつた譯である。この事は貨幣に重きを置いた重商主義時代に於いて特に著しく、その時代

に於いては資本と言へば専ら貨幣に限られて居つた。今日でも漫然と資本と言へば貨幣を指すことになつてゐるのは、主としてこの歴史的關係によるのである。

資本が利子に對するものであるとすれば、果實を生ぜしめるものは土地に限ると見た重農學派にとつては、言ふ迄もなく資本は土地に限るとせねばならなかつた。けれども、其れより生ずる利子乃至果實から見て行つて、それを生ぜしめるものが資本であるといふならば、苟くもそれを用ひて結果（果實）を生ぜしめるものであつたならば理論上貨幣と土地とに限る筈のものではない。そこで今日普通の説によれば、資本とは生産若くは營利の爲に使用せられ又は保存せられるところの、勞力によつて作られたる貨財をいふことになつてゐる。つまり吾れが勞力を自然に對して加へ、これを直に欲望の満足に供せず貯蓄して置き、更にこれを生産又は營利の手段とするものが資本である。従つて重農主義者の所謂資本即ち貨幣は資金又は貨幣資本と稱へる資本の一種であり、重農主義者の所謂資本即ち土地は、一種の固定資本となるのである。

少しく詳説すれば、先づ第一に資本は生産従つてまた營利の手段であることを要する。單に

欲望の満足に使用するもの、又は單に貯蓄するものは資本とは言ひ難い。例を石炭にとつて見やう。石炭を暖房用に使用すれば單に欲望の満足に供するものであるから資本ではなく、ストーヴ用として少し買ひ溜めて貯藏して居つても資本ではない。然るに、同じ使用するにしても何か生産の爲の燃料にするとか、同じ貯藏するにしても價格の騰貴するを待つて高く賣らうとか、いふことになれば同じ石炭でも資本になる。第二に資本は勞力によつて作られた貨財であることを要する。それ故に自然のままの土地は、例ひ生産にとつて重要であつても理論上資本ではない。だから土地は原則としては資本ではないのであるが、ただ吾々はこれを資本とすることが出来る。土地を資本とすることの第一の條件は、少くとも之を利用して農工業等の生産を營み得る程度にすることである。さうすれば土地は主觀的には勿論、客觀的にも立派な資本となる。次には土地を生産若くは營利の爲に利用せんが爲に、若干の貨幣等を出して購入すれば、その土地は例ひ原野であつて全然吾々の勞力の加つて居らない土地であつても、従つて客觀的には資本ではないが主觀的乃至經濟的には資本となるのである。蓋しそれは勞力の結果と交換して始めて得たものであるから、間接に勞力の加はつたものと見做されるのである。斯

く、土地は資本とすることが出来る。出来るからして一般に土地は若干の貨幣價格のある生産手段と見て、一種の資本といふことが出来る次第である。

資本の分類はその標準によつて種々にすることが出来る。然し第一に分けねばならないのは生産資本と営利資本である。生産資本といふのは一に社會的資本とも言い、その資本の性質上未來の生産を助けるものである。この生産資本に屬するものとしては、第一に諸種の原料を擧げねばならない。原料には主原料と助原料とがあり、それらを用ひて生産した貨財に痕跡の残るものは主原料、痕跡の残らぬものは助原料であるが、何れにしても生産資本である。第二は機械器具の類で、器具といふのは比較的簡單で鋤のやうに人力を以て動かす生産の道具であり、機械は比較的複雑な構造を有する生産の道具であつて、水力、蒸気、電力等を以て動かすものである。外に度量衡等もこの種に屬する生産資本である。第三には生産用の牛馬家畜の類であつて、第四は工場其他生産に使用せられる建物である。倉庫、店舗、なども勿論これに屬するが、普通の住宅や寺院、學校、裁判所、劇場などは生産資本には這入らない。第五は交通

機關であるが、これは生産以外の目的の爲にも利用せられるが、生産の爲にも十分に利用せられる點で生産資本の一種である。第六は土地に施された改良工事、例へば排水、灌溉、開墾等は生産資本であると言へる。第七は貨幣で、之の與へる便宜は略交通機關と同様である。

生産資本に對するものは營利資本である。これは一に私經濟的資本と言はれ、單に之を所有する者から見て營利の手段たるに過ぎないもの、謂である。勿論前の生産資本と雖も、これを所有者の側から見れば營利の手段たるに相違はないが、或る營利的鐵道會社等に見るやうに、それを社會から見ても矢張り一般社會の生産を補助するものである。然るに工業家が倉庫の中に貯蔵する在庫品、商業家が店舗に保存する商品のやうなものは、資本には違ないが未來の生産を助けるものではないから生産資本ではない。即ち營利資本であつてこれを所有する者が、機を見て賣出して營利の手段にするところの資本である。

ところで生産資本は更に固定資本と流動資本に分れると言はれる。アダム・スミスによれば生産の際に所有者を改めぬものを固定資本と言ひ、之を改めるものを流動資本といふので、要するに貨幣の形の資本を流動資本とし、他の資本を固定資本とするのである。然るにリカードは

これを改めて、一回の使用に全部消失するか又は大部分を消失して生産を繼續するには之の補充を反覆する必要があるものが流動資本で、使用の度に多少は損耗するが持續的に幾回でも資本としての職能をつくし得るものが固定資本であるとした。即ち石炭は申分のない流動資本であるが蒸汽機關は明かに固定資本である譯である。然し、貨幣はどうであるか。これは流動資本の中でも最も重要な位置を占めるものであるが、一回の使用で鎔けて無くなるものではない。つまり客觀的には一回の使用で消失するものでも減るものでもないが、然し主觀的に私經濟の立場からすれば一回の使用で消滅してしまふのである。からしてこれは流動資本であるといふのである。貨幣はそれによいとして、機械類などもこれを使用する工場主から見れば固定資本であるが、之を販賣する機械商から見れば流動資本である。更に機械の職能から見れば生産資本であるが、機械製造業者の倉庫中にある機械はその所有者から見れば營利資本である。斯く見れば、固定資本と言ふも流動資本といふも、それは資本固有の性質ではなくて之に對する人に附隨する關係たるに過ぎない。即ちこの觀念は主觀的であつて客觀的ではないからして、固定資本と流動資本とは生産資本に屬するとは言はれないのである。生産營利は資本

の使用から見た分類であり、固定流動は資本の状態から見た分類に過ぎない。然し乍ら資本を固定資本と流動資本とに區別することは經濟の實際上にとつて頗る重要な事柄である。今兩者の關係を見るのに、この兩者は相俟つて其の効用を顯すことができるのであるから、兩者は常に適當な均衡を維持することを要する。この事は營に企業家にとつて必要であるばかりでなく、經濟社會全體にとつても同じことである。企業家から言へば固定資本が多過ぎて流動資本に缺乏を告げるときは、企業の經營や取引に支障を生じて巨額の固定資本を活用することが出来なくなる。また流動資本のみが多きに過ぎるときは、事業の經營や取引に困難は感じないであらうが其の代りに資本的生產の利益を擧げることが難かしくなる。からしてそこには適當の權衡の保たれてゐることが必要である。また經濟社會全體から言ふならば、固定資本が不權衡に多ければ物價は下落して利子は騰貴するから、經濟界に不景氣の現象を起させるとし、反對に流動資本が多過ぎれば物價は騰貴し、そして利子は下落するから經濟界は活氣を呈するけれども投機熱を煽り、果は信用制度を破壊して經濟社會を不健全ならしめる怖なしとせない。然し大體から言つて固定資本の増加は經濟の發達上自然の傾向で、經濟の發